

若宮遺跡

(周防畑遺跡群)

長野県佐久市長土呂若宮遺跡発掘調査報告書

昭和59年3月

長野県佐久市教育委員会



1. 若宮遺跡航空写真



1. H6号住居址（東方より）



2. H9号住居址のカマド（南方より）

序 文

佐久市教育委員会

教育長 大井昭二

人類の現在の繁栄は、先人の絶え間ない努力と幾多の試行錯誤の中で営々と築きあげられてきた賜で、その足跡を正しく復元し理解することは、即ち、現在はもちろん将来的な人類の発展・存亡に大きく関ってくるものと思います。このような先人の遺産のペールを割ぐ起因は、学術的な目的をもつことが当然ですが、緊急発掘調査という開発事業に動機づけられるものが圧倒的な数を占めているのが現状で、破壊されることが前提にあります。本年度においても市内7遺跡の発掘調査が行なわれました。保存を目的とした川越石窯址を除く他はすべて県営團場整備事業や宅地・工場団地造成に因を発し時間的にも経費的にもさし迫った緊急発掘調査でありました。さらに、調査の日程上数遺跡の併行調査を余儀なくされ限られたスタッフで臨むという、調査にあられた諸先生方々にはたいへんな御無理をお願いしました。幸いに調査員・調査協力者の方々的一致協力体制の中で、適確な調査がなされたことは、文化財保護行政の一端に携るものとしては、この上ない喜びと感謝申し上げます。

本遺跡も宅地造成に起因するところでありましたが、起業者の信濃地研寺尾佳康氏の御理解と御協力をいただいたことによって、当地方においてその類を知ることがたいへん少い古墳時代後期から奈良時代にかけての遺構が検出され、原始灰釉陶器など貴重な遺物も出土し大きな成果が得られました。本遺跡を含む周防畑遺跡群は、40万㎡を測る壮大な規模をもって弥生時代～中世の歴史を埋蔵するものであって、周防畑A・浜右衛門・周防畑B遺跡などの調査によりその一端をかいまみるだけでも佐久の古代史解明の上での有力な資料を提示しています。しかしながら、この地にしても開発の急速要求の中で保存の立場は著しい危機に陥っている状況であり、早急の保護・保存対策が迫られている昨今であります。

本調査を終りまして、ご指導・ご助言を頂いた多くの諸先生方、困難な状況下で調査にあられた調査団の皆様、調査に際し深いご理解を頂いた起業者の寺尾佳康氏に満腔の謝意を捧げまして御礼のご挨拶といたします。



例 言

1. 本書は、昭和58年9月10日～昭和58年10月26日におわたって発掘調査された、長野県佐久市大字長土呂1202-1番地に所在する周防畑遺跡群若宮遺跡の調査報告書である。
2. 本調査は、有限会社信濃地研の委託を受け、佐久市教育委員会が実施した。
3. 本調査は、林幸彦を担当者とし、佐久考古学会有志を調査員として、地元長土呂、根々井、岩村田地区の方々の協力を得て実施した。
4. 本書に挿入した遺構の実測図作成には、主に小山・早川・井出があたり、遺物の実測図作成には、小山・三石(宗)・三石(延)・佐々木・界・早川・神部・井出が担当した。また、遺構及び遺物のトレースは大井和子が行った。掲載した写真は、小山・林が撮影した。また、原稿執筆は、第三章を白倉が、他は小山・林が担当した。
5. 本書の編集は、小山が行い、林が校閲した。
6. 本遺跡の資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

また、調査にあたり、愛知県陶磁資料館学芸員赤羽一郎氏、埼玉県埋蔵文化財事業団村田建二、細田勝、今井宏の各氏、東京都埋蔵文化財センター川島雅人、山口慶一、伊藤敏行の各氏、杉並区役所本橋宏巳氏、新潟県教育委員会丸山謙司氏、茅野市永明小学校白田武正氏、小諸市教育委員会花岡弘氏、佐久市教育委員会高村博文氏、小田原市教育委員会諏訪間順氏、大和市教育委員会曾根博明、見崎巖、村沢正弘、相田薫、安藤史郎の各氏、御代田町教育委員会堤隆氏には調査にあたって適切な御指導をいただき、有限会社信濃地研寺尾佳康氏にはたいへん御協力いただいた。

記して厚くお礼申し上げます。

凡 例

1 遺構の略称

H→古墳～平安時代住居址、M→溝状遺構

2 挿図の縮尺

1) 遺構

カマド→1/30、住居址→1/80、溝状遺構→1/200(但し断面図は1/40)、全体図→1/800




2) 遺物

石製品(小型品)→ $\frac{1}{2}$ 、石製品・石器(中型、大型品)→ $\frac{1}{4}$ 、土器→ $\frac{1}{4}$

各図版にはスケールを付し、縮尺を明示した。

3 挿図中におけるスクリーン・トーンは下記のもの表わす。

1) 遺構

カマド、腕土→、灰→、住居址断面→

2) 遺物

赤色塗彩→、土師器内面黒色研磨→、須恵器断面→

4 水系レベルは各遺構ごとに明記した。

5 重複遺構については上端のみを実線で表示した。また、遺構内における攪乱については、細かい実線で上端のみを表示した。

6 写真図版の縮尺

石器、石製品→ $\frac{1}{2}$ 、土器→ $\frac{1}{4}$

7 写真図版中では遺物番号を簡略化した。例えば、第5図1は5-1と表わす。

8 出土土器一覧表の法量は上から口径、器高、底径の順に記載し、一不明、くゝ現存値を示す。

9 石器、石製品の実測は三角法を用いた。

本文目次

序文

例言

凡例

本文目次

付表目次

挿図目次

I 発掘調査の経緯

1 調査に至る動機	1
2 発掘調査の概要	2
3 発掘調査日誌	3

II 遺跡の位置と環境

III 層序

IV 遺構と遺物

1 H 1号住居址	12
2 H 2号住居址	16
3 H 3号住居址	18
4 H 4号住居址	20
5 H 5号住居址	23
6 H 6号住居址	27
7 H 7号住居址	33
8 H 8号住居址	40
9 H 9号住居址	42
10 H10号住居址	48
11 H11号住居址	52
12 H12号住居址	56
13 H13号住居址	63
14 H14号住居址	66
15 H15号住居址	68

16	H16号住居址	69
17	M1号溝状遺構	72
18	グリッド出土及び表採遺物について	74
V 総括		
1	遺構	75
2	遺物	86
引用参考文献		101

付 表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	9
第2表	H1号住居址出土遺物一覧表	16
第3表	H2号住居址出土遺物一覧表	18
第4表	H4号住居址出土遺物一覧表	22
第5表	H5号住居址出土遺物一覧表	26
第6表	H6号住居址出土遺物一覧表〈1〉	32
第7表	H6号住居址出土遺物一覧表〈2〉	33
第8表	H7号住居址出土遺物一覧表	38
第9表	H8号住居址出土遺物一覧表	41
第10表	H9号住居址出土遺物一覧表〈1〉	47
第11表	H9号住居址出土遺物一覧表〈2〉	48
第12表	H10号住居址出土遺物一覧表	50
第13表	H11号住居址出土遺物一覧表	55
第14表	H12号住居址出土遺物一覧表	62
第15表	H13号住居址出土遺物一覧表	65
第16表	H14号住居址出土遺物一覧表	67
第17表	H15号住居址出土遺物一覧表	68
第18表	H16号住居址出土遺物一覧表	70
第19表	M1号溝状遺構出土遺物一覧表	73
第20表	表採遺物一覧表	74
第21表	若宮遺跡住居址一覧表	76

挿 図 目 次

第1図	若宮遺跡地形図、及び発掘区設定図……………	1
第2図	佐久平地質図……………	5
第3図	周辺遺跡分布図……………	10
第4図	層序模式図……………	11
第5図	H1号住居址実測図……………	12
第6図	H1号住居址カマド実測図……………	13
第7図	H1号住居址出土遺物実測図〈1〉……………	15
第8図	H1号住居址出土遺物拓影図……………	15
第9図	H1号住居址出土遺物実測図〈2〉……………	15
第10図	H2号住居址実測図……………	17
第11図	H2号住居址カマド実測図……………	17
第12図	H2号住居址出土遺物実測図……………	17
第13図	H3号住居址実測図……………	19
第14図	H3号住居址出土遺物拓影図……………	19
第15図	H4号住居址実測図……………	20
第16図	H4号住居址カマド実測図……………	21
第17図	H4号住居址出土遺物実測図……………	22
第18図	H4号住居址出土遺物拓影図……………	22
第19図	H5号住居址実測図……………	23
第20図	H5号住居址カマド実測図……………	24
第21図	H5号住居址出土遺物実測図……………	25
第22図	H5号住居址出土遺物拓影図……………	25
第23図	H6号住居址実測図……………	27
第24図	H6号住居址カマド実測図……………	28
第25図	H6号住居址出土遺物実測図〈1〉……………	29
第26図	H6号住居址出土遺物実測図〈2〉……………	31
第27図	H6号住居址出土遺物拓影図……………	31

第28図	H 6号住居址出土遺物実測図〈3〉	33
第29図	H 7号住居址実測図	34
第30図	H 7号住居址カマド実測図	35
第31図	H 7号住居址出土遺物実測図〈1〉	36
第32図	H 7号住居址出土遺物拓影図	37
第33図	H 7号住居址出土遺物実測図〈2〉	37
第34図	H 8号住居址実測図	39
第35図	H 8号住居址カマド実測図	40
第36図	H 8号住居址出土遺物実測図	40
第37図	H 9号住居址実測図	42
第38図	H 9号住居址カマド実測図	43
第39図	H 9号住居址出土遺物実測図〈1〉	45
第40図	H 9号住居址出土遺物実測図〈2〉	46
第41図	H10号住居址実測図	49
第42図	H10号住居址カマド実測図	50
第43図	H10号住居址出土遺物実測図	51
第44図	H10号住居址出土遺物拓影図	51
第45図	H11号住居址実測図	52
第46図	H11号住居址カマド実測図	53
第47図	H11号住居址出土遺物実測図	54
第48図	H11号住居址出土遺物拓影図	54
第49図	H12号住居址実測図	57
第50図	H12号住居址カマド実測図	58
第51図	H12号住居址出土遺物実測図〈1〉	60
第52図	H12号住居址出土遺物実測図〈2〉	61
第53図	H12号住居址出土遺物拓影図	61
第54図	H13号住居址実測図	63
第55図	H13号住居址出土遺物実測図	64
第56図	H13号住居址出土遺物拓影図	64
第57図	H14号住居址実測図	66
第58図	H14号住居址出土遺物実測図	66
第59図	H15号住居址実測図	68

第60図	H15号住居址出土遺物実測図	68
第61図	H16号住居址実測図	70
第62図	H16号住居址出土遺物実測図	71
第63図	M1号溝状遺構実測図	72
第64図	M1号溝状遺構出土遺物実測図	73
第65図	若宮遺跡表採土器実測図	74
第66図	若宮遺跡遺構全体図	77
第67図	若宮遺跡古墳時代後期～奈良時代土器分類図〈1〉	
第68図	若宮遺跡古墳時代後期～奈良時代土器分類図〈2〉	
第69図	若宮遺跡古墳時代後期～奈良時代土器分類図〈3〉	

図 版 目 次

図版 一	若宮遺跡航空写真	3	H4号住居址出土遺物
図版 二	1 若宮遺跡全体写真(東方より)	4	H3号住居址(東方より)
	2 全体写真(東方より)	図版 六	1 H4号住居址(南方より)
	3 全体写真(南方より)		2 H4号住居址カマド完掘
	4 スナップ		3 H5号住居址(南方より)
図版 三	1 H1号住居址(東方より)		4 H5号住居址遺物出土状態
	2 H1号住居址(北方より)		5 H5号住居址カマド完掘
	3 H1号住居址カマド	図版 七	1～8 H5号住居址出土遺物
	4 H1号住居址カマド	図版 八	1 H6号住居址(東方より)
	5 H1号住居址カマド完掘		2 H6号住居址カマド
図版 四	1 H1号住居址出土遺物	図版 九	1 H6号住居址遺物出土状態
	2 H1号住居址出土遺物		2 H6号住居址遺物出土状態
	3 H1号住居址出土遺物		3～5 H6号住居址出土遺物
	4 H1号住居址出土遺物	図版 十	1～6 H6号住居址出土遺物
	5 H2号住居址(西方より)	図版 十一	1～9 H6号住居址出土遺物
図版 五	1 H2号住居址出土遺物	図版 十二	1 H7号住居址(西方より)
	2 H3号住居址出土遺物		2 H7号住居址カマド

- | | | | | |
|--------|-----|-----------------|--------|-----------------|
| 図版 十三 | 1～8 | H7号住居址出土遺物 | 2 | H14号住居址カマド |
| 図版 十四 | 1 | H8号住居址(南方より) | 3 | H14号住居址カマド |
| | 2 | H8号住居址カマド(南方より) | 4 | H14号住居址出土遺物 |
| | 3 | H8号住居址出土遺物 | 図版 二十五 | 1 H15号住居址(西方より) |
| 図版 十五 | 1 | H9号住居址遺物出土状態 | 2 | H15号住居址出土遺物 |
| | 2 | H9号住居址遺物出土状態 | 3 | H15号住居址出土遺物 |
| | 3 | H9号住居址カマド | 4 | H16号住居址(南方より) |
| 図版 十六 | 1 | H9号住居址カマド | 図版 二十六 | 1 H16号住居址遺物出土状態 |
| | 2 | H9号住居址カマド(真上より) | | (北方より) |
| | 3～8 | H9号住居址出土遺物 | 2 | H16号住居址出土遺物 |
| 図版 十七 | 1～4 | H9号住居址出土遺物 | 3 | H16号住居址出土遺物 |
| 図版 十八 | 1 | H10号住居址(南方より) | 4 | H16号住居址出土遺物 |
| | 2 | H10号住居址(西方より) | 5 | H16号住居址出土遺物 |
| | 3 | H10号住居址カマド完掘 | | |
| | 4 | H10号住居址出土遺物 | | |
| 図版 十九 | 1 | H11号住居址(南方より) | | |
| | 2 | H11号住居址カマド | | |
| 図版 二十 | 1～8 | H11号住居址出土遺物 | | |
| 図版 二十一 | 1 | H12号住居址(南方より) | | |
| | 2 | H12号住居址カマド及びピット | | |
| | 3 | H12号住居址カマド | | |
| | 4 | H12号住居址遺物出土状態 | | |
| 図版 二十二 | 1～9 | H12号住居址出土遺物 | | |
| 図版 二十三 | 1 | H13号住居址(南方より) | | |
| | 2 | H13号住居址出土遺物 | | |
| | 3 | H13号住居址出土遺物 | | |
| | 4 | H13号住居址出土遺物 | | |
| | 5 | H13号住居址出土遺物 | | |
| 図版 二十四 | 1 | H14号住居址(南方より) | | |

I 発掘調査の経緯

1 発掘調査に至る動機

佐久市大字長土呂において、有限会社信濃地研による宅地造成事業に際して、周防畑遺跡群中の若宮遺跡の破壊が余儀なくされたので、緊急に発掘調査し、記録保存することとなった。



第1図 若宮遺跡地形図及び発掘区設定図

2 発掘調査の概要

- ・遺跡名 周防畑遺跡群若宮遺跡
- ・所在地 長野県佐久市大字長土呂1202-1番地
- ・発掘期間 昭和58年9月10日～昭和58年10月26日
- ・整理期間 昭和58年11月1日～昭和59年2月
- ・調査団の構成

(事務局)

教育長 戸塚平一郎(昭和58年10月退任) 大井昭二(昭和58年11月就任)

教育次長 大井昭二(昭和58年10月退任) 森泉郁太郎(昭和58年11月就任)

社会教育課長 並木 進

社会教育係長 相沢幸雄

社会教育係 関本 功

〃 林 幸彦

〃 細萱健一(昭和58年7月就任)

社会教育指導員 森泉かよ子

小山岳夫、三村美穂子(昭和58年12月退任)、大井和子(昭和59年1月就任)

(調査団)

団 長 藤沢平治 北佐久農業高等学校教諭 日本考古学協会員

調査担当 林 幸彦 佐久市教育委員会社会教育課 日本考古学協会員

調査主任 小山岳夫

調査員 井出正義、井上行雄、大井今朝太、佐々木宗昭、島田恵子、白倉盛男、原田政信、森泉かよ子、由井茂也(以上佐久考古学会員)、三石宗一

協力者 青木久子、井出百合子、小山いづみ、角田きくよ、角田並子、東条友子、徳田モト、神津春子、早川俊彦、巽益子、神部妙子、大井和子、関口きく子、御園孝子、河西恵美子、高畑富美子

3 発掘調査日誌

- 9月10日 晴れ 遺跡存在確認のため、現地踏査。現況の写真撮影を行う。
- 9月18～19日 器材の搬入を行う。
- 9月20日 雨 重機の搬入を行う。
- 9月21日 曇り 重機運転開始。耕作土除去。遺構確認面の把握を行う。
- 9月22日 雨 耕作土除去作業。プラン確認によって堅穴住居址を2軒検出。グリッドの設定。
- 9月23日 晴れ 重機休み。H2・3住の掘り下げ開始。H3住はほぼ掘り下げを終了する。
- 9月24日 雨 耕作土除去作業。H4・9住掘り下げ、H3住の写真撮影を行う。
- 9月26日 曇り 耕作土除去作業。H4・9住掘り下げ、H3住の平面図作成を行う。
- 9月27・28日 雨(台風) 室内作業を行う。
- 9月29日 晴れ 重機による耕作土除去作業終了。H4・9住水没のため、H1・8住を掘る。
- 9月30日 晴れ H1・8住のセクション図作成、H10住の掘り下げ開始。
- 10月1日 晴れ H1住写真撮影、H8住床面精査、H10住ベルト除去、H7住掘り下げ開始。
- 10月3日 晴れ H7・12住の掘り下げ、H2のセクション面の清掃。
- 10月4日 晴れ H7・12セクション図作成ののち、ベルト除去。H4住掘り下げ。
- 10月5日 曇り H4・11の掘り下げ、H7床面精査、H9セクション図、H1平面図作成。
- 10月6日 晴れ H5・11・14掘り下げ、H9床面精査、H4セクション、H12平面図作成。
- 10月7日 晴れ H4・7・8・9・10・14写真撮影、H5セクション、H8・9平面図作成。
- 10月8日 雨 H4・10平面図作成、H6・11・13掘り下げ、H5住床面精査。
- 10月9日 曇り H8・10カマド調査。その他、多くの住居址の写真撮影。
- 10月10日 晴れ H4・8・10エレベーション図、カマドセクション図作成。H7・13・15の掘り下げ、H5・7の平面図作成、写真撮影、H1のカマド調査を行う。
- 10月11日 晴れ H7・8・9・10・12カマド調査、H11・13写真撮影、H15・16の掘り下げ。
- 10月12日 晴れ H6・11・2・13・15写真撮影、H6平面図、H9カマド平面図作成。
- 10月13日 晴れ H4・5・6カマド調査、H6エレベーション図作成、M1の掘り下げ開始。
- 10月14日 曇り H7・8・10カマド調査、H14・15・16平面図作成、写真撮影。
- 10月25日 晴れ H9・11・1のカマド調査、H13平面図、H2・11エレベーション図作成。
- 10月26日 晴れ H2のカマド調査、M1の人骨取り上げののち、全体図を作成し、発掘終了。
- 昭和58年11月 遺物洗い及び註記、復元作業、遺構図面修正・トレスを行なう。
- 昭和59年2月 遺物実測・トレス、原稿執筆及び割付を行ない、編集作業の後、報告書刊行。

II 遺跡の位置と環境

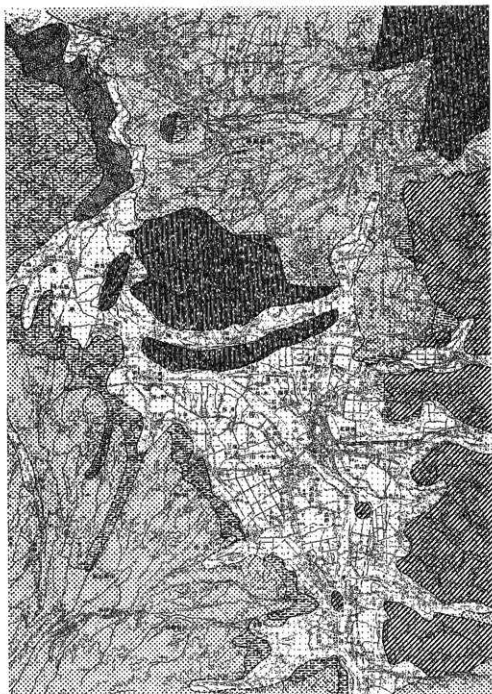
1 若宮遺跡付近の自然環境（地形地質を中心として）

佐久平の北を画している浅間火山（2560m）は火山国日本の代表的なコニーデ式三重火口を持つ活火山で現在も活発な活動を続けており佐久の自然にも人文にも大きな影響を及ぼしている。近代になって噴火災害が南方の佐久地方に及んでいないので活火山の猛威を忘れられ易いが今回の若宮遺跡の調査やこの附近の地形地質を考察すると佐久市中込原以北の佐久平は浅間火山の噴出物の堆積地帯であると言い得る。浅間山は標高1000m以上の山腹は傾斜が急で人類居住には適していないが、それ以下は傾斜が緩やかで耕地や村落が拓け南方標高700m内外の佐久平まで平坦地が続いている。この浅間山腹に水源を持つ蛇堀川・濁川・湯川は何れも南流して佐久平の北半を灌溉して千曲川に流入している。ところがこれらの川の流域はすべて浅間火山の新しい噴出堆積による泥流・火山砂礫・火山灰・浮石の分布地帯で流水浸蝕に頗る弱いため火山裾野特有な“田切地形”が見事に発達している。西方小諸懐古園から東は佐久市安原付近まで浅間山頂を中心として放射状に大小数十の田切があり、前記の水源の分流や各地からの湧水が田切の谷の底を流れて人類生活の適地を作っている。若宮遺跡はこの広大な田切地形の中心部の特に大型田切の集中している小諸・佐久市の境界に近い佐久市長土呂近津の二つの田切に夾れた丘陵部に立地する。

この若宮附近の地質構成は最下部基盤は洪積層淡水堆積の火山集塊凝灰岩・火山灰砂層が厚く互層しており、その上部の一部には黒斑火山の爆発火口からの熱泥流の流下残滓物の集塊泥流の一部が薄く重なっている部分もある。これはここより南部中佐都塚原を中心として分布する数十の島山状の流れ山を作っている集塊熱泥流溶岩の塚原泥流が流下通過地に残滓したもので黒斑溶岩の礫も含んでいる。最上部は層厚約2m内外の軽石を含む火山灰流が重なって地表を形成している。この火山灰流は第一追分火山灰流と命名されており浅間山南麓に広く分布する軽石を多量に含む火山砂礫火山灰の堆積層で黒斑火山の活動期の噴出物で相当長期に亘って堆積しつづけその間に一回の休止期のあった事も今回の発掘地層面が物語っている。即ち発掘地層断面図の地表より120cm内外下面第V層（断面図）は有機質の黒色土主体で極小浮石を含み粘性に富む黒色土層50cmの堆積層が実証している。

若宮遺跡は浅間火山の追分第一火山灰流堆積中に立地している。詳細には追分第一火山灰流の堆積中期の一時休止期の後に形成された遺跡と言い得よう。

この附近から小諸市三岡駅付近までは火山灰流地帯で昔から赤松の適地で長大直幹赤松の美林地帯として知られ、幅広い田切内部は水田の最も早くから拓けた所でもあった。



- 火山泥流
- 沖積層
- 火山岩
- 洪積層
- 旧火山岩
- 小諸層群

第1圖 佐久平地質圖 (1:100,000)
 一原圖作製
 白身承認番号昭50第56号

2 遺跡の歴史的環境

若宮遺跡の東を流れる濁川・湯川流域は、周防畑・円生坊・浜右衛門・鷺林等、古くから著名な遺跡として知られた地域である。これらの遺跡はそのほとんどが、佐久平に特有な田切り地形をひかえた台地上に位置し、若宮遺跡もその例外ではない。

これらの遺跡を時代別に概観すると、縄文時代の遺跡は山麓を控えた北側へ向って徐々に遺跡数を増加させている。小諸市では宮ノ坂・大塚原・池ノ上・谷地原・城下等、佐久市では南近津・周防畑・芝宮・下小平・鳴沢等の遺跡で存在が予想されているが、正式な調査による遺構の検出例は乏しく、相対的に縄文時代の遺跡が希薄であることが伺われる。

弥生時代に入ると遺跡は急激に増加する。

中期は、後半に位置づけられる遺跡が主体を占める。立地は、台地、微高地の先端部に位置する傾向があり、小諸市では城下、佐久市では琵琶坂・長土呂・近津・上の城・北西久保等の遺跡が知られている。特に北西久保遺跡（1）では40軒に及ぶ住居址が、台地の先端部を中心として全面に展開されていた。また、上の城遺跡群西八日町遺跡（2）でも6軒の住居址が検出され、かつて佐久平では僅少と言われた中期の資料も漸増している。

後期の遺跡は、濁川流路を馬蹄状に取り囲んで位置する。小諸市では池ノ上・谷地原・和田原、佐久市では芝宮・近津・南近津・西近津・琵琶坂・長土呂・周防畑・栗毛坂・岩村田・上の城・一本柳・下小平・円正坊・北西久保・西一里塚等の遺跡があげられる。西一里塚遺跡では、環濠と11軒の住居址（3）、北一本柳遺跡では7軒の住居址（4）、円正坊遺跡群清水田遺跡では9軒の住居址（5）、下小平遺跡では5軒の住居址と方形周溝墓（6）、周防畑B遺跡では23軒の住居址と円形周溝墓2基、土壊墓17基（7）、西近津遺跡で1軒の住居址（8）、上の城遺跡群西八日町遺跡で1軒の住居址（9）、北西久保遺跡で24軒の住居址等（10）、多くの住居址、墓址が発掘調査で検出されており、当地域が弥生時代において重要な居住空間であったことが推察される。

古墳時代前・中期の遺跡は下小平遺跡で前期の方形周溝墓（11）、北西久保遺跡で前～中期の住居址、9基の古墳址（12）が検出されているが、相対的に遺跡は希小である。尚、北西久保遺跡は中期（和泉併行期）の堅穴住居址が主体を占めるが、燃焼施設として炉址が使用されており当地域におけるカマドの出現は現状資料では後期まで待たねばならない。

後期になると上の城遺跡群上の城遺跡で15軒（13）、西八日町遺跡で49軒（14）、下小平遺跡で1軒、東一本柳遺跡で5軒（16）清水田遺跡で3軒（17）、北近津遺跡で4軒（18）、西近津遺跡で3軒（19）の住居址、小諸市から佐久市にわたる曽根城遺跡では1軒の住居址が発掘調査されている。これら古墳時代の遺跡も弥生時代と同様に濁川流路を取り囲むように分布し、奈良・平安時代の遺跡もこれと重複する。

後期古墳群は馬蹄状に分布する集落群よりも内側に存在する傾向にある。

奈良時代の遺跡は、関東を中心とした奈良時代土器研究の進行によって、当地域でも、奈良時代と認知される遺跡が漸時増加している。周防畑A遺跡で1軒(21)、周防畑B遺跡で18軒(22)、西八日町遺跡で15軒(23)、曾根城遺跡で6軒(24)の住居址が検出されている。また、上の城遺跡でも正確な軒数こそ知り得ないが、相当数の住居址の検出が考えられる(25)。

平安時代の遺跡は上の城遺跡で34軒(奈良時代住居址も含まれる)(26)、西八日町で77軒(27)、北西久保遺跡で9軒(28)、北一本柳遺跡で10軒(29)、東一本柳遺跡で数軒(30)、周防畑B遺跡で18軒(32)、曾根城遺跡で6軒(33)の住居址が検出されている。特に上の城から西八日町に至る上の城遺跡群は古墳時代後期～平安時代の堅穴居址の超過密地域として注目される。

中世では王城・黒岩城・石並城の3城からなる大井城址(34)と上の城址が著名である。

以上のように濁川濁川周辺は特に弥生時代中期後半から平安時代に連続と連なる佐久平でも最も広大で密集した遺跡群であることが多くの発掘調査や、分布調査によって明らかになっている。若宮遺跡もこれらの成果から、あらかじめ弥生後期～平安時代に至る集落址、基址の存在が予想された。

註

- (1) 佐久市教育委員会 1980 『北西久保』
- (2) 佐久市教育委員会によって昭和58年度調査された。現在、整理作業進行中である。
- (3) 臼田武正 1974 『佐久市岩村田西一里塚遺跡発掘調査概報』
- (4) 佐久市教育委員会 1972 『岩村田一本柳一佐久市岩村田一本柳遺跡緊急発掘調査概報』
- (5) 佐久市教育委員会 1981 『清水田』
- (6) 佐久市教育委員会 1981 『下小平遺跡』
- (7) 佐久市教育委員会 1981 『周防畑B遺跡』
- (8) 佐久市教育委員会 1971 『佐久市長土呂西近津遺跡緊急発掘調査概報』
- (9) 前掲註(2)
- (10) 前掲註(1)
- (11) 前掲註(6)
- (12) 前掲註(1)
- (13) 佐久市教育委員会 1974 『うえのじょう一佐久市岩村田上ノ城遺跡調査概報一』
- (14) 前掲註(2)
- (15) 前掲註(6)
- (16) 東京大学によって調査されたが詳細不明である。

- (17) 前掲註(5)
- (18) 佐久市教育委員会 1972 『北近津・戸坂』
- (19) 前掲註(8)
- (20) 小諸市教育委員会 1983 『曾根城遺跡』
- (21) 佐久市教育委員会・佐久考古学会 1979 『周防畑遺跡』
- (22) 前掲註(7)
- (23) 前掲註(2)
- (24) 前掲註(20)
- (25) 前掲註(13)
- (26) 前掲註(13)
- (27) 前掲註(2)
- (28) 前掲註(1)
- (29) 前掲註(4)
- (30) 前掲註(16)
- (31) 前掲註(21)
- (32) 前掲註(7)
- (33) 前掲註(20)
- (34) 佐久市教育委員会 1981 『大井城址』

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	立地	時代				備考
				縄文	弥生	古墳	歴史	
1	宮ノ原遺跡	小諸市御影宮ノ原	微高地	○			○	
2	大塚原遺跡	小諸市御影大塚原	*	○			○	
3	池ノ上遺跡	小諸市御影池ノ上	*	○	○		○	
4	谷地原遺跡	小諸市御影谷地原	*	○	○		○	
5	和田原遺跡	小諸市和田和田原	*		○		○	
6	野火付遺跡	小諸市御影野火付	*				○	
7	野火付古墳	小諸市御影野火付	*			○		S56年度調査
8	宮根城遺跡	小諸市御影新田西端	*				○	S57年度調査
9	城下遺跡	小諸市和田城下	*	○	○		○	
10	周防細道跡群	佐久市長上呂	*	○	○	○	○	佐分No.7
	若宮遺跡	佐久市長上呂字若宮	*		○		○	佐分No.7-3 本調査
	周防細上遺跡	佐久市長上呂字周防細上	*				○	佐分No.7-1 S54年度調査
	周防標本遺跡	佐久市長上呂字周防標	*		○	○	○	佐分No.7-2 S55年度調査
11	前田遺跡群	佐久市小田井字前田	平地		○	○	○	佐分No.2
12	鉤師塚遺跡	佐久市小田井字鉤師塚	*		○	○	○	佐分No.3
13	宮根城遺跡	佐久市小田井字宮根城	?	○	○	○	○	佐分No.4
14	近津遺跡群	佐久市長上呂字近津	微高地		○	○	○	佐分No.5
	北近津遺跡	佐久市長上呂字北近津	*		○	○	○	佐分No.6-1 S46年度調査
15	芝宮遺跡群	佐久市岩村町字芝宮	*	○	○	○	○	佐分No.8
	芝宮遺跡(第1~3次)	佐久市岩村町字芝宮	*	○	○	○	○	佐分No.8-1・2・3・4 S54・55・57年度調査
16	長上呂遺跡群	佐久市長上呂	*		○	○	○	佐分No.9
17	栗毛塚遺跡群	佐久市岩村町字栗毛塚	*		○	○	○	佐分No.10
18	跡坂遺跡群	佐久市岩村町字跡坂	*		○	○	○	佐分No.11
19	西近津遺跡群	佐久市長上呂字西近津	*	○	○	○	○	佐分No.29
	西近津遺跡	佐久市長上呂字西近津	*		○	○	○	佐分No.29-1 S46年度調査
20	円正跡遺跡群	佐久市岩村町字円正跡	*	○	○	○	○	佐分No.39
	清水田遺跡	佐久市岩村町字清水田	*		○	○	○	佐分No.39-1 S53年度調査
21	長上呂跡群	佐久市長上呂字城	*				○	佐分No.40
22	鹿把坂遺跡群	佐久市岩村町字鹿把坂	*	○	○	○	○	佐分No.41
23	西赤塚遺跡	佐久市岩村町字西赤塚	*		○	○	○	佐分No.43
24	大井城跡	佐久市岩村町字古城	*		○	○	○	佐分No.51 S54・55年度調査
25	岩村田遺跡群	佐久市岩村田	*		○	○	○	佐分No.52
26	西一里塚遺跡群	佐久市岩村町字西一里塚	平地		○	○	○	佐分No.92
	西一里塚遺跡	佐久市岩村町字西一里塚	*		○		○	佐分No.92-1 S48年度調査
	熊田遺跡	佐久市岩村町字熊田	*		○		○	佐分No.92-2 S48年度調査
27	鳴澤遺跡群	佐久市根ノ井字鳴澤	*	○	○	○	○	佐分No.96
28	北西久保遺跡	佐久市岩村町字北西久保	丘陵		○	○	○	佐分No.98 S44・45・54・57年度調査
29	上砂田遺跡	佐久市岩村町字上砂田	微高地		○	○	○	佐分No.101
30	宮の後遺跡	佐久市岩村町字宮の後	*		○	○	○	佐分No.104
31	一本柳遺跡群	佐久市岩村町字一本柳	丘陵		○	○	○	佐分No.105
	東一本柳遺跡	佐久市岩村町字東一本柳	段丘		○	○	○	佐分No.105-1 S43年度調査
	北一本柳遺跡	佐久市岩村町字北一本柳	*		○	○	○	佐分No.105-2 S47年度調査
32	上の城遺跡群	佐久市岩村町字上の城	*	○	○	○	○	佐分No.117
	上の城遺跡	佐久市岩村町字上の城	*			○	○	佐分No.117-1 S48年度調査
	上の城丹通遺跡	佐久市岩村町字丹通	*				○	佐分No.117-2 S54年度調査
	西八日町遺跡	佐久市岩村町字西八日町	*		○	○	○	佐分No.117-3 S58年度調査
33	下原遺石遺跡	佐久市岩村町字下原遺石	*				○	佐分No.118

34 常川原遺跡群 35 下原遺跡 36 久保田遺跡 37 新沢遺跡 38 熊野遺跡 39 上小平遺跡 41 下小平遺跡 42 蛇塚A遺跡 43 蛇塚B遺跡 44 根ノ井大塚古墳 45 鹿野古墳 46 上鳴澤古墳群 1~3号古墳 47 高平山古墳 48 跡田古墳 49 園山古墳 50 東一本柳古墳 51 北西久保古墳群 52 松古墳 53 松の木遺跡 54 岩井遺跡 55 蛇塚古墳



第3図 周辺道跡分布図 (1:25,000)

III 層 序

若宮遺跡は、標高713~714mを測り、南西に向って傾斜する。東には濁川、西には蛇堀川が南流し、広大な近津・周防畑・芝宮等の遺跡群はこの両河川に挟まれた台地上に営まれている。この台地の旧状は察し難いが、各所で谷が入り込み、樹枝状を呈していたことが周防畑B遺跡等の調査で明らかになっている。若宮遺跡は、南西に向う傾斜地上に存し、更に30m程西方には低湿地帯が広がっていることを勘案すれば、旧状では台地の縁辺部、もしくはそれに近い位置にあったことが推察できる。



第4図 層序模式図

発掘区における全体層序はほぼ一律で安定していると認められたため、基本層序の抽出は南端の中央一箇所で行った。各層の説明は下記の通りである。

- 第I層 淡茶褐色土層（耕作土） 小砂粒・パミスを含み、粘性は極めて弱い。
- 第II層 暗褐色土層 小砂粒・パミスを含み、粘性は弱い。
- 第III層 茶褐色土層 砂質赤色ローム粒子主体で、小砂粒・パミスを含む。粘性は弱い。
- 第IV層 明茶褐色土層 砂質赤色ローム層。粘性弱くもろい。
- 第V層 黒色土層 有機質の黒色土主体で極小さいパミスを含む。粘性は強い。
- 第VI層 黄褐色土層 黄褐色ローム層。粘性は極めて強い。
- 第VII層 砂礫層 砂礫が堅くしまる。

第I層耕作土は傾斜に沿って北東で薄く、南西に向う程厚く堆積する。第II層は遺構の掘り込み面及び遺構覆土の最上層であったと考えられる。第I層との判別が困難である上、耕作による影響が大きく、第II層上における遺構確認は不可能であった。このため遺構確認は、第IV層明茶褐色土層上で行った。第III層は当遺跡の堅穴住居址内覆土の主体土で、ほぼ全遺構に認められた。第III・IV・V層は堅穴住居址の壁体、V・VI層は床面として利用されている。以上、遺構の構築はII・IV~VI層内において行われ、VII層砂礫層まで達する遺構はみられなかった。

IV 遺構と遺物

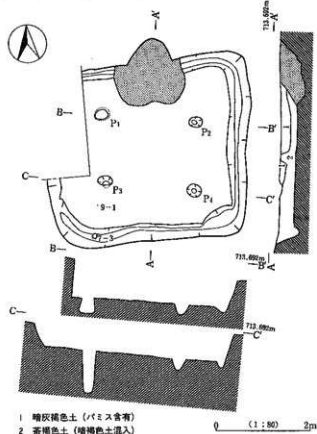
1 住居址と溝状遺構

1) H1号住居址

遺構（第5・6図、図版3の1～5）

本住居址は発掘区の中央東寄りのお・か・き-15・16グリッド内の緩傾斜地に位置し、全体層序第IV層明茶褐色土層上において検出された。

平面形態は南北375cm、東西420cmの隅丸方形を呈するが、北西コーナーから西壁の大半にかけて攪乱が床面まで達している。主軸方向はN-1'-Eを示す。



第5図 H1号住居址実測図

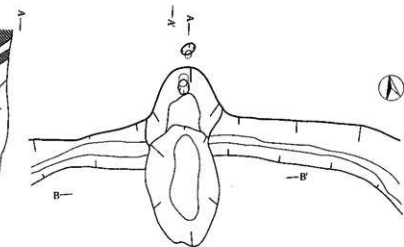
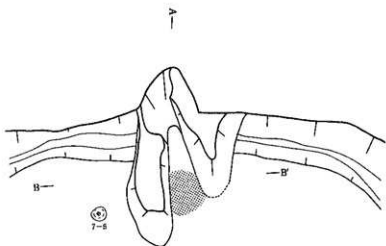
覆土は2層に分割され、第1層は後世の攪乱層、第2層は砂質赤色ローム主体の茶褐色土である。

確認面からの壁高は35～59cmを測り、東から西へレベルを低下させている。壁体は上位で砂質赤色ローム層（全体層序第IV層）、下位で黒色土（第V層）を利用して堅固に構築され、床面からはほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝は壁直下をほぼ全周すると思われる。壁溝巾は12～27cm、深さ7～14cmを測り、断面はU字状を呈する。

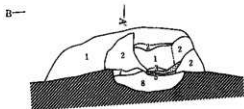
床面は黄褐色ローム層上に貼床が施される。貼床は砂質赤色ロームをベースに灰・黒

- 1層 茶褐色土
(灰含有)
- 2層 淡褐色土
(粘土主体)
- 3層 灰褐色土
(灰全伴)
- 4層 赤褐色土
(砂質ローム)
- 5層 暗褐色土
(灰と炭化物粒子)
- 6層 黒褐色土
(炭化物主体)
- 7層 黄褐色土
(黄色ローム主体)
- 8層 暗褐色土
(粘土層含有)



N
100m

713.822m
—B'



0 (1:50) 1m

第6図 H1号住居址カマド実測図

色土を混ぜた土で平担かつ極めて堅固に構築される。

ピットは南東コーナーから1個、主柱穴4個が検出された。南東コーナーのピットは壁溝と交わり、80×42cmの楕円形を呈し、深さは19cmを測る。主柱穴は比較的整然と配される。P₁は30×23cmの円形を呈し、20cmの深さを有する。断面形はほぼU字形を呈する。P₂は21×27cmの楕円形を呈し、32cmの深さを有する。底面の径が平面形の径より大きいため断面は台形を呈する。P₃は32×18cmの楕円形を呈し、90cmの深さを有する。断面形は長いU字形を呈し、南方向へ若干オーバーハンドしている。P₄は31×28cmの円形を呈し、25cmの深さを有する、断面形は逆台形を呈している。

カマド（第6図、図版三の3～5）

カマドは北壁中央にあり、焚口～煙道部までの長さ163cm、巾79cmを測る。残存状況は良好で構築状態はほぼ把握できる。煙道部は67×50cmの舟先状に緩い傾斜で掘り込み、更に径9～10cm、長さ40cm程の孔を穿って構築される。火床面は直下の床面を92×57cmの長楕円形に30cm掘り窪めた後、内部に暗褐色土（第8層）を充填し、更に砂質ローム（第4層）を平担に敷きつめて形成したと考えられる。天井・袖部及び奥壁底面は、橙褐色粘土（第2層）を構材として馬蹄状に構築されている。天井部は崩落しているため、器設部は明らかでないが、袖部の残存状況は良好で50cm程の厚さで台形状に堅固に構築されている。袖部内面、天井部、煙道部とも高熱をうけたためか赤変が著しく、長期間にわたる使用が想起される。尚、本址のカマドは粘土のみを使用し、石材等は全く使用されていない。

遺物の出土状況

遺物の出土量は少なく、分布状況もカマド内及びその周辺部に集中する他は散漫である。図化した第7図1・2・4・5がカマド内、第7図3が南壁西寄りの壁溝内、第9図8の竈鉢車が南西コーナーの床面上から出土している。

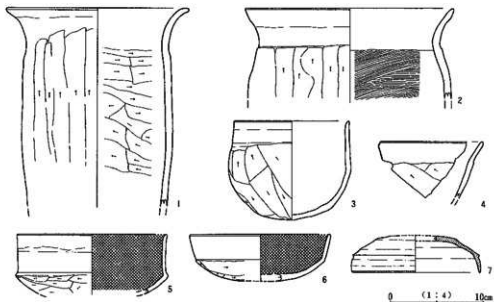
遺物（第7・8・9図、図版四の1～4）

本住居址からは土師器片、須恵器片、石製品が検出されている。このうち図化し得たのは土師器6点、須恵器1点、石製品1点である。

土師器の器種には、甕・鉢・甌・杯がある。甕は第7図1・2があり、いずれも器厚が厚く、口辺部に最大径を有し、長胴を呈すると考えられる。外面には縦位のヘラケズリが施される。鉢は、第7図3がある。壺に近い器形であるが、明確なヘラケズリが施されることから鉢とした。

甌（第7図4）は、胴部にヘラケズリが施される。類例は市道遺跡の第7号住居址の出土遺物に見出すことができる。

杯には第7図5・6がある。いずれも口辺部と底部の境に明確な稜を有し、偏平な丸底を呈するが、7-5は口辺部が直立するのに対し、7-6は口辺部が外傾する。



第7図 H1号住居址出土遺物実測図



第8図 H1号住居址出土遺物拓影図

須恵器の器種には、
 甕・蓋がある。
 甕はいずれも胴部破
 片で、櫛描波状文が施
 される（第8図1）と

外面に格子目叩き、内面に円弧文様が見られる（第8図2）が
 出土している。

蓋（第7図7）は天井部と口辺部の境に形骸化した稜を有す
 る。調整は内外面ロクロコナダが施された後、天井部の上位
 に回転ヘラケズリが加えられる。

石製品は、滑石製紡錘車（第9図1）が出土している。断面
 は歪みの著しい台形状を呈し、器面全体に擦痕がみられ、長期
 にわたる使用が考えられる。



0 (1:2) 5cm

第9図 H1号住居址石製品実測図

本住居址の所産期は、土師器が器厚の厚い長胴甕、と明瞭な
 稜を有する坏など鬼高式土器の特徴を有し、須恵器も蓋に陶邑

II期の特徴が見い出せることから、古墳時代後期の中～後半に位置づけるのが妥当であろう。

第2表 H1号住居址出土遺物一覧表

発掘 番号	部種	流量	形 状 の 特 徴	調 査	備 考
7-1	瓦	(19.5) (2.1) —	最大径を口辺部にもつ。胴部は若干ふくらむがほぼ長円を呈す。	外面 口辺部ヨコナゲののち胴部に縦位のヘラケズリを施す。 内面 口辺部ヨコナゲののち胴部に横位のヘラケズリを施す。	胴下部の調整は磨滅が著しいため不明。カマド内。回転実測。
7-2	瓦	(22.4) (9.5) —	口辺部は「く」の字状に外反する。胴部は若干ふくらむ。	外面 口辺部ヨコナゲののち胴部縦位のヘラケズリを施す。 内面 口辺部ヨコナゲののち胴部横位の刷毛調整を施す。	胎土は粗い。フタ土内。回転実測。
7-3	鉢	12.2 10.5 —	口辺部は僅かに内傾するがほぼ直立する。胴部～底部はほぼ平円状を呈する。	外面 口辺部ヨコナゲののち胴～底部に斜位のヘラケズリを施す。 内面 口辺部ヨコナゲののち胴～底部にナガを施す。	胎土は粗く色調も暗い。カマド内。完全実測。
7-4	瓶		口辺部は僅かに外反する。胴部は内湾気味である。	外面 口辺部ヨコナゲののち胴～底部に斜位のヘラケズリを施す。 内面 口辺部ヨコナゲののち胴部にナガを施す。	胎土は粗く色調も暗い。カマド内。部分実測。
7-5	坏	(15.8) (5.3) 外縁径 (16.2)	底部と口辺部の境に明確な境を有する。口辺部は長く、ほぼ直立し、底部は扁平な丸底を呈する。	外面 口辺部ヨコナゲののち底部に横位のヘラケズリを施す。 内面 黒色研磨。	胎土は比較的精選されている。色調は暗い。回転実測。カマド内。
7-6	坏	(14.8) (4.9) 外縁径 (13.7)	底部と口辺部の境に明確な境を有する。口辺部はほぼ直線的で、底部は扁平な丸底を呈する。	外面 口辺部ヨコナゲののち底部は横位のヘラケズリを施す。 内面 黒色研磨。	胎土は比較的精選されている。回転実測。フタ土内。
7-7	蓋 (柄)	(13.7) (4.9) 外縁径 (13.5)	天井部と口辺部に形骸化した縁を有する。口辺部は、僅かに内湾し、天井部は丸味を帯びる。	外面 天井部から口辺部にかけてヨコナゲ（左回転） 内面	胎土はきめ細かく精選されている。天井部には自然釉が付着。回転実測。フタ土内。

2) H2号住居址

遺構(第10・11図、図版四の5)

本住居址は発掘区の南西端の平坦地、け・こー20・21グリッド内に位置し、全体層序第IV層上においてH3号住居址と重複して検出された。新旧関係は本址→H3の順序で、本址はH3によって南西コーナーから西壁の一部を破壊される。

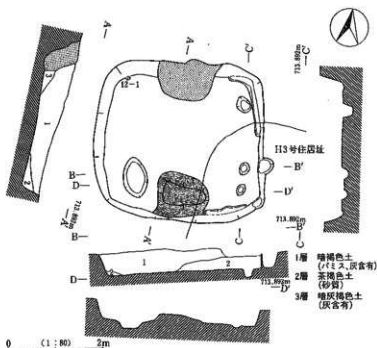
平面形態は南北334cm、東西356cmの整った隅丸方形を呈し、主軸方向はN-9°-Wを示す。

覆土は3層に分割された。第1層はパミス・灰を含有する暗褐色土、第2層は砂質赤色ロームを主体とする茶褐色土によって構成される。第3層は灰を主体とし、カマドに関連する土である。

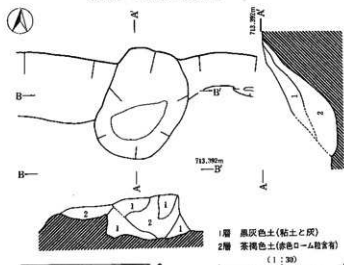
確認面からの壁高は28～59cmを測る。壁体は上から砂質赤色ローム層(第IV層)、黒色土層(第V層)を利用し、平滑で堅固に構築される。また、床面からはほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝は北東コーナー部と南壁前半部において検出された。壁溝巾は8～20cm、深さ1～2cmを測り、断面はU字状を呈する。

床面は黒色土層(第V層)上全面に3～4cmの厚さで貼床が施され、東から西へ向って若干傾斜するがほぼ平坦である。貼床は砂質ロームに黒色土を混ぜた土を叩きしめて堅固に構築されている。また、南壁中央下には灰と暗褐色土を混ぜた土が16cm程の厚さで115×95cmの楕円状に堆積している。この堆積土は堅く踏み固められて、床面に密着する様相を呈していた。このような現



第10図 H2号住居址実測図



第11図 H2号住居址カマド実測図



第12図 H2号住居址出土遺物実測図

象は住居廃絶後の堆積とは解し難く、使用中の堆積であることは想像に難くない。堆積土が灰主体と有機質土の相違点を除けば同様の例は東京都中山谷遺跡第2号住居址(小田・ギダ-1975)佐久市市道遺跡(前原・大橋・川島 1976)、東京都南大谷遺跡(村田 1982)等で詳細に観察され報告されている他、本年度調査された佐久市西八日町遺跡でも認められている。

ピットは北東部から1個(P₁)、南西部から1個(P₂)、南東部から2個(P₃・P₄)検出されている。規模・形態からみて柱穴と考えられるのはP₁のみで、36×31cmの不整円形を呈し、深さは24cmを測る。P₂は86×51cmの楕円形を呈し、深さは17cmを測る。P₃・P₄はそれぞれ27×22

cm、25×18cmの円形を呈し、15・13cmの深さを有する。

カマド(第11図)

カマドは北壁中央に位置し、焚口～煙道までの長さ約100cm、袖部の巾約80cmの規模を有したと考えられる。本体は既に崩落

第3表 H2号住居址出土遺物一覧表

神国 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 査	備 考
12-1	高台付杯 (銅)	14.6 4.3 9.5 台径 9.5	口辺部は若干内湾気味で底面はほぼ平砥。 台部は逆台形状を呈す。	内外面ともロクロヨコナデ調整のもの、外面の口辺下部には回転ヘラケズリを施す。更に高台貼付の後、ヨコナデを施す。内面の底面はナデが加えられる。	粘土は精選されている。 完全実測。

しているため、旧状は明らかでないが、天井・袖部の構材として、黒色粘土と灰を混ぜた土（第1層）を用いたと考えられる。火床部にあたる焼土は検出されていない。煙道部は壁体を20cm程、掘り込んで構築され、その直下の床面には深さ10cm程の楕円形の掘り込みがみられた。

遺物の出土状況

遺物の出土量は極めて少なく、総数でも8点しか検出されていない。北西コーナー部の壁際の覆土上層から第12図1が検出されている。

遺物（第12図・図版五の1）

本住居址からは土師器片、須恵器片が出土している。

土師器の器種には甕がある。胴部に縦位のヘラケズリが施される小片が出土している。

須恵器の器種には甕・高台付杯がある。高台付杯第12図1はロクロヨコナデのもの、口辺部下に回転ヘラケズリ（右回転）を施し、丁寧な調整を行っている。甕には外面に格子目印き、内面に円弧文様がみられる胴部破片があるが図化はしなかった。

本住居址の所産期を積極的に肯定する遺物は、須恵器高台付杯1点にすぎないが、奈良時代と考えるのが妥当であろう。

3) H3号住居址

遺構（第13図・図版五の4）

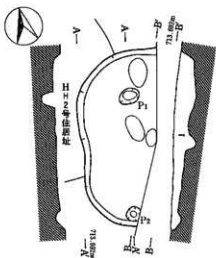
本住居址は発掘区の南東端付近・こー21グリッド内に位置し、全体層序第IV層明茶褐色土層上において検出された。遺構の東半部は発掘区外のため未調査である。新旧関係はH2→本址の順序で、本址はH2を破壊する。

平面形態は南北370cmを測り、隅丸方形を呈すると考えられる。

覆土は砂質赤色ロームを主体とする茶褐色土のみによって構成される。

確認面からの壁高は5～30cmを測り、東から西に向かってレベルを低下させる。壁体は砂質赤色ローム層（第IV層）とH2号住居址の覆土第1層を利用して構築されるがやや軟弱で緩く傾斜して立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

床面は砂質赤色ローム層（第IV層）とH2号住居址の覆土第1層上の全面にわたって貼床が施される。貼床は砂質赤色ロームを主体として黒色土を混ぜた土を叩きしめて構築されるが、起伏が激しく、軟弱である。住居北側では1箇所、中央部では2箇所の攪乱がみられる。



1層 茶褐色土(バミス、小礫含有)

0 (1:80) 2m

第13図 H3号住居址実測図

で図示できない。

須恵器の器種には甕・杯がある。

甕には、外面に平行叩き、内面に円弧文様が施される第13図1・2と、外面に平行叩きのみ施される第13図3がある。

杯には、底部の回転糸切り痕が明瞭な第13図4がある。

本住居址の所産期は、須恵器の特徴から平安時代前～中頃と考えられる。

ビットは北部と南部から各1個ずつ検出された。住居内での位置、また規模・形態から柱穴と規定することはできない。P₁は46×34cmの楕円形、P₂は32×30cmの円形を呈し、それぞれ26・10cmの深さを有する。

カマドは検出されていないが、未調査区の北壁に存在が予想される。

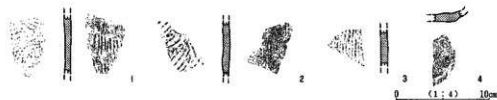
遺物の出土状況

遺物の出土量は極めて少なく、散布する程度である。

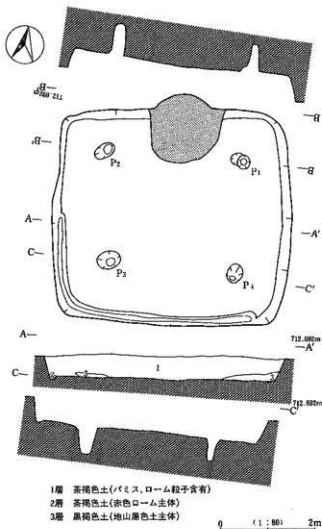
遺物 (第14図・図版五の3)

本住居址からは土師器片、須恵器片が出土している。

土師器の器種には甕・杯があるがいずれも小片



第14図 H3号住居址出土遺物拓影図



第15図 H4号住居実測図

4) H4号住居址

遺構(第15・16図、図版六の1・2)

本住居址は発掘区の南西部け・こ・さー2・3・4グリッド内に位置し、全体層序第IV層明茶褐色土層上において検出された。本位置は発掘区の中でも最も低位な緩傾斜地である。

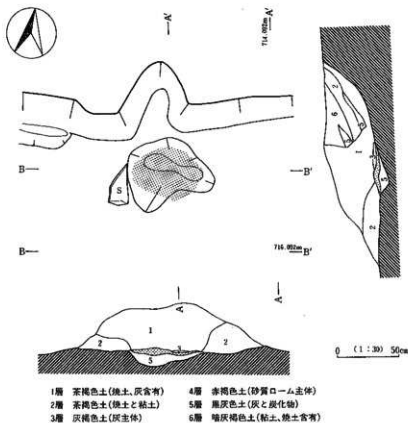
平面形態は南北460cm、東西508cmの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-12'-Wを示す。

覆土は3層に分割され、プライマリーな堆積状態を示す。第1層は砂質赤色ロームを主体とする茶褐色土、第2層は砂質赤色ローム層(第IV層)を利用した壁の崩落層、第3層は地山黒色土を主体とした黒褐色土である。

確認面からの壁高は42~50cmを測り、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁体は上から砂質赤色ローム層(第IV層)、黒色土層(第V層)を利用して平滑に構築されるが、やや軟弱で崩れ易い。壁溝は南西コーナーから南壁下のほぼ全域に巡っている。壁溝巾は11~16cm、深さは10cm前後を測り、断面はU字状を呈する。

床面は黒色土層(第V層)上に砂質赤色ロームに茶褐色の粘質土を混ぜた土を叩きしめ、平坦かつ堅固に構築されている。

ビットは支柱穴が4個整然と検出された。P₁は42×30cmの楕円形を呈し、西方で一段のテラスを有する。深さは58cmを測り、断面は漏斗状を呈する。P₂は46×29cmの長楕円形を呈し、深さは



第16図 H4号住居址カマド実測図

67cmを測る。断面形はU字状を呈する。P₃は50×40cmの楕円形を呈し、深さは59cmを測る。断面形はU字状を呈する。P₄は35×40cmの円形を呈し、深さは50cmを測る。断面形は漏斗状を呈する。

カマド

カマドは北壁中央にあり、焚口ー煙道部までの長さ140cm、袖部の巾145cmの規模を有する。残存状況はあま

り良好でない。煙道部は壁体を長さ120cm、巾115cmの半円状に緩い傾斜で掘り込んで構築する。火床部は壁下の床面を不整形に24cm程掘り込んだ後、灰・炭化物（第5層）を埋めもどし、更に黄褐色ローム（第4層）を敷きつめて設けられる。天井・袖部は既に崩落しているため旧状はつかめないが、粘土と暗褐色土を混ぜた土（2・4層）によって構築されたと考えられる。尚、西側の袖部には大型の角礫がみられ、補強材として使用されたものと考えられる。

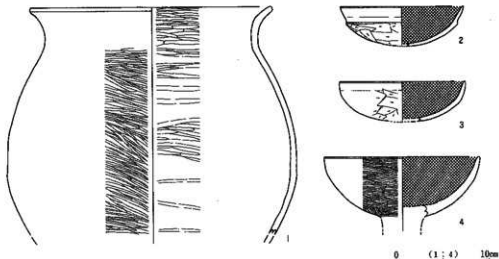
遺物の出土状況

遺物の出土量はあまり多くない。分布状況はカマド内に集中する他は散布する程度である。図示した第17図1・2がカマド内、第17図3・4がフク土内からの出土である。

遺物（第17・18図、図版五の2）

本住居址からは土師器片、弥生土器片が出土している。

土師器の器種には、甕・坏・高坏がある。



第17図 H4号住居址出土遺物実測図

壺第17図1は、最大径を胴部中位に有し、球形胴部を呈する、変形土器に近い器形である。外面調整は、口辺部ヨコナデの後、胴部は全面にわたって斜・横位の丁寧なヘラミガキが施され、光沢を帯びている。内面にはナデが施されたのち、やや粗いヘラミガキが横位に加えられるが、口辺部は横して緻密で丁寧なのに対し、胴部はより簡略な調整となっている。壺はこの他、図示できなかったが、胴部に縦位のヘラケズリが施される、器厚の薄い長胴壺の小片も検出されている。

坏は、口辺部と底部の境に稜を有し底部にはヘラケズリが施される第17図2と、素口縁で丸底を呈し、底部にヘラケズリが施される第17図3がある。

高坏第17図4は口辺部～底部にかけてほぼ半円状を呈し、内面には一段の稜を有する。外面調整は坏部の全面にわたって、横位の丁寧なヘラミガキが施され、光沢を帯びている。脚部は欠損しているが、柱状を呈するものと考えられる。



第18図 H4号住居址出土遺物拓影図

第4表 H4号住居址出土遺物一覧表

採回番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
17-1	壺	(25.6) (24.0)	最大径は胴部中位に有する。 口辺部は外反し、胴部は球形を呈する。	外面 丁寧なヘラミガキが施される。 内面 刷毛調整ののちヘラミガキ。	粘土は精選されている。回転変調。コマドリ内。
17-2	坏	(13.1) (4.2)	底部と口辺部の境に明瞭な稜を有する。口辺部は若干内湾気味で外傾し、底部は扁平な丸底を呈する。	外面 口辺部ヨコナデののち、底部ヘラケズリ。 内面 黒色研磨。	粘土は粗い。回転変調。コマドリ内。
17-3	坏	(13.3) (4.2)	素口縁を呈し、底部は扁平な丸底となる。	外面 口辺部ヨコナデののち、底部ヘラケズリ。 内面 黒色研磨。	粘土は精選されている。回転変調。コマドリ内。
17-4	高坏	(16.6) (6.4)	坏部のみ。口辺部～底部にかけてほぼ半円形を呈する。内面に一段の稜を有する。	外面 口辺部～底部まで丁寧なヘラミガキ。 内面 黒色研磨。	粘土は精選されている。回転変調。田区ヲア土門。

第17図 2・3・4にはいずれも内面に黒色研磨が施される。

弥生土器は赤色塗彩が施される坏片・櫛描波状文が施される甕片（第18図1）が出土している。

以上、弥生土器は覆土中からの出土で本址の構築年代と直接関わるとは考え難い。従って本住居址の所産期は出土土器から古墳後期～奈良時代初頭と考えられる。

5) H 5号住居址

遺構（第19・20図、図版六の3～5）

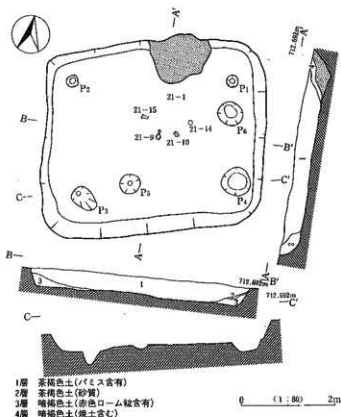
本住居址は発掘区の西端中央か・きー1・2・3グリッド内に位置し、全体層序第IV層明茶褐色土層上において検出された。

平面形態は南北408cm、東西470cmの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-15°-Wを示す。

覆土は4層に分割され、プライマリーな堆積状態を示す。第1層はレンズ状に堆積する砂質赤色ロームを主体とする茶褐色土、第2層は砂粒の流れ込みで、第3層は壁際に逆三角形状に堆積する暗褐色土である。第4層は焼土を含有し、カマドの流出層と考えられる。

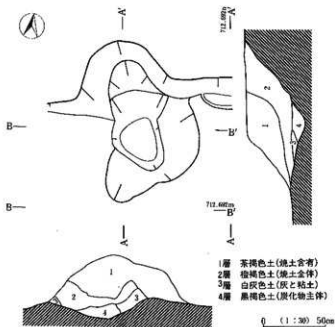
壁高は33～51cmを測り、床面から緩く傾斜して立ち上がる。壁体は上から砂質赤色ローム層（第IV層）、黒色土層（第V層）、黄褐色ローム層（第VI層）を利用して構築されるが、やや軟弱で壁面も凹凸が激しい。壁溝は検出されなかった。

床面は黄褐色ローム層（第IV層）の全面にわたって貼床が施される。貼床は砂質赤色ロームに茶褐色土を混ぜた土



- 1層 茶褐色土（バミス含有）
- 2層 茶褐色土（砂質）
- 3層 暗褐色土（赤色ローム粒含有）
- 4層 暗褐色土（焼土含む）

第19図 H 5号住居址実測図



第20図 II5号住居址カマド実測図

をたたきしめて平坦に構築されるが、カマド周辺を除くとやや軟弱であった。

ピットは住居四隅から各1箇、東壁下中央から1箇、南壁下中央西寄りから1箇、計6箇が検出された。住居四隅のP₁~P₄は位置関係からみて支柱穴と考えたいが、規模・形態に統一性を欠き、深度も不十分であることから即断は避けておきたい。P₁は25×25cmの円形を呈し、深さ10cm、P₂は25×24cmの円形を呈し、深さ10cm、P₃は58×39cmの楕円形を呈し、深さ28cm、P₄は60×64cmの円形を呈し、深さ16cmを測る。断面形はP₁・P₂がU字状、P₃・P₄が逆台形状を呈する。P₅は45×39cmの円形を呈し、深さは6cm、断面形は偏平な円形を呈する。P₆は48×54cmの円形を呈し、深さ18cm、断面形はU字状を呈する。

カマド

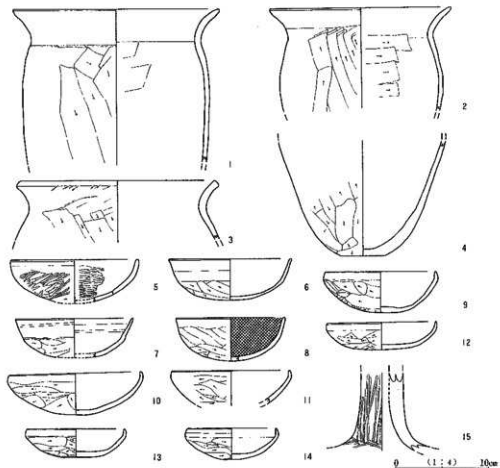
カマドは北壁中央のやや東寄りにあり、長さ100cm、巾115cmの規模を有する。残存状態は非常に悪い。煙道部は壁体を80×50cmの半円状に緩い傾斜で掘り込んで構築され、火床部は壁下の床面を85×60cmの不整形に掘り窪めた後、灰（3層）、炭化物（4層）を埋めもどして設けたと考えられるが、火床にあたる焼土は検出されなかった。天井・袖部は崩壊が激しく旧状は不明である。構材は、黄褐色ローム（2層）と灰と粘土の（3層）を用いたと考えられる。

遺物の出土状況

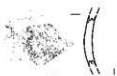
遺物の出土量は少ないが、完存品の割合が高い。分布状況はカマド及びその周辺部、住居中央部の床面上に集中する傾向が看取される。図示した第21図2・7・13がカマド内及びその周辺部、第21図1・5・6・9・10・15が住居中央の床面上、第21図11・12がⅢ区覆土内から出土している。

遺物（第21・22図、図版七の1~8）

本住居址からは土師器片、須恵器片、弥生土器片が出土しており、土師器片の割合が極めて高



第21図 H5号住居址出土遺物実測図



第22図 H5号住居址
出土遺物拓影図

い21-3に分けられる。

杯には外面にヘラミガキが施される第21図5とヘラケズリが施される第21図6-14がある。器形的には素口縁で丸底を呈する21-5・8、口辺部と底部の境に僅かに稜を残す21-6・7、口辺部が内傾し、扁平な丸底を呈する21-9-14に分けられる。

い。

土師器の器種には壺・杯・高杯があり、杯の量が非常に多い。

壺には第21図1・2・3・4があり、いずれも器厚が薄く、胴部に縦位のヘラケズリが施される。口辺部に最大径を有し、長胴を呈する21-1・2・4と胴部に最大径を有し、球胴に近い

第5表 Ⅱ5号住居址出土遺物一覧表

発掘 番号	器種	数量	器 形 の 特 徴	測 量	備 考
21-1	壺	(21.8) (10.2) —	最大径は口辺部にある。口辺部は弓状に外反し、胴部は軽くふくらむ。	外面 口辺部ヨコナゲののち胴部は肩位のヘラケズリが施される。 内面 口辺部ヨコナゲののち胴部はヘラケズリ、更にナゲが加えられる。	胎土は精選される。 回転実測。
21-2	壺	(19.2) (11.0) —	最大径は口辺部にある。口辺部は「く」の字状に大きく外反し、胴部は軽くふくらむ。	外面 口辺部ヨコナゲののち、胴部は肩位のヘラケズリ(丁寧)が施される。 内面 口辺部ヨコナゲ。胴部ヘラケズリののちナゲが加えられる。	胎土は精選されている。回転実測、カマド内。
21-3	壺	(20.6) (6.2) —	最大径は胴部にあると思われる。口辺部は短かく外反し、胴部はふくらむと思われる。	外面 口辺部ヨコナゲののち胴部は肩位のヘラケズリが施される。 内面 口辺部ヨコナゲののち胴部はナゲが施される。	胎土はあまり精選されていない。回転実測、アツナ。
21-4	壺	— (12.1) 4.6	胴~底部のみ。胴部は軽くふくらむと思われる。底部は平底。	外面 胴部は肩位のヘラケズリ、底部もヘラケズリが施される。 内面 ナゲが施される。	胎土は粗い。 カマド付近。
21-5	杯	(13.4) — —	素口縁を呈し、底部は丸底となる。	外面 口辺部ヨコナゲののち、底部は横位のヘラケズリが施され、更に粗いヘラミガキが加えられる。 内面 口辺部ヨコナゲののちヘラミガキが施される。	胎土は粗い。 回転実測。 EWPベルト内。
21-6	杯	13.0 4.4 —	口辺部は外傾するが直線的で、底部は扁平な丸底(平底に近くなる)を呈する。口辺部と底部の境に僅かに段が残る。	外面 口辺部ヨコナゲののち、底部は横位のヘラケズリが施される。 内面 口辺部ヨコナゲ。胴部はナゲが施される。	胎土は精選されている。完全実測。 EWPベルト内。
21-7	杯	(12.4) (4.1) —	口辺部と底部の境に段を残す。口辺部は外傾するが直線的で底部は扁平な丸底を呈する。	外面 口辺部ヨコナゲののち、底部はヘラケズリが施される。 内面 口辺部ヨコナゲ、底部はナゲが施される。	胎土はあまり精選されていない。 回転実測。 カマド付近。
21-8	杯	(11.4) 4.6 —	口辺部は短く直線的で、底部は丸底を呈する。	外面 口辺部ヨコナゲののち、底部は上半でヘラケズリ、下半でヘラケズリが施される。 内面 黒色研磨。	胎土は精選されている。回転実測。 アツナ内。
21-9	杯	11.8 4.35 —	口辺部は内傾し、底部は扁平な丸底を呈する。	外面 口辺部ヨコナゲののち、底部は横位のヘラケズリを施す。 内面 口辺部~底部にかけてヨコナゲ	胎土は粗い。 完全実測。
21-10	杯	14.1 4.2 —	口辺部は僅かに内傾し、底部は扁平な丸底を呈する。形みが著しい。	外面 口辺部ヨコナゲののち、底部は横位のヘラケズリを施す。 内面 口辺部ヨコナゲ、底部はナゲを施す。	胎土は粗い。 完全実測。
21-11	杯	(12.6) (3.6) —	口辺部は僅かに内傾し、胴部は扁平な丸底を呈する。	外面 口辺部ヨコナゲののち、底部は横位のヘラケズリを施す。 内面 口辺部~底部にかけてヨコナゲを施す。	胎土は粗い。 回転実測。 田区フク土内。
21-12	杯	(11.6) 2.9 —	口辺部は僅かに内傾し、底部は扁平な丸底を呈する。	外面 口辺部ヨコナゲののち、胴部は横位のヘラケズリを施す。 内面 口辺部~底部にかけてヨコナゲを施す。	胎土は粗い。 回転実測。 田区フク土内。
21-13	杯	10.4 3.0 —	口辺部は僅かに内傾し、底部は扁平な丸底を呈する。	外面 口辺部ヨコナゲののち、底部は横位のヘラケズリを施す。 内面 口辺部~底部にかけてヨコナゲを施す。	胎土は粗い。 完全実測。 カマド付近。
21-14	杯	9.5 3.3 —	口辺部は内傾し、底部は扁平な丸底を呈する。	外面 口辺部ヨコナゲののち、底部は横位のヘラケズリを施す。 内面 口辺部~底部にかけてヨコナゲを施す。	胎土はやや粗い。 回転実測。
21-15	高杯	— (8.2) —	脚部のみ。柱状を呈する。	外面 縦位、横位のヘラミガキを施す。 内面 ナゲを施す。	胎土は精選されている。 完全実測。

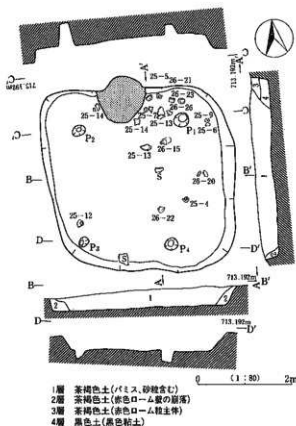
高杯第21図15は脚部が柱状を呈する。

この他、胴部にヘラミガキを施した壺の小片も出土している。

須恵器には壺があり、叩き目をもつ胴部破片が出土している。

弥生土器は赤色塗彩が施される杯の小片とヘラ描き沈線が施される壺形土器(第22図1)が出土している。いずれも弥生時代後期の所産と考えられる。

本住居址の所産期は奈良時代と考えられる。



第23図 H6号住居址実測図

6) H6号住居址

遺構(第23・24図、図版八の1・2、九の1)

本住居址は発掘区の北西端う・えー3・4グリッド内に位置し、全体層序第IV層上において検出された。

平面形態は南北385cm、東西397cmの隅丸方形を呈するが、全体的にやや歪んだプランである。主軸方向はN-4°-Wを示す。

覆土は4層に分割され、プライマリーな堆積状態である。砂質赤色ローム粒子を主体とする茶褐色土(第I層)と砂質赤色ローム層(第IV層)を利用した壁の崩落層(第2層)によって大方が構成される。第3・4層はカマドの関連層である。

確認面からの壁高は22~39cmを測り、床面から東壁は緩く、他は急傾

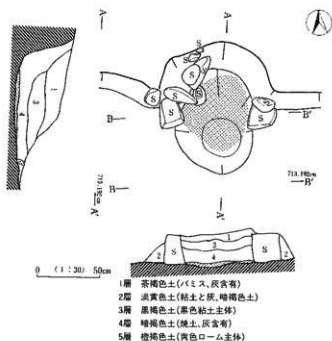
斜で立ち上がる。壁体は上から砂質赤色ローム層(第IV層)、黒色土層(V層)、黄褐色ローム層(VI層)を利用して構築されるが、凹凸が激しく、やや軟弱である。

床面は黄褐色ローム層(VI層)上の全面に貼床が施される。貼床は黄褐色ロームに砂粒、白色粘土を混ぜた土を叩きしめて平坦に構築されるがやや軟弱である。

ピットは住居四隅から4個検出され、主柱穴と考えられる。P₁は30×31cmの円形を呈し、22cmの深さを有する。断面形は逆台形を呈する。P₂は21×27cmの楕円形を呈し、48cmの深さを有する。断面は逆台形を呈する。P₃は23×18cmの円形を呈し、16cmの深さを有する。断面は不整なU字状を呈する。P₄は29×27cmの不整円形を呈し、23cmの深さを有する。断面は逆台形を呈する。

カマド

カマドは北壁中央にあり、焚口~煙道部までの長さ97cm、袖部巾96cmを測る。残存状況は良い。煙道は北壁中央を半円形に急傾斜で掘り込んで構築される。火床部は煙道下の床面を85×65cmの楕円状に極僅かに掘り窪めた後、黄褐色ローム(第5層)を平坦に敷きつめて設けられる。天井



第24図 II 6号住居址カマド実測図

況は住居址東半、特にカマドを中心とする東北部の床面上に集中する傾向が看取される。図示した第25図2・4・5・6・7・9・12・13・14、第26図15・16・17・18・19・20・21・22・23・24・26が住居址東半部、第25図1・8・10・11・12・14、第26図25・26が西半部より出土している。このうち、25-12・14、26-26は東半部と西半部の間で接合関係がみられ、破片が広範囲にわたって散布していたことが窺える。

遺物（第25・26図、図版九の2～5、十の1～6、十一の1～9）

本住居址からは土師器片、須恵器片、鉄製品が出土している。須恵器の割合が極めて高い。土師器の器種には、甕・台付甕・杯・高台付杯がある。

台付甕第25図3・4は25-3が胴部下位～台部上位、25-4が台部の破片である。25-3は胴部がふくらみ、25-4は台部が大きく外反する。当地域における台付甕の類例は周防畑A遺跡（土屋他 1979）にみられるのみで僅少な資料である。

杯には第25図5～11がある。口辺部はいずれも内湾気味で、端部で僅かに外反する25-5・6・9・10と玉縁状を呈する25-7・8がある。調整はいずれもロクロヨコナゲが施され、底部は全面に回転ヘラケズリが施される25-6・9・11と周縁部のみ施される25-5・7がある。尚、25-5には「大」の文字が2箇所に、25-6には「長」と考えられる墨書が施される。

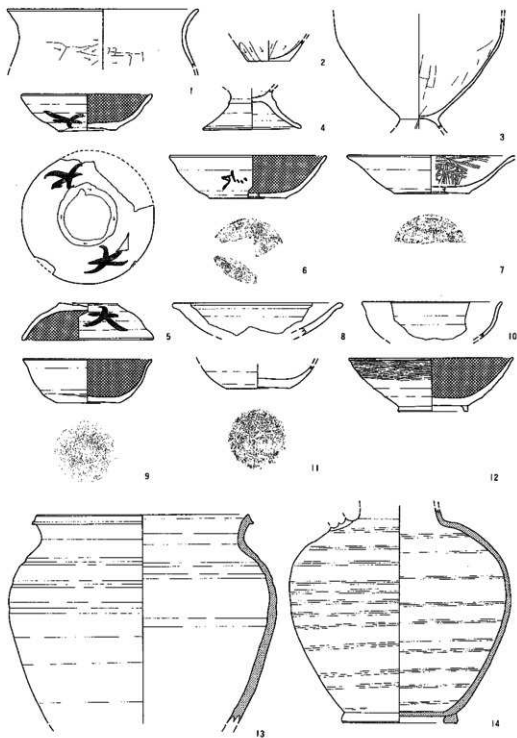
高台付杯第25図12は器形的に25-6に近く、貼付高台される。口辺部上位にはロクロヨコナゲ

部は黒色粘土（第3層）を使用して構築されるが、既に陥落しており旧状は届めていない。袖部は火床部の両側に直方体に面取りされた石材を各1個ずつ、また煙道部西側に6個の自然礫を配して補強材とし、黒色粘土（第3層）を被覆して構築される。

本遺跡のカマドは、ほとんどが火床部に比較的深い掘り込みをもつのに対し、本址のカマドは稀有な例といえる。

遺物の出土状況

遺物の出土量は極めて多く、完存品の割合が高い。分布状



第25图 H6号住居址出土遗物实测图〈1〉

のち横位のヘラミガキが加えられる。

以上のうち、25-5・6・9・12は内面に黒色研磨が施される。

須恵器の器種には、甕・壺・蓋・坏がある。第27図以外はいずれもロクロヨコナデが施される。

甕には第25図13、第27図1～7がある。25-13は口辺部が強く外反し、口辺端部で断面三角形の突帯を有する。最大径は胴部中央の上方にある。第27図1～7は外面に格子目叩き、内面に円弧文様が施される27-1、外面に平行叩き、内面に同心円文様が施される27-2、外面のみに平行叩きが施される27-4、板状工具による平行叩きが施される27-5・6・7・8と櫛描波状文が施される27-3などバラエティーに富む。

壺には環状耳付長頸瓶(第25図14)と長頸壺(第26図15)がある。長頸壺25-14は最大径が胴部上位にあり、器面のはほぼ全面にわたって光沢がみられる。環状耳付壺の類例は同市内では市道遺跡第1号整穴状遺構(藤井 1976)にみられる。長頸壺はほぼ完存する希少な例である。最大径は胴部上位にあり、口辺部は上位で外反し、端部に断面三角形の突帯を有する。

蓋には第26図16・17・18がある。26-16・17は、16が一段、17が二段の擬宝珠状を呈し、頂部が山形に尖っている。26-18は口辺部が天井部から鋭く屈曲する。

坏には第26図19-26がある。口辺部が内湾気味であり開かない26-19と大きく開く26-20-26に分けられる。26-19は底部にヘラケズリが加えられ、26-20-27は回転糸切りのまま末調整である。尚、器形的に大差のない26-20-26の中にもロクロヨコナデが右回転の26-20・21・24・25・26と左回転の26-22・23があり、更に胎土の粗い26-22・23、精選されている26-24・25・26の3様に分けられ、同一住居址内出土の須恵器にも生産窯址に違いのあることを暗示している。鉄製品第28図1は刀子の柄部と考えられる。

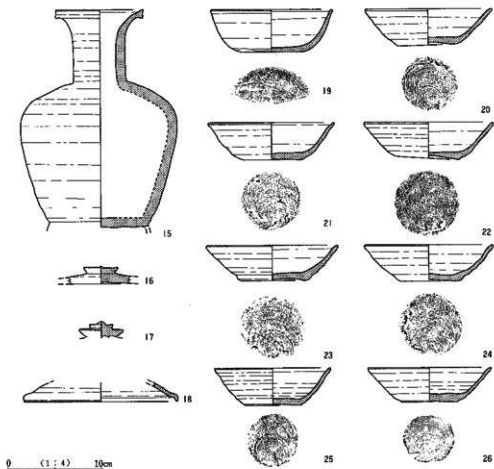
以上、本住居址からは極めて多量の完存品に近い遺物が検出された。焼失家屋以外でこのように多量の完存品が検出された例は当該期においては僅少で、極めて良好な一括資料となろう。

遺物を個々に検討すると、26-9の須恵器坏に代表されるように奈良時代的な様相が見い出せる土器があるものの、須恵器蓋や、その他の坏には平安時代の特徴を有するものが多い。従って、本住居址の所産期は、平安時代でも前葉と考えるのが妥当であろう。

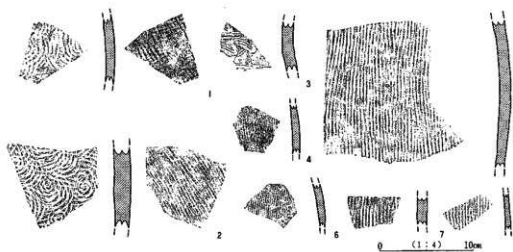
尚、市道遺跡の報告では、1号整穴状遺構出土の環状耳付長頸瓶を11世紀前半とし、他の伴出遺物との年代隔差が大きいために指摘された。環状耳付長頸瓶の所産期については当地域では漠然と11世紀代と考えられてきたが、本址の伴出例によって、同系統の環状耳付長頸瓶の年代が確実に9世紀代まで遡る可能性が強いことが首肯された意義は大きい。

7) H7号住居址

遺構(第29・30図、図版十二の1・2)



第26图 H6号住居址出土遺物実測図



第27图 H6号住居址出土遺物拓影圖

第6表 H6号住居址出土遺物一覽表(1)

標記番号	器種	流量	器形の特徴	調査	備考
25-1	壺	20.2 (6.0)	口辺部は強く外反し、胴部は軽くふくらむと思われる。	外面 口辺部ヨコナゲののち胴部は底位のヘラケズリを施す。 内面 口辺部ヨコナゲ、胴部はヘラケズリの後ナゲ。	胎土は粗い。 回転実測。 III区フタ土内。
25-2	壺	(2.2) 4.4	底部のみ。	外面 ヘラケズリを施す。 内面 ヘラケズリを施す。	胎土はやや粗い。 完全実測。 IV区フタ土内。
25-3	台付壺	— (31.7)	胴部はふくらみをもち台部は「く」の字状に強く外反する。	外面 胴部から台部にかけて丁寧なヘラナゲを施す。 内面 ヘラケズリののちナゲを加える。	胎土はやや粗い。 完全実測。 フタ土内。
25-4	台付壺	— (4.1) 台径 19.3	台部のみ。台部は強く大きく外反する。	内外面ともヨコナゲ。台部貼付の後、さらにナゲを加える。	胎土は精選されている。 台部は貼付。 完全実測。フタ土。
25-5	杯	13.9 3.9 6.1	口辺部は内湾し、端部で外反する。底部は平底。口辺部中位の2箇所「大」の字の胎画がみられる。	内外面ともヨコナゲを施す。外面は底部を回転糸切りの後、黒線部にヘラケズリを加える。内面は黒色研磨されている。	胎土はやや粗い。 完全実測。
25-6	杯	(16.7) 4.5 (8.1)	口辺部は僅かに内湾し、端部で外反する。底部は平底。 口辺部中位に「長」と考えられる胎画あり。	内外面ともヨコナゲを施す。外面は底部にヘラケズリを加え、内面は黒色研磨されている。	胎土はやや粗い。 回転実測。
25-7	杯	(17.9) 4.0 (4.0)	口辺部は内湾気味に大きく外傾し、端部で玉縁状となる。	内外面ともヨコナゲを施す。外面は底部を回転糸切りののち、黒線部にヘラケズリを加える。内面はヘラケズリが施される。	胎土は精選されている。 回転実測。 カマド内。
25-8	杯	(18.2) (3.5)	口辺部は内湾気味に大きく外傾し、口縁部は屈曲して玉縁状となる。	内外面ともヨコナゲを施す。内面にはヘラケズリが加えられる。	胎土はやや粗い。 回転実測。 III区フタ土内。
25-9	杯	(13.6) 4.6 6.6	口辺部は中位で内湾し、上部で僅かに外反する。底部は平底。	内外面ともヨコナゲ(右回転)を施す。外面の底部には回転糸切りの後、回転ヘラケズリ(右回転)が加えられる。内面は黒色研磨される。	胎土はやや粗い。 回転実測。
25-10	杯	(15.0) (3.9)	口辺部は中位で内湾し、上部で僅かに外反する。	内外面ともヨコナゲ(右回転)を施す。内面にはヘラケズリが加えられる。	胎土はやや粗い。 回転実測。 III区フタ土内。
25-11	杯	— 6.4 2.6	口辺部の下位は内湾気味。 底部は平底。	内外面ともヨコナゲ(右回転)を施す。外面の底部は、回転ヘラケズリ(左回転)が加えられ、内面はヘラケズリが加えられる。	胎土はやや粗い。 完全実測。 III区フタ土内。
25-12	高台付杯	17.3 5.6 台径 7.4	口辺部は内湾気味で底部は平底。高台は逆三角形を倒す。	内外面ともヨコナゲ(右回転)を施す。外面の口辺部上部にはヘラケズリが加えられ、高台貼付の後、ヨコナゲが施される。内面は黒色研磨される。	胎土はやや粗い。 高台は貼付。 完全実測。 IV区フタ土内。
25-13	壺	(22.3) (22.0)	口辺部は強く外反し端部に逆三角形の突帯を有する。胴部は上位で大きく張り、最大径を有して、内湾する。	内外面ともヨコナゲ(右回転)が施される。	胎土はやや粗い。 回転実測。
25-14	壺	(22.7) 台径 12.0	胴部は大きくふくらみ中位に最大径を有する。胴上部には、一面所に把手が認められる。	内外面ともヨコナゲ(右回転)を施す。外面は高台貼付ののち、ヨコナゲが加えられる。	胎土はやや粗い。 完全実測。 III区フタ土内。 カマド内。
26-15	壺	5.3 (23.1) (19.5)	最大径は胴上部にある。口辺部は端部に逆三角形の突帯を有し、強く外反する。胴部は直立し、胴部は上位で強く張る。	内外面ともヨコナゲ(左回転)を施す。外面の胴部下位はヘラナゲが加えられる。	胎土は精選される。 完全実測。
26-16	壺	狭み (3.6) (1.8)	狭み部は殿室球状を呈し、頂部を山形に尖らせる。	内外面ともヨコナゲを施す。外面は天井部に回転ヘラケズリ(右回転)を加える。	胎土はやや粗い。 回転実測。
26-17	壺	狭み 4.6 (1.1)	狭み部は二段の殿室球状を呈し、頂部を山形に尖らせる。	ヨコナゲが施される。	胎土は粗い。 回転実測。
26-18	壺	— (2.0) 口辺部 (16.2)	天井部は直線的で口辺部は強く、短く内湾する。	内外面ともヨコナゲ(左回転)が施される。	胎土は精選されている。 回転実測。 IV区フタ土内。
26-19	杯	(13.0) 4.5 (6.6)	口辺部は僅かに内湾する。底部は平底となる。	内外面ともヨコナゲ(左回転)を施す。底部は切り磨しののち、ヘラケズリが加えられる。	胎土はやや粗い。 回転実測。

第7表 H6号住居址出土遺物一覽表(2)

種別 番号	器種	数量	器形の特徴	調 整	備 考
25-20	坏 (須)	13.6 3.9 6.1	口辺部はほぼ直線的に大きく開く。 底部は平底。	内外面クワコソコナデ(右回転)を施す。底部の外面は回転糸切り。	胎土はやや粗い。内外面に十字の火手痕あり。完全実例。
26-21	坏 (須)	13.5 3.9 6.1	口辺部はほぼ直線的に大きく開くが口辺部で鋭く外反する。底部は平底。	内外面クワコソコナデ(右回転)を施す。底部の外側は回転糸切り。	胎土はやや粗い。内外面に十字の火手痕あり。完全実例。
25-22	坏 (須)	13.6 3.9 6.4	口辺部はほぼ直線的に大きく開く。 底部は平底。	内外面クワコソコナデ(左回転)を施す。底部の外側は回転糸切り。	胎土はやや粗い。完全実例。
26-23	坏 (須)	14.1 3.7 6.7	口辺部はほぼ直線的に大きく開く。 底部は平底。	内外面クワコソコナデ(左回転)を施す。底部の外側は回転糸切り。	胎土はやや粗い。完全実例。
26-24	坏 (須)	13.8 3.8 6.2	口辺部は僅かに内湾して大きく開き、端部でやや外反する。底部は平底。	内外面クワコソコナデ(右回転)を施す。底部の外側は回転糸切り。	胎土はやや粗い。完全実例。
26-25	坏 (須)	(12.4) 4.9 6.0	口辺部は僅かに内湾して大きく開き端部でやや外反する。底部は平底。	内外面クワコソコナデ(右回転)を施す。底部の外側は回転糸切り。	胎土は精選されている。II、III区フツ土内、回転実例。
26-26	坏 (須)	13.1 3.6 6.0	口辺部はほぼ直線的に大きく開き、端部で僅かに外反する。底部は平底。器形は歪みが著しい。	内外面クワコソコナデ(右回転)を施す。底部の外側は回転糸切り。	胎土は精選されている。II区フツ土内。回転実例。



第28図 H6号住居址出土鉄器実測図(2)

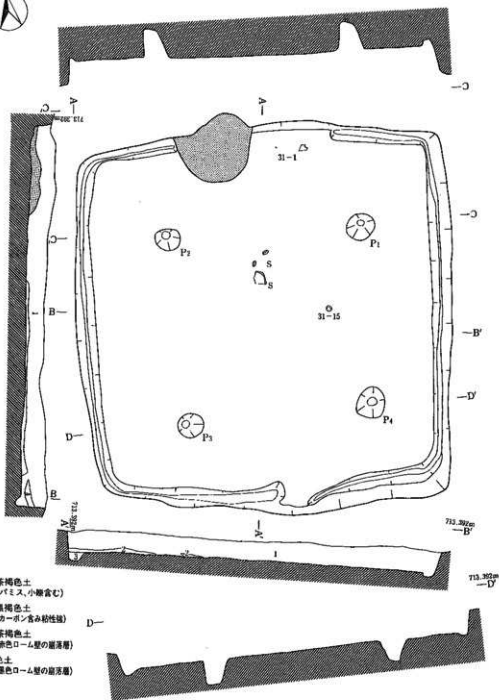
本住居址は遺跡の中央西南寄りのく・け・こ・さー6・7・8・9グリッド内に位置し、全体層序第IV層明茶褐色土層上において検出された。平面形態は南北825cm、東西800cmの方形を呈し、本遺跡中最大級の規模を有する。主軸方向はN-5°-Eを示す。

覆土は4層に分割されたが大方は砂質赤色ロームを主体とする第I層茶褐色土によって構成される。第2層はカーボンを含む黒褐色土で床面に薄く附着している。また第3・4層は砂質赤色ローム(第IV層)、黒色土層(第V層)を利用した壁の崩落と考えられる。

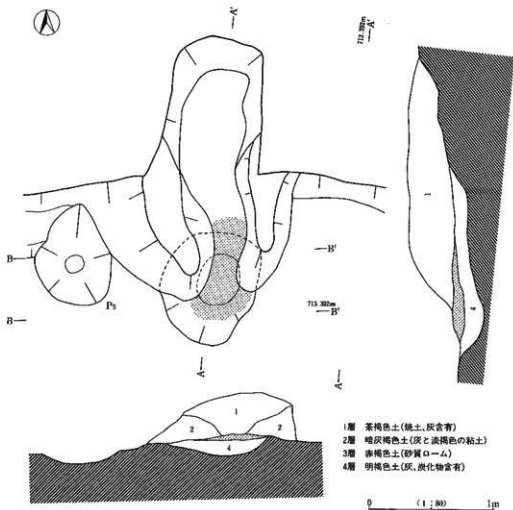
壁高は41~61cmを測り、東から西に向って若干傾斜する。壁体は上から砂質赤色ローム層(第IV層)、黒色土層(第V層)、黄褐色ローム層(第VI層)を利用して構築され、床面からはほぼ垂直に立ち上がる。壁面はおおむね堅固で平滑であるが南壁は凹凸が激しく、東半部の下位で一段の稜を有する。壁溝は、南壁中央の一部と北壁のカマドの東側を除き住居をほぼ全周する。壁溝巾は、15~20cm、深さ3~12cmを測り、断面はU字形を呈する。

床面は黒色土層上(第V層)全面に貼床が施される。貼床は茶褐色土(粘質)に砂粒を少量混ぜた土を叩きしめ、平担で堅固に構築される。特にカマド周辺は堅緻であった。

ピットは主柱穴が4個整然と検出された。P₁は60×55cmの円形を呈し、60cmの深さを有する。



第29図 H7号住居址実測図

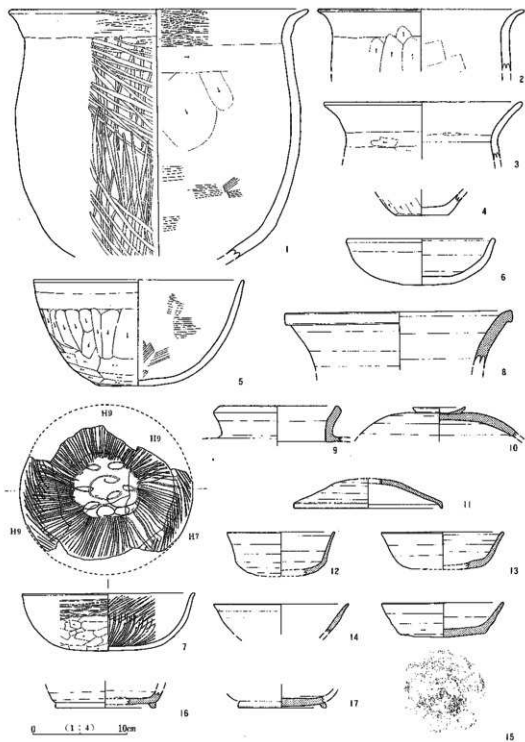


第30図 H7号住居址カマド実測図

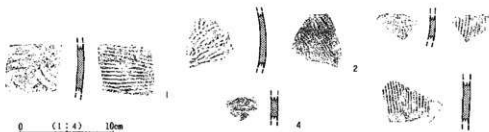
断面形はほぼU字形を呈する。P₁は54×47cmの楕円形を呈し、60cmの深さを有する。断面形は逆台形状を呈する。P₂は55×53cmの円形を呈し、52cmの深さを有する。断面形は逆台形状を呈する。P₃は59×65cmの楕円形を呈し、45cmの深さを有する。断面形はU字形を呈する。

カマド

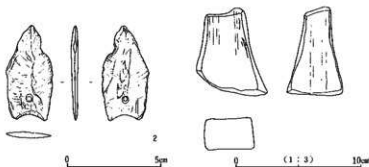
カマドは北壁中央の西寄りにあり、焚口～煙道までの長さ240cm、袖部の巾160cmの規模を有すると考えられる。煙道は壁体を125×90cmの舟先状に浅く掘り込み、火床部は壁下の床面を90×77cmの楕円状に掘り窪めた後、灰・炭化物(第4層)を埋めもどし、更に砂質ローム(第3層)を



第31图 H7号住居址出土器物实例图



第32図 H7号住居址出土遺物拓影図



第33図 H7号住居址石器実測図(2)

平坦に敷きつめて構築している。袖部は崩落しているため形状は明らかでないが、灰と淡褐色の粘土を混ぜた土(第2層)によって構築されたと考えられる。天井部にあたる土層は

確認されなかった。

カマドの左袖部の両側から80×60cmの楕円状の浅い掘り込みが検出されたが、カマドに関連する施設と考えられるものの、性格については明らかにできなかった。

遺物の出土状況

遺物の出土量は多いが、遺構全体の分布状況はカマド内及び周辺部に集中がみられるのみで、他は特に集中する箇所は見られない。図示した第31図1・5・6・7がカマド内及びその周辺部、第31図3・4・10・11・12・16が住居東半部、第31図17が住居西半部から出土している。

尚、31-7は、H9号住居址40-18と接合関係にある。

遺物(第31・32・33図、図版十三の1~8)

本住居址からは、土師器片、須恵器片、石製品が検出されている。

土師器の器種には、甕・鉢・杯がある。

甕はいずれも口辺部に最大径をもつが、胴部が球形に近い第31図1、ほぼ長胴を呈し、口辺部が緩く外反する第31図2、前者にくらべ強く外反する第31図3に分けられる。31-1にはヘラミガキ、31-2・3には縦位のヘラケズリが施される。

鉢第31図5は胎土が精選された土器で、ロー底部にかけて逆台形状を呈する。

杯は素口縁を呈する31-6と、外反する口辺部をもつ31-7があり、いずれも扁平な丸底を呈する。31-6にはヘラケズリ、31-7にはヘラミガキのち複雑な暗文が施される。

第8表 H7号住居址出土遺物一覽表

神田 番号	器種	数量	形 状 の 特 徴	調 査	備 考
31-1	甕	(21.5) (24.0) —	最大径は口辺部にある。 口辺部は強く外反し、胴部は球形に近い。	外面 口辺部ヨコナゲのもの、胴部は縦位のヘラケズリが施され、口辺部に横位、胴部に縦位の粗いヘラミガキが施される。 内面 口辺部ヨコナゲのものヘラミガキ、胴部ナダ	胎土は粗い。 回転実測。
31-2	甕	(21.6) (6.3) —	最大径は口辺部にある。口辺部は強く外反する。胴部はほぼ長胴を呈すと考えられる。	外面 口辺部ヨコナゲのもの、胴部は縦位のヘラケズリが施される。 内面 口辺部ヨコナゲ、胴部はヘラケズリのもの、ナダが施される。	胎土は粗い。 回転実測。 フタナシ。
31-3	甕	(21.2) — —	最大径は口辺部にある。 口辺部は外反し、胴部は長胴を呈すると考えられる。	外面 口辺部ヨコナゲのもの、胴部上位は横位のヘラケズリが施される。 内面 口辺部ヨコナゲ、胴部はナダが施される。	胎土はやや粗い。 回転実測。 IV区フタ土内。
31-4	甕	(2.2) (6.0) —	底部は平底を呈し、大きく外傾して開く。	外面 胴部はヘラケズリが施される。 内面 ナダが施される。	胎土はやや粗い。 完全実測。 I区フタ土内。
31-5	鉢	11.0 —	口・底部にかけて逆台形状に内曲する。	外面 口辺部ヨコナゲのもの、胴部は縦位のヘラケズリ 底部は横位のヘラケズリが施される。 内面 横位の彫毛與髷のもの、口辺部ヨコナゲが施される。	胎土は精選されている。回転実測。 コマド内。
31-7	杯	8.0 6.1 —	口辺部は強く、縦かに外反し、底部は扁平な丸底を呈する。	外面 口辺部ヨコナゲのもの、底部はヘラケズリを施し 口辺部に横位のヘラミガキを加える。 内面 ヘラミガキのもの複雑な彫文を施す。	胎土は精選されている。完全実測。 目9、40-1区と接合する。
31-6	杯	15.8 4.9 —	筒口縁を呈し、底部は扁平な丸底を呈する。	外面 口辺部ヨコナゲのもの、底部はヘラケズリが施されるが摩滅著しい。 内面 口辺部ヨコナゲ、胴部はナダが施される。	胎土は粗い。 完全実測。 I区フタ土内。
31-8	甕 (甕)	(23.9) (6.1) —	口辺部は外反し、端部に断面三角形の突起を有する。	内外面ロクロヨコナゲ(左回転)が施される。自然釉付着する。	胎土は粗い。 回転実測。 EWベルト内。
31-9	甕 (甕)	(12.3) (3.5) —	口辺部は強く、縦かに外傾し、端部は鋭角的に尖る。	内外面ロクロヨコナゲ(左回転)が施される。自然釉が付着する。	胎土は粗い。 回転実測。 EWベルト内。
31-10	蓋 (甕)	(3.0) (3.0) (5.6)	天井部から口辺部にかけて丸味をもつ。つまみは中央部が凹み、内面はかえりをも有する。	内外面ロクロヨコナゲ(右回転)が施される。天井部の上位は回転ヘラケズリが施されたと考えられるが、装成不良のため明確でない。	胎土はやや粗い。 回転実測。 I区フタ土内。
31-11	蓋 (甕)	(15.7) (3.1) —	天井部は上位で内湾するがほぼ直線的。口辺部は強く屈曲して直立する。	内外面ロクロヨコナゲ(左回転)が施される。天井部の上位は回転ヘラケズリ(左回転)が施される。	胎土は粗い。 回転実測。 I区フタ土内。
31-12	杯 (甕)	(11.5) (4.6) —	口辺部は長く、強く外反する。底部はほぼ平底を呈する。	内外面ロクロヨコナゲ(右回転)が施される。	胎土はやや粗い。 回転実測。 IV区フタ土内。
31-13	杯 (甕)	(13.0) (3.9) (8.8)	口辺部は長く、強く外反する。底部はほぼ平底を呈する。	内外面ロクロヨコナゲ(右回転)が施される。底部はヘラケズリが加えられる。	胎土はやや粗い。 回転実測。 IV区フタ土内。
31-14	杯 (甕)	(14.2) (3.2) —	口辺部は直線的で大きく開く。	内外面ロクロヨコナゲ(右回転)が施される。	胎土はやや粗い。 回転実測。 フタ土内。
31-15	杯 (甕)	12.6 3.6 9.0	口辺部は直線的に開く。底部は平底を呈する。	内外面ロクロヨコナゲ(左回転)が施される。外面の口辺部下位、底部には回転ヘラケズリ(左回転)が施される。	胎土は精選されている。完全実測。
31-16	高台 付杯 (甕)	— (1.8) (10.6)	台部は逆台形状を呈する。	内外面ロクロヨコナゲのもの、底部外面は回転ヘラケズリが施される。高台貼付のもの、ヨコナゲが加えられる。	胎土はやや粗い。 回転実測。 I区フタ土内。
31-17	高台 付杯 (甕)	— (1.3) (9.2)	底部は平底で、台部は強く開く。	内外面ロクロヨコナゲのもの、底部外面は回転ヘラケズリが施される。高台貼付のもの、ヨコナゲが加えられる。	胎土はやや粗い。 完全実測。 III区フタ土内。

この他、図示できなかったが、甕の胴部破片が非常に多く出土している。

須恵器の器種には、甕・蓋・杯・高台付杯があり、第32図の遺物以外はいずれもロクロヨコナゲが施される。

甕にはロクロヨコナゲが施される第31図8・9と、叩き目が施される第32図1～5がある。

31-8は端部に断面三角形の突帯を有する大型品、31-9は端部が尖る小型品である。32-1~5は、外面に板状工具による平行叩き、内面に円弧文様が施される1・2・3、外面に平行叩きが施される32-5、櫛描波状文が施される32-4などがあり、32-2には横走沈線が加えられる。

蓋は中央部が凹むつまみで、内面にかえりを有する第31図10と口辺部が鋭く屈曲して直立する第31図11がある。

坏には、口辺部が僅かに外反し、底部がほぼ平底を呈する第31図12・13、口辺部が直線的で平底を呈する第31図15、口辺部が大きく開く第31図14がある。31-15には口辺下位と底部に回転ヘラケズリが施される。

高台付坏は第31図16・17があり、底部から口辺部にかけて垂直に近い角度で立ち上がると考えられる。

石製品には砥石と磨製石鏃があり、砥石は砂岩製、磨製石鏃は粘板岩製で一孔を有する。

本住居址の所産期は奈良時代と考えられる。

8) H 8号住居址

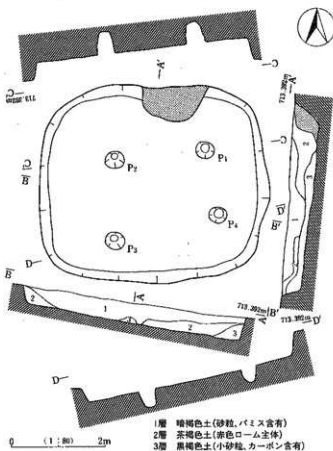
遺構(第34・35図、図版十四の1・2)

本住居址は発掘区の中央西寄りのお・かー7・8グリッド内に位置し、全体層序第IV層明茶褐色土層上において検出された。

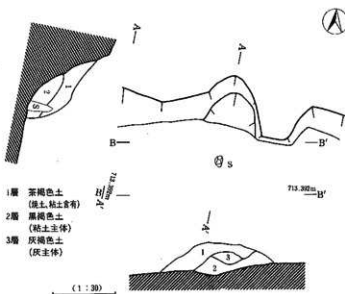
平面形態は416×485cmの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-4°-Wを示す。

覆土は3層に分割され、プライマリーな堆積状態を示す。第1層は砂粒を多く含む暗褐色土、第2層は砂質赤色ローム主体の茶褐色土、第3層はカーボンを含む黒褐色土である。

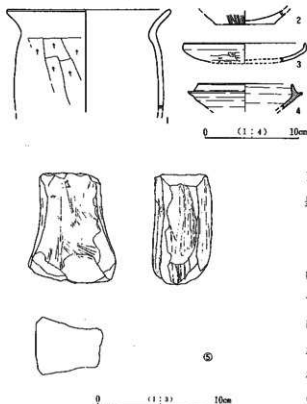
壁高は34~54cmを測り、柱



第34図 H 8号住居址実測図



第35図 H 8号住居址カマド実測図



第36図 H 8号住居址石器実測図

ば垂直な立ち上がりを示す。壁体は上から砂質赤色ローム層(第IV層)、黒色土層(第V層)を利用して平滑に構築されるがやや軟弱である。壁溝は検出されなかった。

床面は黒色土(第V層)上全面に貼床が施される。貼床は砂質赤色ロームに粘土を少量混ぜた土を叩きしめて10cm前後の厚さで平坦に構築されているがやや軟弱である。

ビットは主柱穴が4個検出された。P₁は40×38cmの円形を呈し、46cmの深さを有する。P₂は42×36cmの円形を呈し、50cmの深さを有する。P₃は40×36cmの円形を呈し、36cmの深さを有する。P₄は40×38cmの円形を呈し、32cmの深さを有する。断面形はP₁・P₂が逆台形状、P₃・P₄がU字状を呈する。

カマド

カマドは北壁中央にあり、長さ100cm、巾120cmの規模を有する。残存状況は極めて悪い。煙道は北壁を50×45cmの半円状に掘り込んで構築し、火床部にあたる焼土は確認されなかったが、壁下に設けられたことは、角錐状に面取りされた軽石の支脚が直立した状態で出土していることから明らかである。天井、袖部は崩落

第9表 H8号住居址出土遺物一覽表

浮頭番号	器種	測量	器形の特徵	調査	備考
36-1	甕	(17.9) (10.6) —	口辺部に最大径を有す。口辺部は「く」の字状に反折し、胴部は軽くふくらむ。	外面 口辺部ヨコナゲのち、胴部に縦位のヘラクスリを施す。 内面 口辺部ヨコナゲのち、胴部にナゲを施す。	胎土は粗い。回転実面。目区フタ上、ベルト内。
36-2	甕	— (1.9) (6.3)	平底の底部から胴部は大きくふくらむと考えられる。	外面 胴～底部ヘラ(ガキ)。 内面 ナゲ。	胎土は精選されている。完全実面。フタ内。
36-3	杯	(12.9) (2.0) —	口辺部は僅かに内傾する。底部は偏平な丸底を呈する。	外面 口辺部ヨコナゲのち、底部にヘラクスリを施す。 内面 ナゲ。	胎土はやや粗い。回転実面。EWベルト内。
36-4	杯 (原) 外径径	9.9 (2.7) (12.2)	口辺部と底部の境に明瞭な稜を有する。底部は丸味を帯び、口辺部は内傾する。	外面 ロクヨコナゲ(右回転)のち、天井部と縁は回転ヘラクスリ(左回転)。 内面 ロクヨコナゲ(右回転)。	胎土はやや粗い。回転実面。縁上。

しているため、形状は全くつかめないが、黒褐色の粘土(第2層)を構材として設けられたと考えられる。また、煙道部の東側には長さ60cm、巾60cm程の地山の突出があり、天井・袖部の構築と何らかの関わりがあったと思われる。

遺物の出土状況

遺物の出土量は極めて少なく、分布の傾向も極めて散漫である。

図示した第36図1～4は覆土内から出土し、36-4は47-13と接合関係にある。

遺物(第36図、図版十四の3)

本住居址からは土師器片、須恵器片、弥生土器片、砥石が出土している。

土師器の器種には甕・杯がある。

甕第36図1は、口辺部に最大径を有し、ほぼ長胴を呈する。36-2は底部のみで、外面にヘラミガキが加えられる。

杯第36図3は口辺部が内傾し、底部は偏平な丸底を呈する。

須恵器の器種には、甕・杯がある。

甕には胴部の大型破片があるが図示はできない。

杯第36図4は口辺部と底部の境に明瞭な稜を有する。陶邑II期に見られるものである。

砥石は凝灰岩製で333gを計る。

弥生土器は赤色塗彩の施される壺の破片が出土している。

本住居址の所産期は36-4が混入品と考えられる為、36-1～3をもって奈良時代としたい。

9) H9号住居址

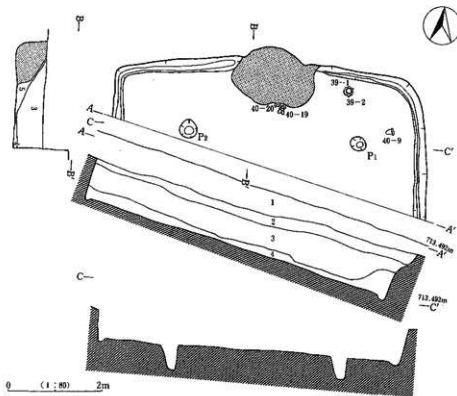
遺構(第37・48図、図版十四の4・5、十五の1～3、十六の1・2)

本住居址は発掘区の中央西寄りの南端さしー8・9・10グリッド内に位置し、全体層序第IV層、明茶褐色土層上において検出された。遺構の南半部は発掘区外のため未調査である。

平面形態は東西666cmを測ることから、大型の隅丸方形か長方形と考えられる。主軸方向はN-6°-Wを示している。

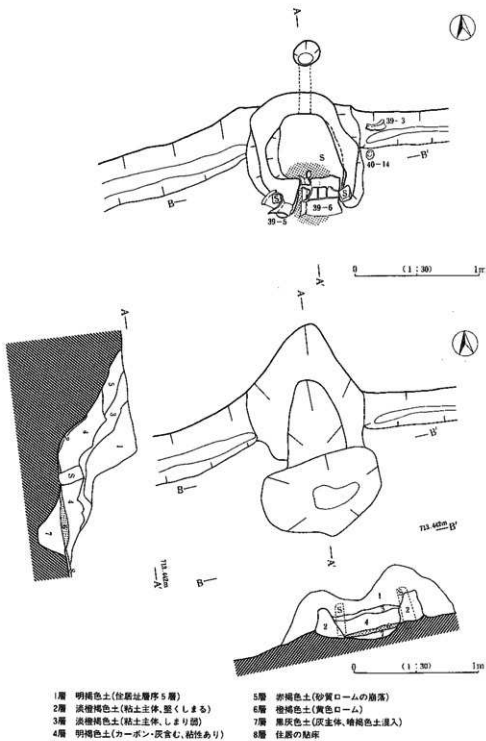
覆土は4層に大別された。図示した第1層は耕作土、第2～4層が住居址覆土でプライマリーな堆積状態を示す。第2層は小砂粒を多く含む暗褐色土、第3層は地山赤色ロームを主体とする茶褐色土、第4層は粘性の強い暗褐色土、第5層はカマドの関連層である。

確認面からの壁高は58～72cmを測り、床面からはほぼ垂直に立ち上がる。(住居の確認層位は先述した第IV層であるが、土層観察によって、東壁の立ち上がりは、第II層から掘り込まれていることが認められた。また、西壁の立ち上がりは耕作土の影響によって第IV層で認められた。従って住時の壁高は更に10～20cm高かったと考えられる。) 壁体は砂質赤色ローム(第IV層)、黒色土層(第V層)、黄褐色ローム層(第VI層)を利用して平滑で堅固に構築されている。壁溝は壁下をほ



- 1層 淡茶褐色土(小砂粒・バミス含有、粘性極めて弱)
- 2層 暗褐色土(小砂粒・バミス含有、粘性弱)
- 3層 茶褐色土(小砂粒・バミス・地山赤色ローム粒子・カーボン含有、粘性強)
- 4層 暗褐色土(赤色ローム粒子含有、粘性・しまり強)
- 5層 明褐色土(焼土、灰混ざる、カマドの流出層)

第37図 H9住居址実測図



第38図 H9号住居址カマド実測図

ほぼ全周すると思われる。壁溝巾は9～23cm、深さ1～6cmを測り、断面はU字状を呈する。

床面は黄褐色ローム層（第VI層）上のはほぼ全面に4～5cmの厚さで貼床が施される。貼床は、粘土・茶褐色土・黒色土を混ぜた土を叩きしめて構築され、平拍かつ堅固である。

カマド

カマドは北壁中央にあり、焚口～煙道部までの長さ152cm、巾92cmを測る。残存状態は極めて良好である。煙道部は壁体を長さ90cm、巾80cmの舟先状に掘り込んだ後、壁外から径30～43cm程の煙り出し用の穴を残して、橙褐色粘土（第3層）を被覆して構築される。火床部は壁下の床面を95×55cmの楕円状に40cm程掘り込んだ後、灰と暗褐色土（第7層）を埋めもどし、更に黄褐色ローム（第6層）を敷きつめて設けられる。火床部中央には方柱状に面取りされた軽石を直立させ、支脚としている。火床部下のピットは、住居使用時において奴何に機能したかは不明であるが、上面に貼床（第8層）が被覆していることから考えて貯蔵用等の機能は考え難い。天井部は陥落しており、器設部は把握できないが、橙褐色粘土（第3層）を使用したことは明らかである。袖部も橙褐色粘土（第2層）を使用して馬蹄状に構築される。前部には、直方体に面取りした石材を配し、補強材としている。尚、左袖の石材には（第39図5）が被覆されている。当カマドは袖部内面、天井部が強い熱をうけて赤変しており、長期にわたる使用が考えられる。

遺物の出土状況

遺物の出土量は極めて多く、完存品の割合も高い。分布状況は特にカマド内及びその周辺部の壁際に集中する。図示した第39図1・2・3・4・5・6・7・8、第40図9・14・16・19・20・21がカマド内及びその周辺部、第40図9がP₂付近の床面上、第40図10・11・12・13・15・16・18が覆土内からの出土である。尚、40-18はH7号住居址31-7と接合関係にある。

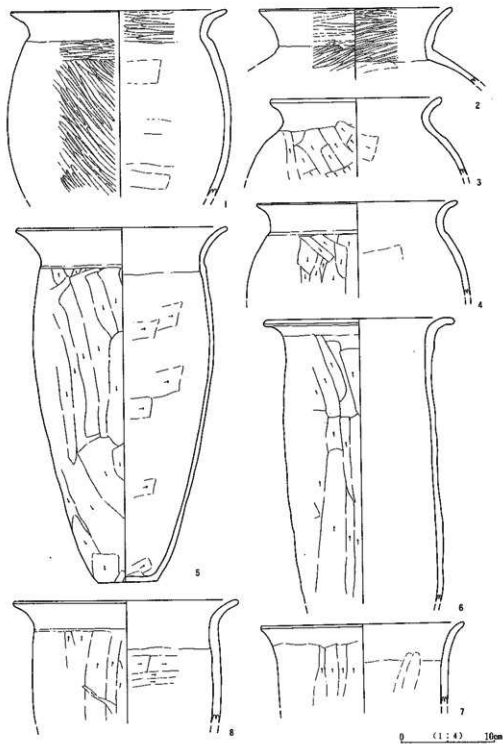
遺物（第39・40図、図版十六の3～8、十七の1～4）

本住居址からは土師器片、須恵器片、弥生土器片が出土し、土師器の割合が極めて高く、須恵器は1点のみである。

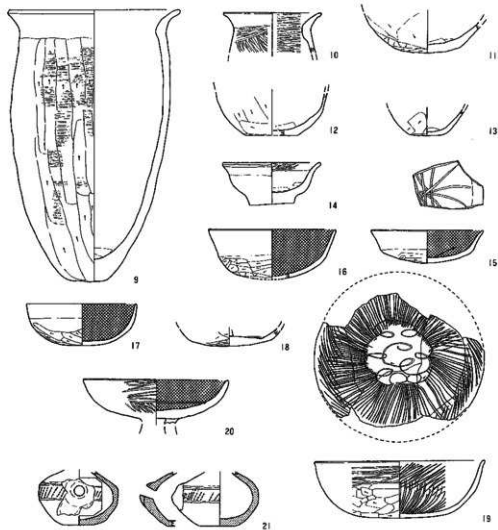
土師器の器種には甕・小甕・杯・高杯がある。

甕にはヘラミガキが施される第39図1・2とヘラケズリが施される第39図3～8、第40図9がある。39-1・2は胴部に最大径を有し、球形胴部を呈する。1にくらべ2の方が肩部の張り強い。39-3～8、40-9は胴部に最大径を有し、球形胴部に近くなる39-3・4と口辺部に最大径を有し、長胴を呈する39-5～8、40-9がある。長胴甕は器厚が薄く、口辺部が大きく外反する39-5、短く、強く外反する39-6、器厚が厚く、口辺部が外反する39-8、口辺部が強く外反し、胴部～底部は砲弾状を呈する40-9などバラエティーに富む。尚、39-7は口辺部の形態から甕とも考えられる。小甕（40-10）は内外面に丁寧なヘラミガキが施される。

杯には第40図14～19があり、14が平底、他は丸底か偏平な丸底を呈する。



第39图 H 9号住居址出土遗物实例图〈1〉



第40図 H9号住居址出土遺物実測図

40-14は類例の僅少な器形で、口辺部内面にヘラミガキが施される。40-15-19は口辺部と底部の境に僅かに稜が残る40-15・16、素口縁で丸底を呈する40-17、口辺部が短く外反し底部が扁平な丸底を呈する大型品の40-19がある。40-15・16は内面に黒色研磨が施され、40-15・18には暗文が加えられる。また、40-19には内外面に丁寧なヘラミガキが施された後、内面に複雑な暗文が施される。

高坏第40図20は口辺-底部にかけて丸味を帯び、内面は黒色研磨が施される。その他、高坏では、柱状を呈する、脚部の小片が検出されている。

第10表 H 9 号仔居出土遺物一覽表(1)

序号	器種	数量	器形の特徴	調整	備考
39-1	甕	(23.0) (19.7) —	最大径は胴部中位にある。口辺部は強く外反し、胴部はふくらんで球形に近い。	外面 口辺部コナダのもの、胴部はヘラケズリを施し更にヘライガキを加える。 内面 口辺部はコナダの後、ヘライガキ、胴部ナダ。	胎土はやや粗い。回転実測。カマド内。
39-2	甕	21.0 (7.2) —	最大径は胴部にある。口辺部は胴部から「く」の字状に屈曲して、強く外反する。胴部は球形を呈すると考えられる。	外面 口辺部コナダのもの、胴部はヘラケズリを施し、更にロー胴部にかけて横位、斜位のヘライガキを施す。 内面 口辺部ヘライガキ、胴部ヘラケズリの後ナダ。	胎土はやや粗い。回転実測。完全実測。
39-3	甕	(18.2) (8.4) —	最大径は胴部にある。口辺部は短く、強く外反する。胴部はふくらんで球形を呈すると考えられる。	外面 口辺部コナダのもの、胴部に横位のヘラケズリを施す。 内面 口辺部コナダ、胴部はヘラケズリのもの、ナダを施す。	胎土はやや粗い。回転実測。
39-4	甕	(21.2) (10.0) —	最大径は胴部にある。口辺部は強く外反する。胴部は短くふくらむ。	外面 口辺部コナダのもの、胴部は横位のヘラケズリ(ヘライガキに近い)を施す。 内面 口辺部コナダのもの、胴部はヘラケズリを施しナダを加える。	胎土は粗い。回転実測。カマド内。
39-5	甕	22.1 37.7 6.3	最大径は口辺部にある。口辺部は強く、長く外反する。胴部は僅かにふくらむがほぼ長胴を呈し、底部は平底となる。	外面 口辺部コナダのもの、胴部は横位のヘラケズリを施し、ナダを加える。 内面 口辺部コナダのもの、胴-底部はヘラケズリを施し、ナダを加える。	胎土は精選されている。回転実測。完全実測。
39-6	甕	(20.4) (30.1) —	最大径は口辺部にある。口辺部は強く、強く外反し、胴部はほぼ直線的で長胴を呈す。	外面 口辺部コナダのもの、胴部は横位のヘラケズリを施し、ナダを加える。 内面 口辺部コナダ、胴部はナダを加える。	胎土はやや粗い。完全実測。
39-7	甕 (破)	(21.6) (8.6) —	最大径は口辺部にある。口辺部は強く外反し、胴部はほぼ直線的。	外面 口辺部コナダのもの、胴部はヘラケズリ(ヘライガキに近い)を施す。 内面 口辺部コナダのもの、胴部はナダを施す。	胎土は粗い。回転実測。II区フナ土、カマド内。
39-8	甕	(22.9) (13.0) —	最大径は口辺部にある。口辺部は強く外反し、胴部は僅かにふくらみをもつ。	外面 口辺部コナダのもの、胴部は横位ヘラケズリ(ヘライガキに近い)を施す。 内面 口辺部コナダのもの、胴部は横位のヘラケズリを施し、ナダを加える。	胎土は粗い。回転実測。I、II区フナ土、カマド内。
40-9	甕	18.0 28.7 4.2	最大径は口辺部にある。口辺部は強く、強く外反し、僅かにふくらみ、長胴を呈する。底部は先端が丸い気味である。	外面 口辺部コナダのもの、胴部は印きによって成形のもの、ヘラケズリ(ヘライガキに近い)を施す。 内面 口辺部コナダのもの、胴部はナダを施す。	胎土はやや粗い。完全実測。
40-10	小甕 (4.2)	(10.5) (4.2) —	最大径は口辺部にある。口辺部は強く外反し、胴部は僅かにふくらむ。	外面 口辺部コナダのもの、ロー胴部にかけて、ヘライガキ(横位、斜位)を施す。 内面 口辺部コナダのもの、ロー胴部にかけて、横位のヘライガキを施す。	胎土は精選されている。回転実測。II区フナ土内。
40-11	甕	(4.2) 7.1 —	底部のみ。丸底気味である。	外面 ヘラケズリを施す。 内面 ヘラケズリのものナダ。	胎土は粗い。完全実測。フナ土内。
40-12	甕	(4.6) (5.8) —	胴部下位-底部。平底の底部から胴部はふくらむ。	外面 ヘラケズリを施す。 内面 ヘラケズリのものナダを施す。	胎土は粗い。回転実測。II区フナ土内。
40-13	甕	(2.8) 4.0 —	胴部下位-底部。平底の底部から大きく開く。	外面 ヘラケズリを施す。 内面 ヘラケズリのものナダを施す。	胎土は精選されている。完全実測。II区フナ土内。
40-14	杯	10.5 4.5 4.8	口辺部は内湾して外反する。底部は平底で極めて薄い。	外面 口辺部コナダ、底部ヘラケズリを施す。 内面 口辺部-底部コナダのもの、口辺部上にヘライガキを施す。	胎土は粗い。完全実測。
40-15	杯	(10.0) 3.5 —	口辺部は僅かに外反し、底部は偏平な丸底であるが平底に近くなる。口辺部と底部の境に僅かに稜が残る。	外面 口辺部コナダのもの、底部はヘラケズリを施す。 内面 黒色研磨。放射状の暗文を施す。	胎土は精選されている。回転実測。II区フナ土内。
40-16	杯 外縁径 11.5	13.5 5.3 —	口辺部はほぼ直線的に外反し、底部は偏平な丸底を呈する。口辺部と底部の境に僅かに稜が残る。	外面 口辺部コナダのもの、底部はヘラケズリを施す。 内面 黒色研磨。	胎土は精選されている。完全実測。
40-17	杯	(11.5) 4.4 —	蓋口縁で底部は丸底を呈する。	外面 口辺部コナダのもの、底部はヘラケズリを施す。 内面 黒色研磨。	胎土はやや粗い。回転実測。II区フナ土内。
40-18	杯	(2.9) 8.0 —	底部のみ。偏平な丸底を呈するが平底に近くなる。	外面 底部はヘラケズリを施す。 内面 底部ナダを施した後、放射状の暗文を加える。	胎土は精選されている。完全実測。II区フナ土内。
40-19	杯	18.0 5.1 —	口辺部は短く、僅かに外反し、底部は偏平な丸底を呈する。	外面 口辺部コナダのもの、底部はヘラケズリを施し口辺部に横位のヘライガキを加える。 内面 ヘライガキのもの、縦横な暗文を施す。	胎土は精選されている。完全実測。H7 31-7と複合。

第11表 H9号住居址出土遺物一覽表(2)

発掘 番号	品名	数量	器形の特徴	調査	備考
40-20	高杯	15.5 (4.7)	杯部のみ。口辺~底部にかけて丸味を帯びる。	外面 斜位、横位のヘラミガキが施される。 内面 黒色研磨。	胎土はやや粗い、完全実器。
40-21	甕 (甕)	— (5.8) 3.1	— 口辺部は欠損、胴部は不整形円形を呈し、中位に一孔穿った後、粘土貼付によって注口部を形成する。底面は平底。	内外面ロクロコナデのもの、外面胴部中位に横走沈線が2本施し、その区画内に櫛歯状工具を斜位に押しつけて文様帯を構成する。底面は回転糸切り。	胎土は粗い、完全実器。 カマド付近。

須臾器の器種には甕がある。甕第40図21は口辺部が欠損し、胴~底部は不整形円形を呈する。ロクロコナデのもの、回転糸切りが施され、胴部中位には2本の横走沈線が巡る。その区画内に櫛歯状工具を斜位に押しつけて、文様帯を構成した後に、胴部中位の粘土貼付を行い、円形の孔を穿って注口部を形成する。胎土は粗く、焼成も不良である。

本住居址の所産期は、出土土器の大半が古墳時代的様相を示すが、39-5の土師器の薄手の長胴甕に代表されるように奈良時代的な土器も伴出しているため、奈良時代初頭と考えるのが妥当であろう。

10) H10号住居址

遺構(第41・42図、図版十八の1~3)

本住居址は発掘区のはほぼ中央お・かー9・10グリッド内に位置し、全体層序第IV層明茶褐色土層上において検出された。

平面形態は382×370cmの方形を呈し、主軸方向はN-6°-Eを示す。

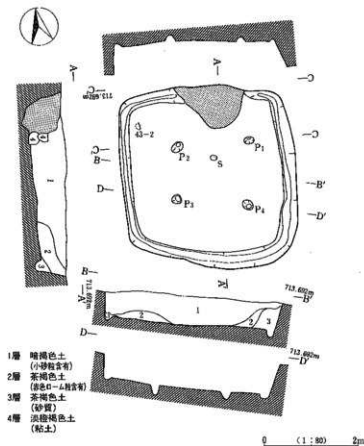
覆土は3層に分割され、プライマリーな堆積状態である。第1層は砂粒を含む暗褐色土、第2層は砂質赤色ローム主体の茶褐色土、第3層は砂質赤色ローム層を利用した壁の崩落層、第4層はカマド構築粘土の崩落層である。

壁高は50~73cmを測り、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁体は上から赤色ローム層(第IV層)、黒色土層(第V層)、黄褐色ローム層(第VI層)を利用して平滑で堅固に構築される。壁溝は住居址をほぼ全周する。壁溝巾は11~25cm、深さ1~2cmを測り、断面はU字状を呈する。

床面は黄褐色ローム層(第VI層)上の全面に砂質赤色ロームに茶褐色土、粘土を混ぜた土を平坦に叩きしめて貼床が施される。カマドの周辺は堅固であるが、全体的にはやや軟弱である。

ピットは主柱穴が4個検出された。P₁は20×17cmの楕円形を呈し、10cmの深さを有する。P₂は23×22cmの円形を呈し、12cmの深さを有する。P₃は20×22cmの円形を呈し、20cmの深さを有する。

P₄は23×22cmの円形を呈し、16cmの深さを有する。断面形はP₁・P₃・P₄がU字状、P₂が逆台形状を呈する。



第41図 H10号住居址実測図

カマド

カマドは北壁の中央にあり、長さ120cm、巾100cmの規模を有する。残存状況は非常に悪い。煙道部は壁体を50×40cmの半円状に掘り込んで設けられる。火床部は壁下の床面に100×60cmの不整形に浅く掘り窪めた後、砂質ローム（第6層）を埋めもどして構築される。火床部の中央奥壁寄りには、方柱状に面取りされた軽石を直立させ、支脚としている。天井・袖部は崩落が激しいため旧状は把握できないが、淡褐色の粘土（第1層）を用いて

構築されたと考えられる。

なお右袖部には直方体に面取りした安山岩を配置し、補強材としている。

遺物の出土状況

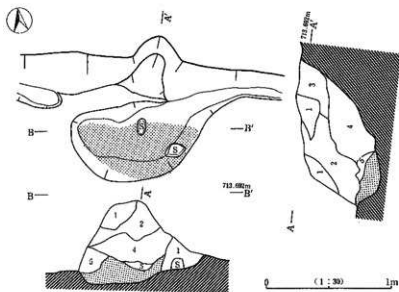
遺物の出土量は割合に少ない。分布状況も特に集中する箇所は認められない。図示した第43図1がカマド内、第43図2が北西コーナーの床面上、第43図3～6が覆土内から出土している。

遺物（第43・44図、図版十八の4）

本住居址からは、土師器片・須恵器片が出土している。

土師器の器種には、甕・坏がある。甕は図示できなかったが、胴部に縦位のヘラケズリをもつ小片が出土している。

坏には第43図1～4がある。口辺部と底部の境の稜が消失する43-1と、口辺部が内傾し、扁平な丸底を呈する43-3～4がある。43-1には内面に黒色研磨が施されている。



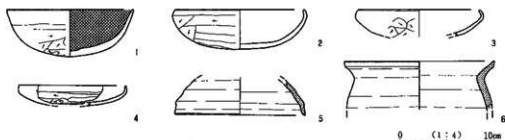
- 1層 洪積褐色土(粘土と暗褐色土) 4層 明褐色土(焼土含有)
 2層 明褐色土(粘土粒子微量含有) 5層 灰褐色土(灰全体)
 3層 明褐色土(砂粒含有) 6層 赤褐色土(砂質ロームが焼けた土)

第42図 H10号住居址カマド実測図

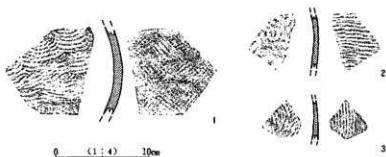
須恵器の器種には、甕・蓋があり、第44図の土器以外はいずれもロクロコナデが施される。甕には第43図5と第44図1～3がある。43-5は口辺部の先端が鋭角的に尖る小型品である。

第12表 H10号住居址出土遺物一覧表

持図番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
43-1	杯	(13.5) 5.0	口辺部は外傾してほぼ直線的に開き、底部は扁平な丸底を呈する。口辺部と底部の境の線は消失する。	外面 口辺部コナデののち底部はヘラズリが施される。 内面 黒色刷磨。	粘土はやや粗い。 回転実測。 カマド内。
43-2	杯	(13.8) 4.2	口辺部は内傾し、底部は扁平な丸底を呈する。	外面 口辺部コナデののち底部はヘラズリが施される。 内面 ナデが施される。	粘土はやや粗い。 回転実測。
43-3	杯	(13.0) 2.8	口辺部は内傾し、底部は扁平な丸底を呈する。	外面 口辺部コナデののち底部はヘラズリが施される。 内面 ナデが施される。	粘土はやや粗い。 回転実測。 ペルト内。
43-4	杯	(11.4) 2.0	口辺部は内傾し、底部は扁平な丸底を呈する。	外面 口辺部コナデののち底部はヘラズリが施される。 内面 ナデが施される。	粘土はやや粗い。 回転実測。 ペルト内。
43-5	甕(須)	(16.0) 5.0	口辺部は「く」の字状に強く外反し、端部で鋭角的になる。胴面はふくらみをもつと考えられる。	内外面右回転ロクロコナデが施される。	粘土は極めて粗い。 回転実測。I区フケ上内。
43-6	蓋(須)	(16.0) 5.0	口辺部は直立し、天井部は丸味を帯びる。	内外面左回転ロクロコナデが施される。 天井部上位に回転ヘラズリが加えられる。	粘土は粗い。 回転実測。 ペルト内。



第43図 H10号住居址出土遺物実測図



第44図 H10号住居址出土遺物拓影図

44-1～3には叩き目が施される。44-1には外面に格子目叩き、内面に円弧文様、44-2には外面に平行叩き、内面に同心円文様と円弧文様、44-3には外面に平行叩き、内面に円弧文様が施される。

蓋第43図6は口辺部が直立し、天井部は丸味を帯びる。天井部の上位には回転ヘラケズリが加えられ、つまみはもたないと考えられる。胎土はやや粗いが、焼成は良好で、搬入品の可能性が強い。

本住居址の遺物は、43-1の土師器坏や、陶器Ⅱ期後半と考えられる須恵器43-5・6が出土しており、古墳時代の様相が認められる。しかし、口辺部が内傾し、偏平な丸底を呈する43-3～4は、当地域において奈良時代土器のメタルマルとされている¹⁾。従って、本住居址の所産期は、新しい様相を示す43-3～4の土器をもって奈良時代として位置づけるのが妥当かと考える。

(1) 小諸市教育委員会 1982 『曾根城遺跡』 花岡弘氏の指摘による。

11) H11号住居址

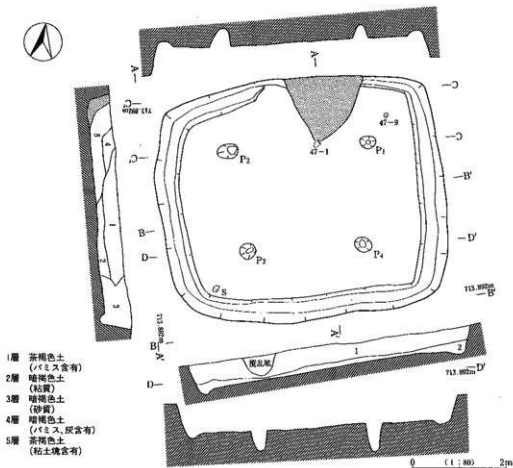
遺構 (第45・46図、図版十九の1・2)

本住居址は発掘区の北端中央い・うー7・8・9グリッド内に位置し、全体層序第IV層明茶褐色土層上において検出された。

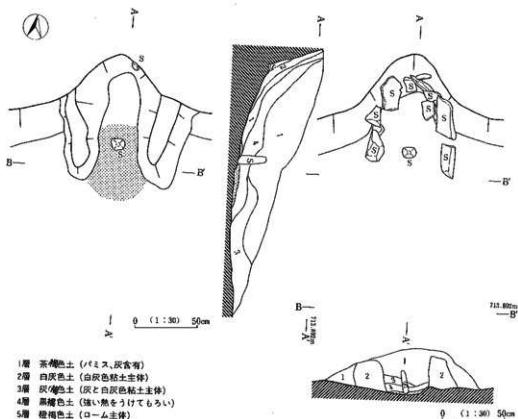
平面形態は南北507cm、東西603cmの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-18°-Wを示す。

覆土は5層に分割された。堆積状態は第3層砂質の茶褐色土の存在で示されるように、南側からの流れ込みが優勢である。第1層は砂質赤色ローム主体の茶褐色土、第2層は粘性の強い暗褐色土、3・4層はカマドの関連層である。

壁高は48-72cmを測り、床面からは急傾斜で立ち上がる。壁体は上から砂質赤色ローム層(第IV層)、黒色土層(第V層)、黄褐色ローム層(第VI層)を利用して平滑に構築されるが、砂質赤



第45図 H11号住居址実測図



第46図 H11号住居址カマド実測図

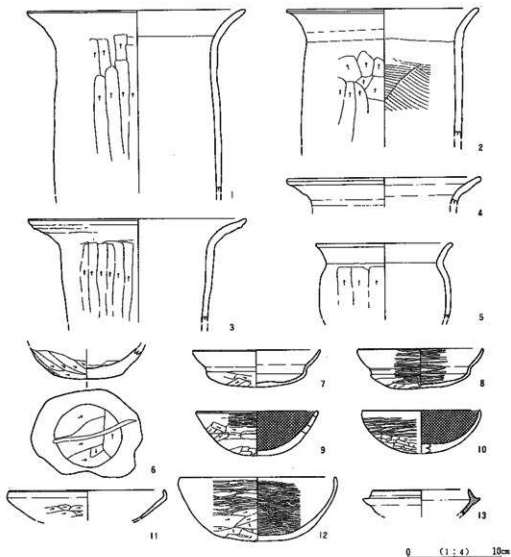
色ローム層（第IV層）の割合が高いため、崩れ易く軟弱である。壁溝は住居址の壁下をほぼ全周する。壁溝巾15～40cm、深さ1～11cmを測り、断面はU字状を呈する。

床面は黄褐色ローム層（第VI層）上の全面に貼床が施される。貼床は砂質赤色ロームに粘土・灰を混ぜた土を堅固にたたきしめ、レベルを均一化して構築されている。特にカマド周辺部は堅固である。

ビットは支柱穴が4個整然と検出された。P₁は33×28cmの楕円形を呈し、深さは29cmを測る。P₂は44×32cmの楕円形を呈し、深さ40cmを測る。P₃は33×33cmの円形を呈し、深さ42cmを測る。P₄は40×30cmの楕円形を呈し、深さ62cmを測る。断面はいずれもU字状を呈する。

カマド

カマドは北壁中央のやや東寄りであり、煙道～焚口部までの長さ125cm、袖部の巾95cmの規模を有する。煙道は壁体を87×50cmの半楕円状に急傾斜で掘り込み、もろい奥壁の崩落を防止するために、大型の角礫を全面に宛って、白色粘土を貼り付けて固定している。火床部は壁直下の床面を浅く掘り窪め、黄褐色ローム（第5層）を平担に敷きつめて、60×60cmの範囲で設けられてい



第47図 H11号住居址出土遺物実測図



第48図 H11号住居址
出土遺物拓影図

る。また、火床中央には方柱状に面取りした軽石を直立させ、支脚としている。天井部は既に崩落し、旧状を窺めないが、住居中央に向って床面上に洩出している灰と白色粘土（第3層）が構材となっていた可能性が強い。袖部は煙道部と同じく大型の角礫が両側に配置され、先述した煙道部の石材と接続する。これに、白色粘土（第2層）を被覆して袖部が構築される。

本址のカマドは、火床部下の地山まで強い熱を受け続けたためか赤変しており、長期間にわた

第13表 H11号住居址出土遺物一覧表

序 号	器種	分量	器 形 の 特 徴	調 査 地	備 考
47-1	甕	(23.0) (19.2) (1.8)	最大径は口辺部にある。口辺部は大きく外反し、胴部は僅かにふくらむがほぼ長胴を呈する。	外面 口辺部コナダののち、胴部は縦位のヘラケズリが施される。 内面 口辺部コナダののち、胴部はナダが施される。	胎土は粗い。 回転実例。 II区フタ土内。
47-2	甕	20.4 (14.4)	最大径は口辺部にある。口辺部は外反し、胴部は軽くふくらむが、ほぼ長胴を呈す。器形の歪みが著しい。	外面 口辺部コナダののち、胴部は縦位のヘラケズリが施される。 内面 口辺部コナダののち、胴部は刷毛状工具によるナダが施され、更にナダが加えられる。	胎土は粗い。完全実例。I、IV区フタ土、カマド内。
47-3	甕	(23.2) (10.8) (1.8)	最大径は口辺部にある。口辺部は長く、強く外反し、胴部は底部に向かって僅かに収縮する。	外面 口辺部コナダののち、胴部は縦位のヘラケズリが施される。 内面 口辺部コナダののち、胴部はナダが施される。	胎土は粗い。 回転実例。 II区フタ土内。
47-4	甕	(20.6) (3.0)	口辺部は強く外反する。	内外面口辺部コナダが施される。	胎土はやや粗い。 回転実例。 I区フタ土内。
47-5	小甕	(14.6) (8.0)	口辺部は「く」の字状に外反し、胴部はふくらをもつ。最大径は口辺部にある。	外面 口辺部コナダののち、胴部は縦位のヘラケズリが施される。 内面 口辺部コナダ、胴部はナダが施される。	胎土はやや粗い。 回転実例。 II区フタ土内。
47-6	甕	(3.4) (7.2)	底部は、平底であるがやや丸味を帯びる。	外面 ヘラケズリが施される。底部中央にはヘラケズリによる沈線が施される。 内面 ヘラケズリののちナダ。	胎土は粗い。 完全実例。 IV区フタ土内。
47-7	杯	(13.4) 3.9	口辺部は底部から僅かに直立した後、大きく外傾して内湾気味に立ち上がる。底部は扁平な丸底を呈する。口辺部と底部の境に線を有する。	外面 口辺部コナダののち、底部はヘラケズリが施される。 内面 口辺部-底部にかけてナダが施される。	胎土は精選されている。回転実例。 カマド内。
47-8	杯	13.4 4.3	口辺部と底部の境に線を有する。口辺部は底部から僅かに直立した後、大きく外傾して内湾気味に立ち上がる。底部は扁平な丸底を呈する。	外面 口辺部コナダののち、底部はヘラケズリが施され、ヘライガキが加えられる。 内面 口辺部-底部にかけてナダが施され、ヘライガキが加えられる。	胎土は精選されている。完全実例。 II区フタ土内。
47-9	杯	12.8 4.7	口辺部は直線的に開き、底部は丸底を呈する。	外面 口辺部コナダののち、底部はヘラケズリが施され、口辺部にヘライガキが加えられる。 内面 黒色研削。	胎土はやや粗い。 完全実例。
47-10	杯	(12.6) 4.6	口辺部は斜か、内湾気味で、丸底の底部にいたる。	外面 口辺部コナダののち、底部はヘラケズリが施され、上位に縦位のヘライガキが加えられる。 内面 黒色研削。	胎土はやや粗い。 回転実例。 カマド内。
47-11	杯	16.6 6.7	口辺部は僅かに内湾し、底部は丸底(平底に近くなる)を呈する。	外面 口辺部コナダののち底部はヘラケズリが施され、ロー-底部上位にかけてヘライガキが加えられる。 内面 口辺部-底部にかけてヘライガキが施される。	胎土は精選されている。完全実例。 II区フタ土内。
47-12	杯	(16.4) (3.1)	口辺部は内傾し、底部は扁平な丸底を呈する。	外面 口辺部コナダののち、底部はヘラケズリが施される。 内面 ナダが施される。	胎土はやや粗い。 回転実例。 IV区フタ土内。
47-13	杯(須)	(10.4) (2.7)	口辺部と底部の境に明確な線を有する。口辺部は内傾し、底部は丸味を帯びる。	内外面 コナダコナダ(左回転)が施される。	胎土はやや粗い。 回転実例。 III区フタ土内。

る使用が考えられる。

遺物の出土状況

遺物の出土量は少なく、分布状況も特に集中する箇所はみられない。図示した遺物の中には、広範囲にわたって接合関係が看取できるものもあり、同一個体の土器片が住居内の各所に散布していたことが伺える。図示した第47図1・2・7・10がカマド周辺、第47図1・2・3・4・5・6・8・9・11・12・13が覆土内から出土している。

遺物(第47・48図、図版二十の1~8)

本住居址からは、土師器片・須恵器片が出土している。

土師器の器種には、甕・杯がある。

甕には第47図1～6があり、いずれも口辺部に最大径を有し、胴部に縦位のヘラケズリが施される。47-1～4は長胴を呈すと考えられ、口辺部が外反する47-1・2、強く大きく外反する47-3・4に分けられる。47-5はやや小型の甕で口辺部は外反し、胴部はふくらみをもつ。尚、本址の甕は全般的にやや器厚が厚い。

坏には第47図7～12があり、ヘラケズリが施される47-7・12、ヘラミガキが加えられる47-8・9・10・11がある。器形的には、口辺部が内湾し、底部は偏平な丸底を呈する47-7・8、素口縁で丸底を呈する47-9、口辺部は内縁が消失して広がり、丸底を呈する47-10・11、口辺部が内傾し、偏平な丸底を呈する47-12がある。尚、47-9・10は内面に黒色研磨が施される。

須恵器の器種には、甕・坏がある。

甕には外面に格子目印き、内面に円弧文様が施される第48図1がある。

蓋は、天井部と口辺部の境に明瞭な稜を有する第47図13と、天井部から口辺部にかけて鋭く屈曲し、直立する口辺部をもつものがある。

本住居址の所産期は出土した土師器・須恵器の様相から古墳時代後葉と考えられる。

12) H12号住居址

遺構（第49・50図、図版二十一の1～4）

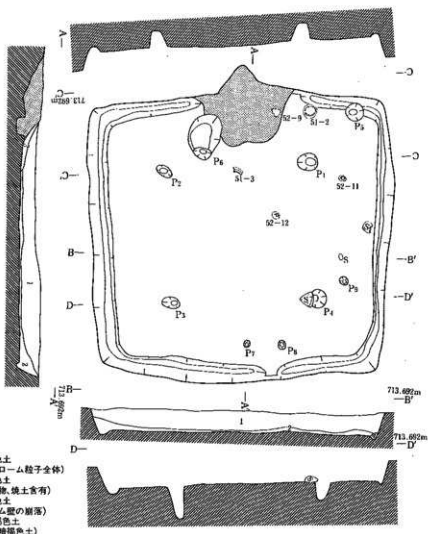
本住居址は発掘区の中央南東寄りのく・け・こー12・13・14グリッド内に位置し、全体層序第IV層明茶褐色土層と一部は第V層黒色土層上において検出された。

平面形態は南北610cm、東西661cmの方角を呈し、主軸方位はN-1°-Eを示す。

覆土は4層に分割され、プライマリーな堆積状態を示す。第1層は砂質赤色ローム主体の茶褐色土、第2層は炭化物・焼土を含む暗褐色土、第3層は砂質赤色ローム層（第IV層）を利用した壁の崩落層、第4層はカマドの関連層である。

確認面からの壁高は34～52cmを測り、床面からは急傾斜で立ち上がる。壁体は上から砂質赤色ローム層（第IV層）、黒色土層（第V層）、黄褐色ローム層（第VI層）を利用して平滑かつ堅固に構築される。壁溝は南壁中央で一部断絶するが、住居をほぼ全周する。壁溝巾は9～34cmを測り、10～11cmの深さを有する。断面はU字状を呈する。

床面は黄褐色ローム層（第VI層）上の全面に貼床が施される。貼床は2面構成され、上位の貼床は住居使用過程に形成されたと考えられる。カマド前から住居の中央に向かって3m程の広がりをもち、カマド付近で4～5cmの厚さを有する。床面の状態は、砂質の茶褐色土を主体とし、黄褐色ローム粒子、焼土、灰を混ぜた土が踏みしめられ、極めて堅緻である。下位の床面には焼土・

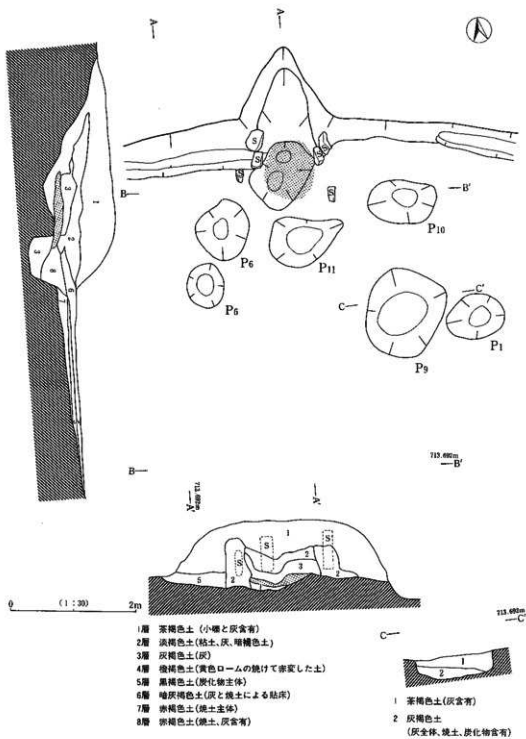


- 1層 茶褐色土
(赤色ローム粒子全体)
- 2層 暗褐色土
(炭化物、焼土含有)
- 3層 茶褐色土
(ローム壁の層層)
- 4層 暗灰褐色土
(灰と暗褐色土)

第49図 H12号住居址実測図

灰が含まれず、堅固で平坦な作りとなっている。

ピットは主柱穴が4個 ($P_1 \cdot P_4$)、北東コーナーの壁溝上から1個 (P_8)、南壁下中央から2個 ($P_2 \cdot P_6$)、 P_4 付近から1個 (P_9)、カマド周辺から5個 ($P_5 \cdot P_{10} \sim P_{13}$)、計13個が検出されている。主柱穴は整然と配置され、 P_1 は43×36cmの円形を呈し、40cmの深さを有する。 P_2 は37×22cmの長楕円形を呈し、36cmの深さを有する。 P_3 は41×24cmの長楕円形を呈し、70cmの深さを有する。 P_4 は38×40cmの円形を呈し、40cmの深さを有する。断面形は、 $P_1 \cdot P_2$ が逆台形状、 $P_3 \cdot P_4$ がU字状を呈する。尚、 P_4 は西側の上部部に礫が配されていた。 P_8 は42×40cmの円形を呈



第50図 H12号住居址カマド実測図

し、16cmの深さを有する。P₇・P₈は断絶する壁溝の前に整然と配置され、P₇は13×13cmの円形を呈し、深さ21cm、P₈は15×21cmの円形を呈し、深さ7cmを測る。P₉は18×16cmの円形を呈し、8cmの深さを有する。カマド周辺のビット（P₆・P₁₀～P₁₂）については後述する。

カマド

カマドは北壁中央にあり、焚口～煙道部までの長さは135cm、袖部の巾90cmの規模を有する。煙道部は壁体を77×80cmの舟先状に緩らかな傾斜で掘り込み、火床部は壁下の床面を40×50cmの楕円状に6～7cm掘り込んだ後、灰混じりの茶褐色土（第1層）を埋めもどし、更に黄褐色ローム（第4層）を10cm前後の厚さで敷きつめて構築される。天井部は既に崩落しているが、袖部と同じ第2層を使用して構築され、激しい熱を受けたためか、著しく赤変した状態であった。袖部は、灰・粘土・暗褐色土を混ぜた土（第2層）を用いて構築され、残存状況は良好である。補強材には、直方体に面取りした安山岩を東西に3個ずつ配置している。

火床部の前からは60×38cmの不整形を呈し、深さ13cmを測るP₁₁が検出されている。カマドの土層断面ではP₁₁内には、灰・焼土（第5・6層）が充填された後、火床部（第4層）、貼床（第8層）が被覆していることが看取され、住居使用時において当ビットは直接利用されていなかったと考えられる。この他、上位の貼床上からP₈、下位の貼床上からP₉、貼床下からP₁₀が検出されている。P₈は97×68cmの不整形を呈し、一段のテラスを有する。深さは25cmを測り、完掘すると底部を2箇所有する。P₉はP₁の西側にあり、62×70cmの不整形を呈し、深さ30cmを測る。埋設土は2層に分割されるがいずれも灰を含有し、所謂「灰落し」として機能した可能性が強い。但し、当ビットは上位に貼床が施されていることから長期間にわたる使用は考え難い。P₁₀は55×34cmの楕円形を呈し、深さ13cmを測るが、性格については不明である。

遺物の出土状況

遺物の出土量は極めて多く、分布状況は特にカマド内及びその周辺部に集中する傾向が看取される。図示した第51図2・3・4・5・6・7・8、第52図9・15・17がカマド内及びその周辺部、第52図11・12・16が床面上、第51図1、第52図10・13・14が覆土内から出土している。

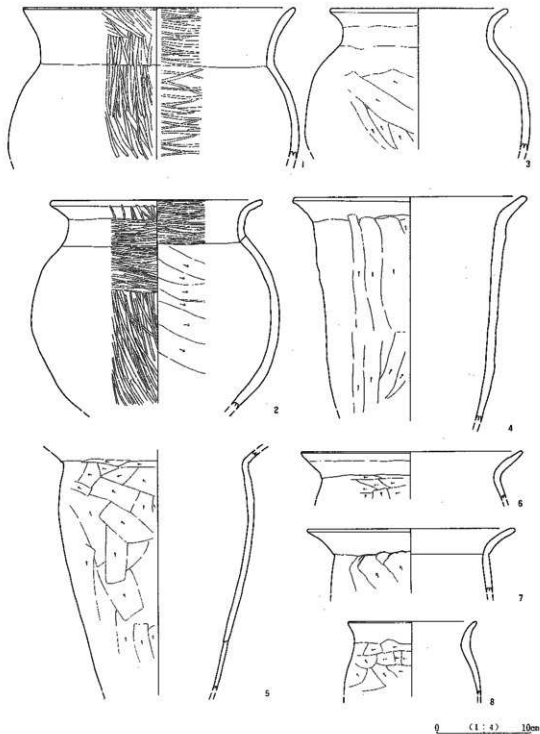
遺物（第51・52・53図、図版二十二の1～9）

本住居址からは、土師器片・須恵器片・弥生土器片が出土している。

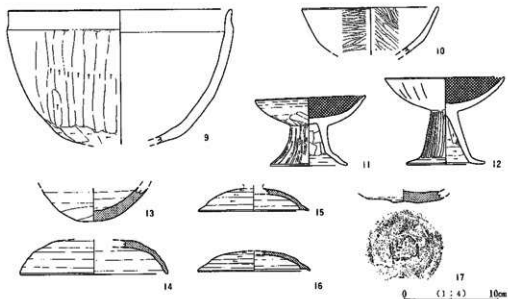
土師器の器種には、甕・小甕・鉢・高杯がある。

甕には、胴部に最大径を有し、球胴を呈する第51図1～3と口辺部に最大径を有し、長胴を呈する第51図4～7がある。球胴を呈する51-1～3は、ヘラミガキが施される51-1・2と、ヘラケズリが施される51-3に分けられる。長胴を呈する51-4～7はいずれも胴部に縦位のヘラケズリが施され、51-4のみ器厚が厚く甕とも考えられる。

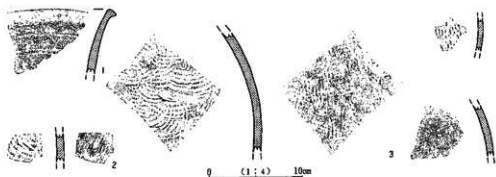
小甕第51図8は胴部に最大径を有し、横位・斜位の丁寧なヘラミガキが施される。



第51图 H12号住居址出土遗物实例图〈1〉



第52図 H12号住居址出土遺物実測図〈2〉



第53図 H12号住居址出土遺物拓影図

鉢第52図9は、口辺部は僅かに内傾し、底部～胴部にかけては半円状を呈する。胴部には縦位、底部には横位のヘラケズリが施される。尚、底部が欠損しているため明らかにできなかったが孔を有する甌であることも考えられる。

杯には、口辺部と底部の境の稜が消失し、ヘラミガキが施される第52図10と、図示できなかったが口辺部が内傾し、偏平な丸底を呈するものがある。

高杯第52図11・12は杯部が素口縁を呈し、丸味を帯びる。胴部は柱状を呈し、裾部は屈曲して大きく開くが、52-11は短く、52-12は長く、スリムな器形である。

須恵器の器種には、甕・蓋・杯がある。

甕は第52図3・第53図1～4がある。52-3は丸底を呈し、底部にヘラナデが加えられる。53-1

第14表 H12号住居址出土遺物一覧表

神田 番号	図種	法量	形 状 の 特 徴	調 査	備 考
51-1	環	(29.6) (16.0) —	最大径は胴部中位にある。口辺部は大きく「く」の字状に外反し、胴部は丸く球形を呈す。内面の口辺部と胴部の境には縁を有する。	外面 斜位、縦位のヘラミガキが施される。 内面 縦位のヘラミガキが施される。	胎土は粗い。印転実面。I区フタ上内。
51-2	環	22.0 (21.0) —	最大径は胴部中位にある。口辺部は外反し上半で強く屈曲する。胴部は球形を呈する。	外面 口辺部上半は縦位の粗いヘラミガキ。口辺部下半は胴部上半は縦位のヘラミガキ、胴部下半は斜位のヘラミガキが施される。 内面 口辺部はヘラミガキ、胴部はナデが施される。	胎土はやや粗い。完全実面。
51-3	環	(18.5) (15.0) —	最大径は胴部中位にある。口辺部はほぼ直立して上半部で外反する。胴部は球形を呈する。胎形の歪み著しい。	外面 口辺部-胴部上位はヨコナデ及びヘラナデが施され、胴部中位-下位は斜位のヘラケズリが施される。 内面 口辺部ヨコナデ、胴部ナデが施される。	胎土はやや粗い。印転実面。
51-4	蓋 (瓶)	(24.5) (24.0) —	最大径は口辺部にある。口辺部は緩く外反し、胴部は底面まで僅かに収縮して直線的に下がる。	外面 口辺部ヨコナデのち胴部は縦位のヘラケズリが施され、中位にナデを加える。 内面 口辺部ヨコナデ、胴部はナデ。	胎土は粗い。印転実面。カマド、I区区フタ上内。
51-5	環	(20.8) (25.5) —	最大径は口辺部にあると思われる。口辺部は「く」の字状に強く外反する。胴部は上位で僅かにふくらむがほぼ直線を示す。	外面 口辺部ヨコナデのち胴部は縦位、斜位のヘラケズリが施され、中位にナデを加える。 内面 ナデ。	胎土はやや粗い。印転実面。カマド内。
51-6	環	(23.6) (5.0) —	最大径は口辺部にあると思われる。口辺部は強く外反し、胴部は上位で軽くふくらむ。	外面 口辺部ヨコナデのち胴部はヘラケズリが施される。 内面 口辺部ヨコナデ、胴部はナデが施される。	胎土はやや粗い。印転実面。カマド内。
51-7	環	(21.8) (6.6) —	最大径は口辺部にあると思われる。口辺部は「く」の字状に外反し、胴部は僅かにふくらむ。	外面 口辺部ヨコナデのち胴部は斜位のヘラケズリが施される。 内面 口辺部ヨコナデ、胴部はナデが施される。	胎土は粗い。印転実面。カマド内。
51-8	小袋	(14.6) (8.6) —	最大径は胴部にある。口辺部は緩く外反し、胴部は軽くふくらむ。	外面 口辺部ヨコナデのち、胴部は縦位のヘラケズリが施される。 内面 口辺部ヨコナデのち、胴部はナデが施される。	胎土は粗い。印転実面。カマド付近。
52-9	鉢	(24.8) (16.1) —	口辺部は厚く内傾し、胴部との境で縁をもつ。胴部は内湾気味に収縮する。	外面 口辺部ヨコナデのち、胴部は縦位、斜位のヘラケズリが施される。 内面 口辺部-胴部中位までヨコナデ、下位でナデが施される。	胎土はやや粗い。印転実面。
52-10	杯	(14.6) (5.0) —	口辺部は直線的に外傾する。口辺部と底面の境の縁は消滅する。	外面 口辺部-底面まで、横位のヘラミガキが施されるが、ヘラケズリの痕跡も残る。 内面 口辺部-底面まで斜位のヘラミガキが施される。	胎土はやや粗い。印転実面。II区フタ上内。
52-11	高杯	9.0 7.2 8.2	杯部は素口縁で、丸みをおびる。柱状部は短く、僅かに広がり、底部で外反する。	外面 杯部は口辺部ヨコナデのち、ヘラナデが施され、胴部は粗いヘラミガキが施される。 内面 杯部は黒色研磨、胴部はヘラケズリ、ナデが施される。	胎土はやや粗い。完全実面。
52-12	高杯	12.8 9.2 (6.6)	杯部は素口縁で丸みをおびる。柱状部はほぼ直線的に広がり、底部で大きく外反する。	外面 杯部は上部-下部までヘラナデが施され、胴部は柱状部でヘラミガキ、底部でヘラナデが施される。 内面 杯部は色研磨、内面ヘラケズリが施される。	胎土はやや粗い。完全実面。
52-13	蓋 (瓶)	— (3.4) —	底面のみ。丸縁を呈する。	内外面ともロクロコナデ(左回転)が施される。外面はヘラナデが施される。	胎土は粗い。完全実面。フタ上内。
52-14	蓋 (瓶)	11.5 (2.4) —	内面の天井部と口辺部の境にかえりを有す(2.4)。天井部は丸味を帯び、口辺部は僅かに内湾する。換み部は欠損のため不明。	内外面ともロクロコナデ(左回転)が施される。天井部の外面は印転ヘラケズリ(右回転)が加えられる。	胎土は極めて粗い。印転実面。IV区フタ上内。
52-15	蓋 (瓶)	11.8 (2.3) —	内面の天井部と口辺部の境にかえりを有す(2.3)。天井部は丸味を帯び、口辺部は僅かに内湾する。換み部は欠損のため不明。	内外面ともロクロコナデ(左回転)が施される。天井部の外面は印転ヘラケズリ(右回転)が加えられる。	胎土は極めて粗い。印転実面。カマド内。
52-16	蓋 (瓶)	(16.0) (3.2) —	天井部から口辺部にかけて丸味をおびる。	内外面ともロクロコナデ(左回転)が施される。天井部の外面は印転ヘラケズリ(右回転)が加えられる。	胎土は精選されている。印転実面。床土。
52-17	杯 (瓶)	— (1.2) (12.6)	底面のみ。平底。	内外面ロクロコナデのち外面に印転ヘラケズリを加える。	胎土はやや粗い。完全実面。カマド内。

～4は、櫛描波状文が施される53-1、外面に平行叩き、内面に円弧文様が施される53-2、外面に格子目叩き、内面に円弧文様が施される53-3、外面にのみ平行叩きが施される53-4がある。蓋には、内面にかえりを有する第52図14・15と、口辺部から天井部にかけて丸味を帯びる第52図

16がある。いずれも天井部に回転ヘラケズリが施される。

杯は底部に回転ヘラケズリが施される第52図17がある。

弥生土器は、頸部に櫛描横走沈線が施される赤色塗彩の壺形土器第53図6が出土している。

本住居址の出土土器は、土師器・須恵器に古墳時代の様相が強く認められるが、51-5~7の土師器の長胴甕、52-17の須恵器杯に奈良時代の要素を見い出せる。従って本住居址の所産期は奈良時代初頭と考えたい。

13) H13号住居址

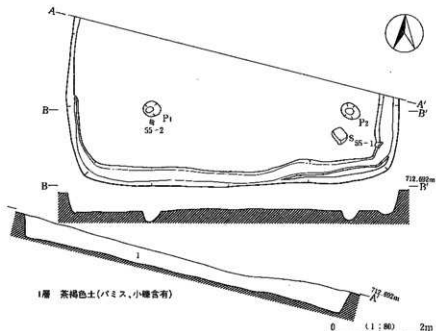
遺構 (第54図、図版二十三の1)

本住居址は発掘区の北端中央東寄りのい・う・え-12・13・14グリッド内に位置し、全体層序第IV層明茶褐色土層、一部は第V層黒色土層上において検出された。遺構の北半部は発掘区外のため未調査である。

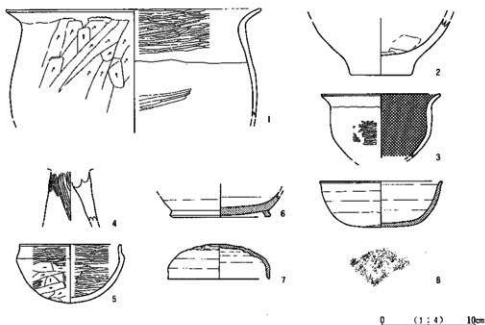
平面形態は東西701cmを測り、大型の方形か長方形を呈する住居址と考えられる。

覆土は、砂質赤色ロームを主体とする茶褐色土1層で構成される。

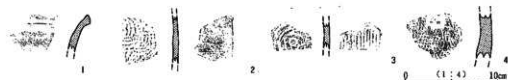
確認面からの壁高は38~55cmを測り、床面からはほぼ垂直に立ち上がる。壁体は上から砂質赤色ローム層(第IV層)、黒色土層(第V層)、黄褐色ローム層(第VI層)を利用して、平滑で堅固



第54図 H13号住居址実測図



第55図 H13号住居址出土遺物実測図



第56図 H13号住居址出土遺物拓影図

に構築される。壁溝は西壁の一部を除く壁下から検出された。壁溝巾は8～38cmを測り、東壁から南壁にかけては巾広い。深さは0、5～11cmを測り、断面はU字状を呈する。

床面は黄褐色ローム層（第VI層）上の全面にわたって貼床が施される。貼床は砂質ロームを主体とする土を薄く叩きしめて構築されるが、やや軟弱で崩れ易い。

ビットは支柱穴が2個検出された。P₁は40×36cmの楕円形を呈し、深さは24cmを測る。P₂は42×32cmの楕円形を呈し、24cmの深さを有する。断面形はいずれもU字状を呈する。尚、P₂付近には、礫が配されていた。

カマドは未調査の北半部の北壁にあることが推察される。

遺物の出土状況

本住居址の遺物の出土量は少ない。また、特に集中する箇所も見られないが、P₂の周辺に若干偏在する傾向が看取される。図示した第55図1が南東コーナー壁溝上、第55図2がP₁南側の床面

第15表 H13号住居址出土遺物一覧表

種別 番号	器種	数量	器形の特徴	調査	備考
55-1	甕	(26.8) (11.5) —	口辺部は斜く、強く外反し、胴部は斜くふくらむ。最大径は口辺部にある。	外面 口辺部ヨコナダののち、胴部は斜位のヘラケズリが施される。 内面 口辺部ヨコナダ、胴部ナダののち、口辺部に丁寧な、胴部に薄なヘラミガキが施される。	胎土はやや粗い。 回転実用。
55-2	甕	(5.6) (6.8) 6.4	胴部下位～底部のみ。胴部下位はふくらみ、底部は平底を呈する。	外面 ナダが施される。 内面 ヘラケズリののち、ナダが施される。	胎土はやや粗い。 完全実用。
55-3	小甕	(12.6) (6.8) —	口辺部は外反し、胴部は斜くふくらむ。	外面 口辺部ヨコナダののち、胴部は横位のヘラミガキが施される。 内面 黒色研磨。	胎土はやや粗い。 回転実用。 フタ土内。
55-4	壺	(10.7) 6.2 —	口辺部は僅かに内傾し、底部は丸底を呈する。	外面 口辺部ヨコナダののち、底部はヘラケズリを施し、口辺部に横位、底部に不整方向のヘラミガキを施える。 内面 横位のヘラミガキ。	胎土はやや粗い。 回転実用。 フタ土内。
55-5	高坪	(5.2) —	柱状部のみ。裾部に向かって広がる。	外面 横位のヘラミガキを施す。 内面 粗いヘラナダを施す。	胎土はやや粗い。 回転実用。 フタ土内。
55-6	甕 (甕)	(2.5) 台径 10.8	内面は大きく開き、胴部は内筒気味に立ち上がる。	内外面ロクロヨコナダ(右回転)ののち、高台黏付によってヨコナダを施す。	胎土はやや粗い。 完全実用。 フタ土内。
55-7	蓋 (甕)	11.7 (4.7) —	天井部から口辺部にかけて丸味を帯びるが、天井部の上位で偏平となる。	内外面ロクロヨコナダ(右回転)ののち、天井部は回転ヘラケズリ(左回転)が施される。但し回転ヘラケズリは粗雑で未調整部分も多い。	胎土はやや粗い。 回転実用。 フタ土内。
55-8	杯 (甕)	(12.7) (4.8) (7.0)	口辺部はあまり開かず、僅かに内湾し、端部で外反する。底部は平底。	内外面ロクロヨコナダ(右回転)ののち、底部にヘラナダを施す。	胎土はやや粗い。 回転実用。 フタ土内。

上、他は覆土内から出土している。

遺物(第55・56図、図版二十三の2～5)

本住居址からは、土師器片・須恵器片が出土した。

土師器の器種には、甕・小甕・壺・杯・高坪がある。

甕第55図1は口辺部に最大径を有し、胴部はふくらみをもち、斜位のヘラケズリが施される。

甕はこの他に胴部にヘラミガキが施され、球胴を呈すると考えられるもの、縦位のヘラケズリが施され、長胴を呈すると考えられるものが出土している。第55図2は底部破片である。

小甕第55図3は口辺部が外反する器形で外面にヘラミガキ、内面に黒色研磨が施される。

壺第55図4は口辺部が内傾し、丸底を呈する。内外面にはヘラミガキが施される。

杯には、口辺部が内傾し、偏平な丸底を呈する小片が出土している。

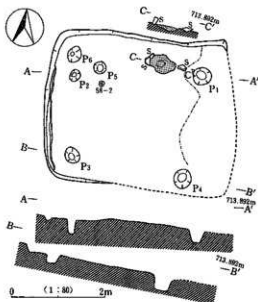
高坪第55図5は、脚部の柱状部の破片でヘラミガキが施される。

須恵器の器種には、壺・甕・蓋・杯があり、第56図の上器以外はいずれもロクロヨコナダが施される。

甕第55図6は高台部を有する。

甕第56図1～4は、櫛溝波状文が施される56-1、内面に円弧文様が施される56-2、外面に平行叩き、内面に同心円文様が施される56-3、外面に平行叩きが施される56-4などがある。

蓋第55図7は、天井部と口辺部の境の稜がほぼ消失し、天井部は丸味を帯び、口辺部はほぼ直



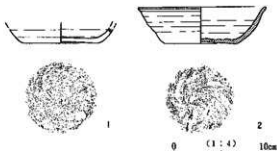
第57図 H14号住居址実測図

層で構成される。

確認面からの壁高は0～13cmを測り、床面からは急峻斜で立ち上がる。壁体は黒色土層（第V層）を利用して構築されるがやや軟弱で凹凸も激しい。壁溝は西壁下から検出された。壁溝巾3～13cm、深さ3～6cmを測り、断面はU字状を呈する。

床面は黒色土層（第V層）上の全面に砂質ロームを薄く叩きしめて貼床が施される。極めて起伏が激しく、軟弱な構築状態である。

ピットは支柱穴が4個、北西コーナーのP₂付近から2個、計6個検出された。支柱穴P₁～P₄の規模はP₁が40×39cmの円形を呈し、30cmの深さを有する。P₂は26×23cmの円形を呈し、32cmの深さを有する。P₃は32×32cmの円形を呈し、20cmの深さを有する。P₄は42×37cmの円形を呈し、



第58図 H14号住居址出土遺物実測図

立する。

坏第55図8は器高が高く、口径と底径の差が少ない器形で、底部は全面にヘラナデが加えられる。

本住居址の所産期は奈良時代と考えられる。

14) H14号住居址

遺構（第57図、図版二十四の1～3）

本住居址は、発掘区の北東部う・えー18・19グリッド内に位置し、全体層序第V層黒色土層上において検出された。

遺構の東部が削平されているため、正確な平面形態は把握できないが、南北320cm、東西400cm程の長方形を呈すると考えられる。

覆土は、砂質赤色ロームを主体とする茶褐色土1

30cmの深さを有する。断面形はい

ずれもU字状を呈する。尚、P₁・

P₄は床面が削除された東部から

検出されたため、旧状では現状の

計測値よりも若干高い深度を有し

ていたと考えられる。北西コー

ナーのピットはP₅が30×28cmの

円形、P₆が37×30cmの楕円形を呈し、深さはそれぞれ9cm・14cmと

第16表 H14号住居址出土遺物一覽表

納品 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 査	備 考
58-1	杯	— <1.6> 8.0	平底の底部。	内外面 \times クロコナデ(右回転)が施される。底部は回転 糸切り。	胎土はやや粗い。 完全実測。 ツク土内。
58-2	杯 (須)	14.5 3.8 8.6	口辺部は内湾気味で、端部で僅かに外反す る。底部は平底。器形は歪みが著しい。	内外面 \times クロコナデ(左回転)のち、底部は回転糸切 り。	胎土はやや粗い。 完全実測。 床上。

浅い。

カマド

カマドは北壁下の中央のやや東寄りに位置するが、ほとんどが削除されており、遺構確認当初から、火床部が露出していた。火床部は深さ10cmの57×40cmの不整形円形の掘り込みに黄褐色ローム（熱を受けて赤変している）を埋めもどして設けられる。火床部の東西両側には角礫が配置され、カマドの袖部の構材として機能した可能性が強い。煙道については全く不明であるが、本遺跡の他の住居址のカマドに一樣にみられた壁体への掘り込みは確認されなかった。

遺物の出土状況

遺物の出土量は極めて少なく、散布する程度である。図示した遺物は第60図1が覆土内、第60図2がP₂近くの床面上から出土している。

遺物（第58図、図版二十四の4）

本住居址からは、土師器片・須恵器片が出土している。

土師器の器種には、甕・杯がある。

甕は器厚が薄く、胴部にヘラケズリが施される小片が出土している。

杯第58図1は底部に回転糸切りが施され、未調整である。

須恵器の器種には、甕・蓋・杯がある。

甕には叩き目の施される破片と、クロコナデの施される破片が出土している。

杯第58図2は口辺部が僅かに内湾し、底部に回転糸切りが施される。

本住居址の所産期は平安時代前葉と考えられる。

15) H15号住居址

遺構(第59図、図版二十五の

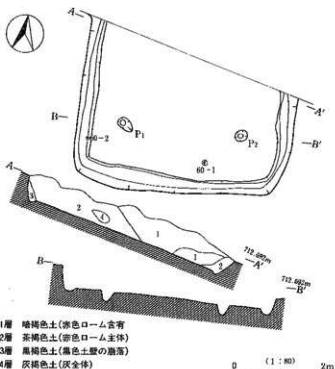
1)

本住居址は発掘区の北東部にイ・ウー17・18・19グリッド内に位置し、全体層序第V層黒色土層一部は第IV層明茶褐色土層上において検出された。遺構の北半部は発掘区外のため未調査である。

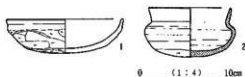
平面形態は東西457cmを測り、方形か長方形を呈する住居址と考えられる。

覆土は4層に分割された。第1層は砂質赤色ロームを含む暗褐色土、第2層は砂質赤色ローム主体の茶褐色土、第3層は黒色土層(第V層)を利用した壁の崩落層である。灰を主体とする第4層は、北壁に存在が予想されるカマドの流出層と考えられる。

確認面からの壁高は37~51cmを測り、床面からはほぼ垂直に立ち上がる。壁体は上から黒色土層(第V層)、黄褐色ローム層(第VI層)、一部で砂質赤色ローム層(第IV層)を利用して、平滑で堅固に構築される。壁溝は調査範囲の壁下をほぼ全周する。壁溝巾は12~30cm、深さ2.5~9cmを測り、断面はU字状を呈する。



第59図 H15号住居址実測図



第60図 H15号住居址出土遺物実測図

第17表 H15号住居址出土遺物一覧表

発掘番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
60-1	杯	11.4 3.6 --	口辺部はほぼ直立し、底面は扁平な丸底を呈する。	外面 口辺部ココナテのち、底面はヘラズリが施される。 内面 ロー底部までナゲが施される。	胎土はやや粗い。完全実例。
60-2	甕(瓶)	8.8 5.2	最大径は胴部上位にある。口辺部は底口で若干下傾し、肩部は強く曇る。	内外面コクココナテ(右回転)のち、底面は回転ヘラズリ(左回転)が施される。	胎土は精選されている。自然釉付着。完全実例。

床面は、黄褐色ローム層（第VI層）上の全面に施される。貼床は砂質ロームを叩きしめておおむね平坦で堅固に構築される。

ピットは主柱穴が2個検出された。P₁は37×22cmの楕円形を呈し、23cmの深さを有する。P₂は27×29cmの円形を呈し、23cmの深さを有する。断面形はいずれもU字状を呈する。

カマドは土層断面第4層から、北壁に位置すると考えられる。

遺物の出土状況

遺物の出土量は少なく、散布する程度である。図示した第60図1が南壁下東寄りの床面上、第60図2が南西コーナーの壁面上から出土している。

遺物（第60図、図版二十五の2～3）

本住居址からは、土師器片・須恵器片が出土している。

土師器の器種には、甕・坏がある。

甕は長胴を呈すと考えられる胴部にヘラケズリが施される器厚の厚い小片が出土している。

坏第60図1は口辺部が直立し、扁平な底部を有する。その他、内面に黒色研磨が施される破片も検出されている。

須恵器の器種には、壺・蓋がある。

壺第60図2は広口を呈し、口辺部から肩部が強く屈曲して張りをもち、丸底の底部に至る。底部には回転ヘラケズリが施される。

甕はロクロヨコナデが施される破片、蓋は天井部に回転ヘラケズリが施される破片が出土している。

本住居址の所産期は、奈良時代と考えられる。

16) H16号住居址

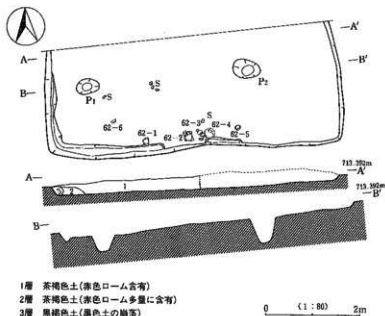
遺構（第61図、図版二十五の4、二十六の1）

本住居址は発掘区の北東端い・うー19・20・21グリッド内に位置し、全体層序第IV層黄褐色土層上において検出された。遺構の北半部は発掘区外のため未調査であるが、現状ではため池が造られており、破壊されている可能性が高い。

平面形態は東西628cmを測ることから大型の方形か長方形を呈する住居であったと考えられる。

覆土は3層に分割されたが東半部は擾乱をうけているため全容は把握できない。第1層は砂質赤色ロームを主体とする茶褐色土、第2層は砂質赤色ロームを多量に含む茶褐色土、第3層は黒色土（第V層）を利用した壁の崩落層と考えられる。

確認面からの壁高は1～25cmを測るが、第3層の存在から往時は更に高い壁高を有していたことは確実である。壁体も黄褐色ローム層（第VI層）を利用するが、黒色土（第V層）も利用した



第61図 H16号住居址実測図

- 1層 茶褐色土(赤色ローム含有)
 2層 茶褐色土(赤色ローム多量に含有)
 3層 黒褐色土(黒色土の崩落)

0 (1:80) 2m

と考えられる。壁面は南壁で凹凸が激しいが、他は平滑で堅固な構築状態である。壁溝は南西コーナーの壁下から検出された。壁溝巾は1~21cm、深さ2.5~6cmを測り、断面はU字状を呈する。

床面は黄褐色ローム層(第VI層)上の全面に砂質ロームを叩きしめ、平坦に構築されるがやや軟弱である。

ピットは主柱穴が2

個検出された。P₁は49×30cmの楕円形を呈し、深さは33cmを測る。P₂は59×40cmの楕円形を呈し、深さは53cmを測る。断面形はいずれも逆台形状を呈する。

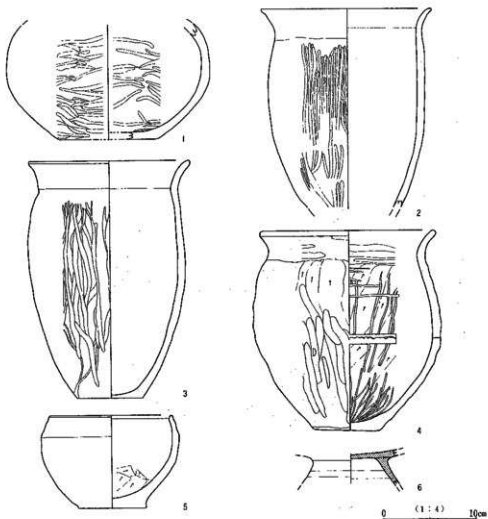
カマドは北壁に存在すると考えられる。

遺物の出土状況

遺物の出土量は少ないが、完存品の割合が高い。分布状況は特に、南壁中央部の床面上に集中す

第18表 H16号住居址出土物一覽表

採出番号	器種	数量	器形の特徴	調査	備考
62-1	罍	— (12.2) 10.6	胴部は球形に大きくふくらむ。	外面 胴部はヘラナゲののち、ヘラミガキが施される。 内面 胴部はヘラナゲののち粗雑なヘラミガキが施される。	胎土はやや粗い。 回転実測。
62-2	甕	18.2 (20.0) —	最大径は口辺部にある。胴部は僅かにふくらむがほぼ長胴を呈す。	外面 口辺部ヨコナゲののち、胴部は縦位のヘラミガキを施す。 内面 口辺部ヨコナゲ、胴部はナゲが施される。	胎土はやや粗い。 完全実測。
62-3	罍	17.0 25.1 6.8	最大径は胴部にある。口辺部は外反し、胴部は軽くふくらむが、ほぼ長胴を呈する。	外面 口辺部ヨコナゲののち、胴部は縦位のヘラミガキを施す。 内面 口辺部ヨコナゲ、胴部はナゲが施される。	胎土はやや粗い。 完全実測。
62-4	甕	18.2 21.2 5.8	最大径は胴部中位にある。口辺部は外反し、胴部はふくらんで球形に近くなる。	外面 口辺部ヨコナゲののち、胴部は縦位のヘラミガキが施され、口辺部は横位、胴部は縦位の粗いヘラミガキが施される。 内面 外面と同じ。	胎土はやや粗い。 完全実測。
62-5	小罍(鉢)	(12.8) 9.8 7.2	口辺部は内傾し、胴部は内凹する。	外面 口辺部ヨコナゲののち、胴部はナゲが施される。 内面 口辺部ヨコナゲ、胴部はヘラミガキののち、ナゲが施される。	胎土はやや粗い。 回転実測。
62-6	高台 付杯 (須)	— — —	胴部は大きく開き、浅い。	外面 ココヨコナゲののち、高台を貼付け、ココナゲを加えている。	胎土は粘着されている。 完全実測。



第62図 H16号住居址出土遺物実測図

る傾向が看取される。図示した第62図1・2・3・4・5が南壁下中央の床面上、第62図6が南壁とP₁の中間の床面上から出土している。

遺物（第62図、図版二十六の2～5）

本住居址からは土師器片・須恵器片が出土している。

土師器の器種には甕・鉢がある。

甕はいずれも器厚が厚く、ヘラミガキが施される。胴部が球形を呈する第62図1と、長胴を呈する第62図2・3、胴部がふくらんで球形に近くなる第62図4がある。

鉢第62図5は口辺部が内傾し、胴部は内湾する。

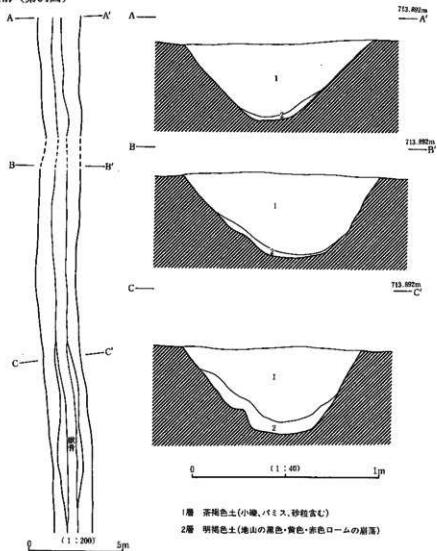
須恵器には高台付坏がある。

高台付坏第62図6は台部が長く外反する。

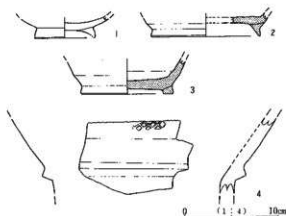
本住居址の所産期は、ヘラミガキの施される同系統の甕の類例に乏しく、他に積極的に年代を首肯する器種も出土していないため、判断にとまどうが、器形的な特徴から奈良時代と考えておきたい。

17) M1号溝状遺構

遺構 (第64図)



第63図 M1 溝状遺構実測図



第64図 M1号溝状遺構出土遺物実測図

本遺構は発掘区のはほぼ中央、い・う・え・お・か・き・く・け・こ・さ—11・12グリッド内において、遺跡を2分するような状態で検出された。

溝巾200cm～225cm、全長27m20cmを測る直線のな溝で、発掘区外の南北両方向に更に長く伸びるものと考えられる。断面はおおむね半楕円状を呈するが、南部において両側に一段のテラスを有する。底面は、北か

ら南へ向って徐々にレベルを低下させ、北端と南端の比高差は40cmを測る。

覆土は2層に分割された。第1層は、小礫、パミス、砂粒を含む茶褐色土、第2層は地山の黒色・黄色・砂質赤色ロームの崩落層である。断面図を見ると明らかなように層序の主体はほぼ第1層によって占められており、非常に急激な埋没であったことが想起される。

溝内からは、ビットその他の施設は検出されなかった。

遺物の出土状況

遺物の出土量は少なく、ほとんどの遺物が第1層内から出土している。分布状況も極めて散漫で、特に集中する箇所は見られない。尚、溝南部の底面近くから、15歳前後と考えられる人骨が検出されている。詳細については鑑定報告を持って別稿で記したい。

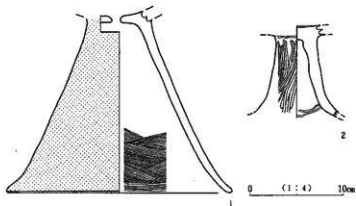
遺物（第64図1～4）

本遺構からは、土師器片、須恵器片、陶器片、時期不明の粟焼きの土器片が検出されている。

土師器の器種には高台付杯（第64図1）がある。口辺部の下位は緩く内湾し、台部は端部で尖

第19表 M1号溝状遺構出土遺物一覧表

検出番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
64-1	高台付杯	— (2.3) (6.4)	底面は平底で、口辺部の下位は緩く内湾する。台部は端部で尖り気味となる。	内外面コロコロナデ(右回転)が施される。高台貼付の後、ココナデが加えられる。	胎土はやや粗い。回転実測。フタナ内。
64-2	底(破)	— (2.5) (12.5)	底面は平底、台部は先端が尖り気味となる。	内外面コロコロナデ(左回転)が施される。高台貼付の後、ココナデが加えられる。	胎土はやや粗い。外面に自然貼付着回転実測。フタナ内。
64-3	粟(破)	— (3.8) (9.7)	底面は平底で台部は、不整な形を呈する。	内外面コロコロナデ(左回転)が施される。高台貼付の後、ココナデが加えられる。	胎土は粗い。外面に自然貼付着。回転実測。フタナ内。
64-4	?	— (8.1)	下部はほぼ直立し、外傾して上部に至る。上部と下部の境には断面三角形の突帯を有する。	内外面ココナデが施される。ココナデ前に変形の押影が施文されている。	胎土は精選されている。回転実測。フタナ内。



第65図 若宮遺跡表採土器実測図

り気味となる。調整は内外面にロクロヨコナデが施されている。

須恵器の器種には甕（第64図2・3）がある。いずれも高台を有する。

第64図4は、時代的にまた器種の面でも不明の土器片である。胎土は精選され、固く焼

きしまっている。

本遺構の所産期は出土遺物に年代的な隔たりが大きいため、判然としないが、断絶は中世以降と考えるのが妥当であろう。

18) グリッド及び表採遺物について

遺物（第65図1・2）

本遺跡のグリッド及び表採遺物は、いずれも重機による耕作土の除去の際中において検出された。弥生土器片、土師器片などがある。

弥生土器の器種には、甕・高杯がある。

甕は図示しなかったが、明瞭な櫛歯波状文が施される頸部破片が出土している。

高杯（第65図1）は、脚部が大きく開き、杯部の中央に焼成後の穿孔がみられる。外面は赤色塗彩、内面には櫛歯状工具による横位の調整が施されている。

土師器の器種には、甕・杯・高杯がある。甕・杯片は小片のため図示しなかった。

高杯（第65図2）は、脚部みの破片で、柱状を呈して頸部に軽く開く。外面には縦位のヘラミガキが施されている。古墳～奈良時代の所産と考えられる。

第20表 若宮遺跡表採遺物一覧表

検出番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
65-1	弥生高杯	— (19.2) (23.8)	脚部は、大きく開く。杯部の底部中央には焼成後の穿孔がみられる。	外面 赤色塗彩、縦位のヘラミガキが施される。 内面 櫛歯状工具による横位の調整が施される。	胎土はやや粗い、回転実面、表採。
65-2	土師高杯	— (9.7)	脚部のみ。柱状部は軽く開く。	外面 縦位のヘラミガキが施される。杯部内面は黒色研削。 内面 持ち取るようなヘラミガキが施され、頸部には横位のヘラミガキが施される。	胎土はやや粗い、完全実面、表採。

V 総 括

若宮遺跡において検出された遺構、遺物の詳細は前章の如くである。

検出された遺構は、竪穴住居址16軒、溝状遺構1基で、所産期はいずれも古墳時代後期～平安時代に求められた。

一方、出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、鉄製品、石製品などがあるが、遺構に伴出する遺物は土師器、須恵器が主体を占めた。

以下、古墳時代後期～平安時代の遺構・遺物を中心として、本遺跡のまとめを行いたい。

遺構

竪穴住居址の所産期は古墳時代後期（H1・11号住居址）、奈良時代（H2・4・5・7・8・9・10・12・13・15・16号住居址）、平安時代（H3・6・14号住居址）の三時期に大別される。このうち、古墳時代後期と奈良時代の住居址は、時代的に極めて近接すると考えられる。

濁川・湯川流域における古墳時代後期の住居址は、北近津⁽¹⁾・西近津⁽²⁾・清水田⁽³⁾・下小平⁽⁴⁾・曾根城⁽⁵⁾・上の城⁽⁶⁾・西八日町⁽⁷⁾・東一本柳⁽⁸⁾等の遺跡で多数検出されているが、周防畑遺跡群中においては、過去二度の調査では未検出であった。今後の調査によって該期の住居址が増加する可能性が強いものの、本遺跡の古墳時代後期の住居址の存在は、近接する南近津、西近津遺跡の古墳時代後期（前～中葉）の住居址群との連なりも、考えられるのではなかろうか。一方、奈良時代の住居址は、周防畑A・B遺跡のいずれにも検出されており⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾、南北に長く展開する周防畑遺跡群中において、奈良時代の集落が広範囲にわたって相当数営まれていたことが推察される。平安時代の集落も同様で、南端の周防畑B遺跡において超過密化することが確認されている⁽¹¹⁾。

住居址の形態は、隅丸方形か方形を呈するものが主体を占めるが、南北軸にくらべ、東西軸が若干長い傾向が認められる住居址が多い。また、住居址の規模は古墳時代後期～奈良時代の住居址は一辺350cm前後の小型のものから、一辺800cmを超える大型のものまで、バラエティーに富むが、平安時代の住居址は概して小型で一辺400cmを超えるものは認められなかった。古墳時代後期～平安時代に移行するに従って住居址の規模が縮小化する傾向は、関東地方を中心とする研究によって指摘されてきたが、佐久平においてもこの傾向は首肯できそうである。この問題は、現在整理進行中の樋村・西八日町遺跡において検出された、総数400軒を超える住居址の分析によって、ある程度結論が得られるであろう。

その他、付属施設については、主柱穴は、4本を基本とするが、H2・5号住居址の主柱穴は

不明確であった。また、H12号住居址からは所謂「灰落し」ピットの他、カマド周辺から多数のピットが検出されていることが注目される。カマドは、13軒の住居址から検出され、遺存状態が極めて良好なものも認められるため、詳細は別項を設けて記したい。

○佐久平におけるカマドについて

佐久平におけるカマドを有する住居址は和泉期では認められず、現状では樋村遺跡、五ヶ城遺跡等に見られる鬼高期前葉の住居址にカマドの初現が認められる。但し、今後の資料増加によって、初現期が若干遅る可能性はある⁽¹²⁾。以下、舞台場⁽¹³⁾・三塚⁽¹⁴⁾・三塚鶴田⁽¹⁵⁾・市道⁽¹⁶⁾・跡部町田⁽¹⁷⁾・三塚町田⁽¹⁸⁾・上桜井北⁽¹⁹⁾・徳田⁽²⁰⁾・後沢⁽²¹⁾・樋村⁽²²⁾・上の城⁽²³⁾・西八日町⁽²⁴⁾・戸塚⁽²⁵⁾・西近津⁽²⁶⁾・北近津⁽²⁷⁾・北一本柳⁽²⁸⁾・今井西原⁽²⁹⁾・下小平⁽³⁰⁾・周防畑A⁽³¹⁾・周防畑B⁽³²⁾・清水田⁽³³⁾・北西久保⁽³⁴⁾・蛇塚B⁽³⁵⁾・兵士山⁽³⁶⁾・和田上南⁽³⁷⁾・関口B⁽³⁸⁾・宮ノ北⁽³⁹⁾・五ヶ城⁽⁴⁰⁾・曾根城⁽⁴¹⁾・犬飼⁽⁴²⁾等、非常に多くのカマドが調査されているにもかかわらず、カマドが内包する諸々の問題は

第21表 五ヶ城遺跡住居址一覽表

遺構	平面プラン			主軸方位	カマド	ピット	時期	備考
	形態	東西	南北					
H1	隅丸方形	420	375	(16.2) ㎡	N-1'-E	北壁中央 (残存良好)	主柱穴 4個	古墳後期 北西部破壊 壁溝あり
H2	隅丸方形	356	334	11.3	N-9'-W	北壁中央	主柱穴 1個 他 3個	奈良時代 H3と重複 H3に面する 壁溝あり
H3	隅丸方形		370	<5.0>		北壁(?)	ピット 2個	平安時代 H2と重複 H3を破壊する
H4	隅丸方形	508	460	22.1	N-12'-W	北壁中央	主柱穴 4個	奈良時代 壁溝あり
H5	隅丸長方形	470	408	18.2	N-15'-W	北壁中央 (東寄り)	主柱穴(?) 4個 東壁下 1個 南壁下 1個	奈良時代
H6	隅丸方形	397	385	14.4	N-4'-W	北壁中央 (残存良好)	主柱穴 4個	平安時代
H7	方形	800	825	61.2	N-5'-E	北壁中央 (東寄り)	主柱穴 4個	奈良時代 壁溝あり 最大の住居址
H8	隅丸長方形	485	416	17.9	N-4'-W	北壁中央	主柱穴 4個	奈良時代
H9	隅丸方形 か長方形	666		<14.7>	N-6'-W	北壁中央 (残存良好)	主柱穴 2個	奈良時代 壁溝あり 南半部未調査
H10	方形	370	382	12.9	N-6'-E	北壁中央	主柱穴 4個	奈良時代 壁溝あり
H11	隅丸長方形	603	507	28.4	N-18'-W	北壁中央 (東寄り)	主柱穴 4個	古墳時代 壁溝あり
H12	方形	661	610	37.4	N-1'-E	北壁中央 (残存良好)	主柱穴 4個 灰落し(?) 1個 他 5個	奈良時代 壁溝あり
H13	方形 か長方形	701		<18.4>		北壁(?)	主柱穴 2個	奈良時代 壁溝あり 北半部未調査
H14	長方形	(400)	320	(12.6)		北壁中央	主柱穴 4個 他 2個	平安時代 壁溝あり 東部破壊
H15	方形 か長方形	457		<12.8>		北壁	主柱穴 2個	奈良時代 壁溝あり 北半部未調査
H16	方形 か長方形	628		<15.1>		北壁(?)	主柱穴 2個	奈良時代 壁溝あり 北半部未調査

全く追求されていない。これは舞台場遺跡に象徴されるように、従来調査されてきたカマドの大半が、残存状況不良のため、旧状を適確に把握することができず、問題を考求するに足る資料となり得なかったからに他ならない。今回の調査によって若宮遺跡からは旧状を復元することが可能なカマドの資料を得ることができた。調査の軒数が少なく、住居相互の時期的な隔たりも少ないため、形態の変遷を追求するには限界があるが、立地など自然環境に左右される地域的な特性や、機能面等の問題についてはある程度論求できる。過去の調査資料も参考にしながら、本遺跡のカマドを位置づけ、更に佐久平全般のカマドについて考えてみたい。

まず、前提作業として本遺跡とその他佐久平の遺跡のカマドの調査例を略述する。

若宮（本）遺跡

佐久市長土呂に所在し、13軒の住居のカマドが調査され、総べてが北壁中央に設けられている。古墳時代後期～奈良時代住居（H1・2・4・5・7・8・9・10・11・12号住居）のカマドは煙道部を舟先あるいは半円状に掘り込み、粘土構築を基本とする。このうち、H4・9・10・11・12号住居のカマドには石材が補強材として使用されている。石材は直方体に面取りされた安山岩が多用される傾向にあるが、H11号住居は割石が用いられている。粘土も橙褐色の粘土が主体であるが、H7・11号住居には灰白色粘土、H12号住居には灰白色粘土と暗褐色土を混ぜた土が使用されており、構築土も遺構によって差異が認められる。また、H11号住居を除くほとんどの住居の火床下に円形状の掘り込みがあり、灰・炭化物を主体とする土が充填されている。

平安時代の住居のカマドはH6・14号住居で認められる。H6号住居のカマドは、煙道部を半円状に掘り込み、直方体に面取りした安山岩と角礫を補強材に、黒色粘土を用いて構築されている。H14号住居のカマドは大半が削平されているため、旧状は把握できないが、袖部の補強材に石が用いられたことは確実である。いずれも火床下の掘り込みは極めて浅い。

以上、若宮遺跡のカマドは、粘土構築を基本とし、袖部には補強材として直方体に面取りした安山岩を多用するが、煙道まで用いられる例は少なく、天井及び器設部まで石材を利用する所謂「石組み」カマドは全くみられなかった。また、構材となる粘土は統一性を欠くことが着取された。

以下、他遺跡のカマドの概要については第22～25表に記すこととするが、その他の資料についても簡単にふれておきたい。

周防畑B遺跡 佐久市長土呂に所在し、奈良～平安時代の住居11軒のカマドが調査された。構築位置は北壁のもの8軒、東壁のものが3軒（東壁の南方隅に構築される住居もあり、平安時代後～末に比定される。）であり、残存状況は大半が不良である。構築材は砂質粘土のみの住居が主体であったが、直方体に面取りした安山岩を袖部の補強材とする例も認められた。

第22表 佐久平カマド一覽表〈1〉

通 跡	所 在	時 期	遺 構	構築位置	構 築 材	煙道の形態	備 考
鎌 田	佐久市 野 沢	平 安	H 1	北壁中央	粘土、河床礫(袖)		
		平 安	H 3	北壁中央	粘土、石組	煙道突出	
		平 安	H 4	北壁中央	鳥居状石組(礫岩)		
舞 台 場	佐久市	古・後	H 1	北壁中央 東壁中央	粘土、石組		
		古・後	H 4	北壁中央			支脚あり
		奈 良	H 5	東壁(南)	天井・袖に再利用		
		古・後	H 7	北壁中央	礎(袖)		支脚あり
		奈 良	H 8	北 壁			
		奈 良	H 9	北壁中央	地山粘質土、礎		
		奈 良	H10	東壁(南)	礎(煙道入口)	壁外突出	
		奈 良	H11	北壁中央	礎(煙道入口)	壁外突出	
		奈 良	H12	北壁中央		壁外突出	
		岸 野	古・後	H13	北壁(東)	河床礫(袖)	
	平 安		H14	北壁(東)			
	平 安		H15	東壁中央			
	古・後		H16	北壁(東)			
	古・後		H18	北 壁			
	古・後		H19	東壁中央			
	平 安		H20	北壁中央			
	古・後		H24	北壁中央	安山岩・小礫		
	奈 良		H37	北壁中央	河原石		
	平 安		H38	北壁中央			火床窪む
	三 塚	佐久市 三 塚	古・後	H 1	北壁中央	直方体加工の砂岩	
平 安			H 2	北壁中央			
古・後			H 3	北壁中央	土器(袖)		支脚あり
三 塚 鶴 田	佐久市 三 塚	平 安	H 1	北壁中央	河原石		
		平 安	H 3	北壁中央	河原石		

第23表 佐久平カマド一覽表〈2〉

遺跡	所在	時期	遺構	構築位置	構築材	煙道の形態	備考		
三塚町田	三塚	古・後	H 1	北壁					
市道	佐久市 三塚	古・後	1住	北壁中央	砂質粘土	舟先状			
		古・後	7住	北壁中央	砂質粘土	舟先状			
		古・後	9住	北壁中央	砂質粘土、河原石				
跡部 町田	佐久市 跡部	古・後	H 1	北壁	黄褐色土、河床礫(袖)	舟先状			
		古・後	H 2	東壁	粘土、島形状石組				
		古・後	H 3	北壁	地山粘質土、灰		支脚あり		
		古・後	H 4	北壁	地山粘質土、河床礫(灰)		支脚あり		
		古・後	H 5	北壁	地山粘質土		支脚あり		
上根井北	佐久市 根井	古・後	H 1	北壁					
		平安	H 2	北壁	河床礫	壁外突出			
		古・後	H 3	北壁	河床礫				
		古・後	H 4	北壁	砂質粘土、河床礫	舟先状			
		平安	H 5	北壁	河床礫				
		平安	H 6	東壁	河床礫(天井、袖、煙道)	舟先状			
		古・後	H 8	北壁	地山粘質土、河床礫				
		古・後	H 9	北壁					
		古・後	H 10	北壁	礫				
		平安	H 11	北壁	礫				
		古・後	H 12	北壁	安山岩				
		古・後	H 14	北壁	粘土、礫炭岩(蓋方体)				
		平安	H 15	北壁	粘土				
		平安	H 16	(東壁)	石組み(安山岩)				
		古・後	H 17	(北壁)					
		平安	H 18	(東壁)	礫利用				
		戸坂	佐久市	平安	K 1	北壁中央	粘土、石組み	半円状	
			新子田	平安	H 3	北壁中央	粘土、安山岩、河床礫		

第24表 佐久平カマド一覽表(3)

遺跡	所在	時期	遺構	構築位置	構築材	煙道の形態	備考
北近津	佐久市 長土岡	古・後	H 1	北壁中央	黄色粘土	壁外突出	支脚石あり
		古・後	H 2	北壁中央	粘土		
今井 西原	佐久市 根ヶ井	古・後	H 2	北壁中央	粘土		火床下掘り込み
		古・後	H 3	北壁中央	石組み(河床礫)	壁体へ掘り込み	
		平安	H 4	北壁中央	紫黑色土、石組み		
		平安	H 5	北壁中央	紫黑色土、石組み		
下小平	岩村田	古・後	H 1	北壁中央	黄色粘土	舟先状	
周防畑A	佐久市 長土岡	平安	H 1	北壁中央	石組み(軽石)	半円状	
		平安	H 2	北壁中央	石組み、粘土	方形状	
		平安	H 3	北壁中央	粘土、礫	舟先状	
		平安	H 4	北壁中央		半円状	
		奈良	H 5	北壁中央	粘土、土器(煙道)	舟先状	煙道残存良好
蛇塚B	佐久市	平安	H 1	南東隅	割石		
		平安	H 2	北壁中央	織(袖)		
	新子田	平安	H 3	南東隅	礫(袖)		
		平安	H 4	南東隅			
		平安	H 5	北壁中央			
関口B	小諸市 関口	平安	H 3	南東隅	地山黄色ローム、灰色粘土	半円状	
		平安	H 4	北壁(東)	凝灰岩(袖)	半円状	
		奈良	H 5	北壁中央	地山透り出し、河床礫(袖) 灰白色粘土、土器		
		平安	H 6	北壁中央	砂質粘土		
宮ノ北	小諸市	古・後	H 1	北壁中央	地山透り出し		
		平安	H 2	東壁中央	灰白色粘土		
		平安	H 3	南東隅	粘土		
	耳取	古・後~宗	H 4	北壁中央	粘土、河原石(島岩状)		
		平安	H 5	北壁中央	粘土、河原石		
		平安	H 6	北壁中央			

第25表 佐久平カマド-覧表〈4〉

遺跡	所在	時期	遺構	構築位置	構築材	煙道の形態	備考
宮ノ北	小諸市 耳取	奈良	H7	北壁中央	粘土、河原石	枘門状	
		平安	H9	北壁中央			
五ヶ城	小諸市	平安	H3	北壁(西)	粘土、礎		
		平安	H4	北壁中央	礎		
		古・後	H5	北東隅	礎		
		平安	H7	北壁(東)	灰白色粘土、河原石		
		平安	H8		礎		
		平安	H9	東壁中央	粘土、砂岩、河原石		
	耳取	平安	H10	北壁中央			
		平安	H11	東壁(北)	粘土、河原石(袖)		
		平安	H12	東壁中央	粘土、河原石		
		古・後	H14	北壁中央	灰白色粘土、河原石		
		平安	H15	北壁中央	地山盛り出し		
曹根城	小諸市	平安	H1	東壁(南)	河原石		
		古・後	H2	北壁	地山盛り出し	舟先状	
		平安	H3	北壁	灰白色粘土、礎(袖)		
	御影	奈良	H4	北壁中央	灰白色粘土、礎	舟先状	
		平安	H5	東壁(南)	河原石、礎石	半円状	
	佐久市 小田井	奈良	H6	北壁中央	灰色粘土	舟先状	
		奈良	H7	北壁中央	灰白色粘土、礎石	舟先状	
		平安	H8	北壁中央	灰白色粘土、河原石	舟先状	
		奈良	H9	北壁中央	粘土	舟先状	
		奈良	H10	北壁中央	灰白色粘土	舟先状	
		奈良	H11	北壁中央	粘土	整体掘り込み	
		平安	H12	東壁(南)		半円状	
		平安	H13	北壁(西)	石組		
横尾	川上村	平安	H1	西壁(北)	石組(カマド)		

清水田遺跡 佐久市岩村田に所在し、古墳時代後期の住居址3軒のカマドが調査された。構築位置はいずれも北壁中央で、石材が多用され、ほぼ完全な石組カマドもみられる。

上の城遺跡 佐久市岩村田に所在し、古墳時代後期～平安時代の住居址49軒が検出された。そのほとんどがカマドを保有する。調査概報ではカマドの形態分類が行われている。

A形態 直方体加工の砂岩質凝灰岩を両袖の芯に使用し、そのまわりを粘質性灰または粘土で堅固に構築し、北壁のはば中央に位置する傾向をいう。

B形態 北壁中央に位置し、カマドの袖部（ほとんど煙道まで）に凝灰質角礫岩を加工した割石を使用する。

C形態 東南隅に位置し、Bと同じ割石を使用するが使用範囲が部分的となる。

D形態 A・B・Cに属さないもの。

A形態は古墳時代後期、B形態は奈良～平安時代前半、C形態は平安時代後～末期において多く認められる形態である。また構築土には砂質粘土が多用されるが遺存状態は概して悪く、石材のみが旧状を留めていることが多い。

西八日町遺跡 佐久市岩村田に所在し、先述の上の城遺跡とともに上の城遺跡群の一面を形成する。古墳時代後期～平安時代の住居址146軒が調査され、大半がカマドを保有する。現在、整理進行中のため、詳細は不明であるが、カマドの様相は上の城遺跡と類似する。

西近津遺跡 佐久市長土呂に所在し、調査された3軒の住居址はいずれもカマドを保有するが詳細は不明である。

樋村遺跡 佐久市平賀に所在し、古墳時代後期～奈良時代を中心とする300軒を超える大集落址が調査された。ほとんどの住居址からカマドが検出され、遺存状況が極めて良好なものが多い。構築位置は北壁中央に偏在する傾向にあり、袖部は地山の強粘土を造り出すか、版築して馬蹄状に構築されるものが主体を占める。補強材として河床礫を用いる例もあるが、多くは認められない。煙道は舟先状のものと、地山を円柱状に長く掘り込んだもの（佐久平ではほとんど認められていなかった）が認められる。また、古墳時代後期の前葉と考えられる住居址も検出されており、佐久平のカマドの初現形態が明らかにされる可能性もある。

兵士山遺跡 佐久市香坂に所在し、平安時代の住居址1軒からカマドが検出された。煙道部は舟先状に掘り込まれ、天井、袖部は、大型の石材によって堅固に構築される典型的な石組みカマドである。構築位置は北壁中央で、斜面の上方にあたる。

北西久保遺跡 佐久市岩村田に所在し、弥生時代中期後半（粟林期）及び古墳時代中期（和泉併行期）の住居址群と、古墳址で著名な遺跡であるが、平安時代の住居址群も検出されている。そのほとんどが平安時代でも後～末期に比定され、カマドの構築位置は東南隅に偏在する傾向にある。

和田上南遺跡 佐久市瀬戸に所在し、平安時代の住居址2軒からカマドが検出された。いずれも北壁にあり、粘土に灰、砂質ロームを混ぜて構材とする。H2は袖に石材を多用している。

この他、中道・北一本柳・東一本柳・後沢等の遺跡でもカマドを付帯する住居址が検出されているが、内容は不明である。

以上、佐久平のカマドを概観すると次のような傾向を指摘できる。まず、構築位置について、本遺跡と表記された遺跡から統計をとると、古墳時代後期では北壁に設けられる例が37軒、東壁が3軒、奈良時代では北壁が21軒、東壁が2軒、平安時代では北壁が39軒、東壁が8軒、東壁でも南方の隅、あるいはその付近に設けられる例が8軒、西壁が1軒となり、北壁に偏在する傾向が看取される。特に古墳時代後期～奈良時代にかけては実に9割以上の割合を占め、該期におけるカマドは北壁（の中央）に構築されるのが一般的と言えそうでも本遺跡もその例にもれない。平安時代では北壁に構築される例がやはり多いが、これは前半期においてみられる特徴で、時代が推移するにつれて東壁や東壁の南方隅に設けられる例が増加する傾向にある。当地域における歴史時代土器の編年が確立されていない段階であるため、この傾向の変遷過程は明確に把握できないが、上の城・西八日町・北西久保等統計化しなかった遺跡でも、灰胎や「かわらけ」質の土器を出す平安時代後～末期の住居址は、東南隅にカマドをもつ例が多いことが確認されている。以上、カマド位置の変遷についても、各時代の好資料が連続とする上の城・西八日町の分析によって、歴史時代土器編年とともに、一応の結論が得られるであろう。

次に、カマドの構築位置が時期的に北壁あるいは東壁・東南隅に偏在する傾向は何に起因するのか、考えてみたい。蛇塚B遺跡の報文では、兵士山遺跡H1号・川上村横尾遺跡H1号・後沢遺跡H9号・和田上南遺跡H1・2号住居址を例にあげ、傾斜面のほぼ上方にカマドが設けられる傾向を指摘した⁽⁴⁹⁾。本遺跡の場合も、南西へ向かう傾斜面に対して反対方向（北方）に構築されており、傾斜地上に位置する遺跡に関しては、この指摘はある程度首肯されるものである。但し、上の城・西八日町・樋村遺跡等ほぼ平坦地に存する遺跡でも、構築位置の規則性は認められるところであり、短絡的に地形的な要因のみによって構築位置が決定されるとは考え難い。当時の社会的・自然的要因を勘案して解決される問題であるが、今回はその指摘のみに届め、樋村・上の城・西八日町遺跡の集落単位の資料を検討して再考したい。

カマドの構材について

カマドの構材は、石材については佐久平全般の遺跡にわたってほぼ統一性のある所見が得られている⁽⁴⁹⁾が、構築土については報告者各自の所見の相違によって千差万別な記載を行ってしまう場合が多い。従って、極めて巨視的なまとめを行う結果となってしまった。地質的な条件から見て便宜上、千曲川西岸地域（野沢・岸野地区等）、千曲川東岸の滑津川流域（平賀地区中心）、湯川・濁川流域（岩村田・長土呂・新子田地区等）の3地域に分けて検討してみたい。

まず、千曲川西岸地域の地山は、酸性の強い緻密な粘質土をベースとし、こぶし大の河床礫を多量に含有する。当地域内のカマドはこの地山を有効に利用し、地山の粘質土と、河床礫を利用する例が多くみられる。その他の構材は、安山岩（上桜井北遺跡H1・2号、舞台場遺跡H2・4号）、直方体加工の砂岩（三塚遺跡H1号）、直方体加工の凝灰岩（上桜井北H14号）などの利用が稀に見られる程度である。

千曲川東岸の滑津川流域の地山は、西岸地域よりも更に強粘質の酸性土が主体で、河床礫はあまり含まない。この地域内での調査例は樋村遺跡のみであるが、広大な調査面積であるため、当地域内の代表例として掲げて大過ないと思われる。樋村遺跡のカマドは先述したように地山の粘質土を構材に用い、その多くが造り出しによって構築される点に特徴があり、石材の利用は僅少である。これは当然、地山の粘質土のみで、補強材を必要としない程強固なカマドが構築できたからに他ならない。

千曲川東岸の湯川・濁川流域は、第一・二追分火山灰流によって覆われる地域¹⁷⁾であるため、地山は火山灰土を基本とする。この地域のカマドは、砂質粘土をベースとして、袖・煙道などの補強材に石材を多用する傾向にある。砂質粘土は黄色・黒色・紫黒色・灰白色・橙色等があり、この地域内で採取できるものは少ない。従って、カマドの構築土は他の地域に依存していたと考えられ、また、粘土がバラエティーに富む傾向にあるのは、供給地が一箇所に限られていなかったことを想起させる。若宮遺跡でもみられた構築粘土の不統一性は、これを象徴するものと言えよう。石材と河床礫、凝灰岩、安山岩、軽石など多くの種類がみられるが、河床礫の比率が高い。但し、千曲川西岸地域と異なるのは、直方体に加工された安山岩も、多用される傾向にあることで、上の城・西八日町・本遺跡などでは特に顕著である。構材としての土器利用は、周防畑A遺跡H5号で煙道に、小諸市関口B遺跡H5号・西八日町遺跡H28号で袖部に使用されているが、全体的には極めて僅少な例と言える。

このように、カマドの構材は地質の条件に制約される傾向にあり、佐久平では大略的に3つの地域で異った様相を示すことが看取された。今回は、形態が明確に把握される調査資料が不足していたため、時代考証を無視した各地域の大略的なカマドの構材のみのまとめに終始してしまったが、今後、良好な資料の集積を待って、古墳時代後期～平安時代にわたるカマドの形態の変遷を追求して行かねばならない。

蛇足 関東など他の地域でカマドの袖の芯に多用されることのある土器（特に長胴甕）は、佐久平では、どの地域においても僅少であり、その要因が何であったか興味深い。

○機能面について

本遺跡で調査された古墳時代後期～奈良時代住居地のカマドはいずれも次のような過程で構築されたと考えられる。

1. 煙道部の形成 北壁体を舟先状に緩らかな傾斜で掘り込む。
2. 火床部の決定 壁下の床面を円形、不整形円形状に掘り窪める（H11を除く）。
3. 補強材の配置 袖・煙道部に石材を配置する。（H4・9・10・12のみ）
4. 火床部の形成 2の掘り込みに灰・炭化物を充填し、砂質ロームを敷きつめる。
5. 袖・天井部の形成 粘土を用いて袖部を馬蹄状に構築し、同質の粘土を高架して天井部（カマドの完成）を形成する。

また、いずれのカマドの形態についても大過はみられないので、一番遺存状態が良好なH9号住居址のカマドを中心として機能面の考察を行いたい。

H9号住居址のカマドは全長152cm、袖部巾92cmを測る大型のものであることは、第IV章で記した。火床面から天井部までの高さは、当カマド内出土の40cm近い器高を有する長胴甕（39—5）と、支脚石の高さ18cmを加えると55～65cm程の規模を有していたことが推測される。他のカマドについては、住居址の大小に比例して若干規模の大小が認められるが、同時代の長胴甕を使用するためにはH9号住居址相当の高さを必要としたことは想像に難くない。従って同期のカマドは、平面的な規模ばかりでなく、空間的な規模も大きかったことが推察できる。（これはあくまで早計な推測であるが、漠然と認識されている奈良時代及びその前後の住居址の壁残高が、他の時期に比して高いという傾向は、カマドに使用される長胴甕の隆盛が一因となっているように思われる。今後、良好な資料の増加を待って該期のカマドと他時期のカマドの形態を比較し、土器の形態変化とカマド及び住居形態の変化についても有機的に関連づけてみたい。）

最後に、本遺跡の多くの住居址の火床下にみられた円形、不整形円形状の掘り込みについて考えてみたい。この掘り込みは深さ15cm前後の規模を有するものであるが、砂質ローム及び、貼床に覆われており、カマド使用中に直接的な機能を果たしたとは考え難いものであることは、各遺構の報文でも再三記載した。では、どのような役割を果たしたのであろうか。一つには、水分を意識した行為であったと考えられる。若宮遺跡の層序は第三章に記したごとくで、第I～VI層までは比較的水分の吸収が良い。ところが第VII層の砂礫層は堅くしまっているため、この層で吸収はストップされてしまい、結果的には水はけの悪い土地となっている。従って、堅穴住居址が第VII層直前まで掘り込まれる本遺跡では、水はけの悪い地盤に適応したカマドを構築する必要があり、火床下に灰及び炭化物を使用する行為は燃焼した際、火床下から上昇してくる水分を断つことが目的だった⁽⁴⁸⁾、とみるのが妥当ではなかろうか。もう一つは、構築技法上、必要な行為であったとも考えられるが判然としない。同様に火床下に掘り込みをもつ現象は、周防畑B・西八日町遺跡など近隣の遺跡でもみられ、同一資料の集積及びその比較検討が急務である。

溝状遺構については性格を把握できなかった。

遺物

弥生時代の遺物は遺構が皆無であるにもかかわらず、住居址覆土内、表土内から割合多量の土器・磨製石鏃が出土した。これらは、遺跡の西側に集中して分布する傾向にあり、この近隣に弥生時代の遺構が存在する可能性が高い。弥生土器の所産期は、ほとんどが後期(吉田〜箱清水期)に比定され、H7号住居址の覆土内から出土した磨製石鏃もほぼ同時期の所産と考えられる。

古墳時代後期〜奈良時代では、良好な資料が出土している。第IV章の記載でも再三触れたが、同一住居址出土の土器に古墳時代的な古い様相と奈良時代的な新しい様相がみられる。この土器群の詳細については後述する。

土器はH1号住居址から滑石製紡錘車、H7号住居址から砂岩製、H8号住居址から凝灰岩製の磁石が出土している。

平安時代では、H3・6・14号住居址から土師器・須恵器が出土したほか、H6号住居址から刀子が出土している。H3・14号住居址の遺物は量的に極めて僅少であるため、H6号住居址出土の土師器・須恵器を中心にまとめてみたい。

土師器では甕・台付甕・坏・高台付坏がある。坏は底部の周縁部に回転ヘラケズリが施されるものと、全面に施されるものがあり、内面は黒色研磨されるものが多い。25-5に「大」、25-6に「長」と考えられる墨書が施されている。

須恵器では壺・甕・蓋・坏があり、環状耳付長頸瓶(25-14)、長頸壺(26-15)は、佐久平の同期の竈穴住居址内出土の資料では初見のもので、土器組成を考える上で興味深い。坏は底部にヘラケズリ調整が加えられているものが1点、他の7点はすべて回転糸切りのまま未調整である。H14号住居址出土の坏(58-2)はH6号住居址のものと同型及び調整とも類似しており、ほぼ同一の所産期が求められよう。

以上、本遺跡の平安時代住居址は、土師器と比して須恵器の出土量が極めて高いことから平安時代でも前半期と位置づけられることは確実である⁽⁴⁹⁾が、奈良時代の特徴が見い出せる須恵器坏(26-19)が伴出することなども勘案して前半期でも初期と考えておきたい。

古墳時代後期〜奈良時代の土器について

前述したように本遺跡ではH7・9・12号住居址を中心に、H2・4・5・8・10・13・15・16号住居址から良好な奈良時代の土器が出土し、H1・11号住居址からは、これに近接すると考えられる古墳時代後期の土器が出土している。従来、佐久平における奈良時代土器の研究は花岡弘氏の功績が大きく、「曾根城」遺跡の報告では奈良時代土器の細分案が提示された⁽⁵⁰⁾。本遺跡で得られた奈良時代土器は、曾根城遺跡出土資料よりも若干先行する要素が看取されるため、器形・調整を中心に形態分類を行ない、佐久平における奈良時代土器編年の検討を試みたい。尚、H16号住居址の土器は、他に類例を見ないものであるため、分類の対象から除外した。

土師器は甕をA～D形態、鉢をA・B形態、甌をA・B形態、碗をA・B形態、杯をA～F形態、高杯をA形態、須恵器は壺をA形態、蓋をA～D形態、杯をA～D形態、高台付杯をA形態、甕をA形態に器形を基本として大別し、器形の細部及び調整に相違が認められる場合は、A₁類、A₂類、D₁類、D₂類として細別を行った。

土師器

甕 A形態 球形胴部を呈するもの

- A₁類 最大径は胴部にあり、口辺部は外反する。外面調整は口辺部ヨコナデののち、横位、斜位のヘラミガキが施される。(18-1、39-1・2、51-1・2)
- A₂類 最大径は口辺部にあり、口辺部は外反する。外面調整は口辺部ヨコナデののち、胴部に横位、斜位のヘラミガキが施される。(31-1)
- A₃類 最大径は胴部にあり、器形的にはA₁類に近いが、胴部にはヘラケズリが施される。(39-3、51-3)

B形態 球形に近い胴部を呈するもの

- B₁類 最大径は口辺部にあり、口辺部は短く外反する。外面調整は口辺部ヨコナデののち、胴部に斜位のヘラケズリが施される。内面は口辺部に横位のヘラミガキが施される。(55-1)
- B₂類 最大径は胴部にあり、口辺部は外反する。口辺部はヨコナデ、胴部には斜位のヘラケズリが施される。(21-3)

C形態 長胴を呈するもの。最大径はいずれも口辺部にある。

- C₁類 口辺部が「く」の字状に外反し、胴部は軽くふくらむ。外面調整は口辺部ヨコナデののち、胴部は上位で斜・横位の、それ以下は縦位のヘラケズリが施される。器厚は概して薄く、奈良時代を象徴するものである。(21-1・2、31-3、36-1、39-5、51-5・6・7)
- C₂類 口辺部は短く、強く外反し、胴部に縦位のヘラケズリが施される。器厚は薄い。(39-6)
- C₃類の1 口辺部は外反し、胴部は軽くふくらむ。外面調整は口辺部ヨコナデののち、胴部に縦位のヘラケズリが施される。C₁類と比べ、口辺部の外反度が緩く、器厚も厚い。所謂「鬼高式土器」の延長線上の土器と考えられる。(7-1・2、31-2、39-8、47-1・2)
- C₃類の2 口辺部は大きく外反し、外面調整は口辺部ヨコナデののち、縦位のヘラケズリが施される。器厚はやはり厚い。(47-3・4)
- C₃類の3 口辺部は強く外反し、胴～底部にかけて砲弾形を呈する。外面調整は口辺部

ヨコナデののち、胴部は縦位のヘラケズリが施される。

D形態 小形甕

- D₁類 口辺部は「く」の字状に外反し、胴部はやや大きくふくらむ。外面調整は口辺部ヨコナデののち、胴部に縦位のヘラケズリが施される。最大径は口辺部にある(47-5)
- D₂類 最大径は胴部にある。口辺部は緩く外反し、胴部はふくらむ。外面調整は口辺部ヨコナデののち、胴部上位で横位、下位で斜位のヘラケズリが施される。(51-8)
- D₃類 最大径は口辺部にあり、内外面とも横・斜位のヘラミガキが施される。(40-10)

- 鉢 A形態 口辺部は直線的で、全体的には逆台形状を呈する。外面調整は口辺部ヨコナデののち、胴部は縦位、底部は横位のヘラケズリが施される。(31-5)
- B形態 口辺部と胴部の境に稜を有する。口辺部は僅かに外反し、胴~底部は半円状を呈する。外面調整は口辺部ヨコナデののち、胴部に縦位、底部に横位のヘラケズリが施される。(52-9)
- C形態 口辺部はほぼ直立し、胴~底部にかけて半球状を呈する。外面調整は口辺部ヨコナデののち、胴~底部にかけてヘラケズリが施される。器形的には塊に近いが一応鉢とした。(7-3)

- 甕 A形態 口辺部は緩く、短く外反し、胴部はほぼ直線的。外面調整は口辺部ヨコナデののち、胴部に縦位のヘラケズリが施される。(39-7、51-4)
- B形態 口辺部は外傾し、直線的に底部へ続くと考えられる。多孔を有する例の多いものである。(31-5)

- 壺 A形態 口辺部は外反し外面にヘラミガキ、内面に黒色研磨が施される。(55-3)
- B形態 口辺部は内傾し、底部は丸底を呈する。内外面に丁寧なヘラミガキが施される。(55-4)

- 坏 A形態 素口縁で丸底を呈するもの
- A₁類 口~底部にヘラミガキが施されるもの
- A₂類 底部にヘラケズリが施されるもの
- B形態 口辺部と底部の境に稜を有するもの。底部は丸底でヘラケズリが施される。
- B₁類 稜が明瞭なもの(7-5・6、18-2)
- B₂類 稜が消失化するもの(21-6・7、40-15・16、43-1)

- C形態 口辺部は内傾し、偏平な丸底を呈するもの。口辺部ヨコナデののち、底部はヘラケズリが施される。(21-9・10・11・12・13・14, 36-3, 43-2・3・4, 47-12)
- D形態 口辺部と底部の境に消失化した内稜があり、口辺部は内湾気味に広がる。口辺部はヨコナデ、底部はヘラケズリが施され、ヘラミガキが加えられるものもある。(47-7・8)
- E形態 口辺部は短く外反する。底部は丸底気味で、ヘラケズリののち、ヘラミガキが加えられる。内面には複雑な暗文が施される。(31-6, 40-19)
- F形態 口辺部は内湾気味に開き、底部は平底。口辺部内面に横位のヘラミガキが施される。手握土器とも考えられるが器形的な特徴から一応坏とした。(40-14)
- 高坏 A形態 坏部は素口縁で丸底を呈し、脚部は柱状となる。外面は横位のヘラミガキかヘラナデが施され、内面はすべて黒色研磨が施される。(18-4, 21-15, 40-20, 52-11・12)

須恵器

須恵器には壺、甕、蓋、坏、高台付坏、埴がある。甕は全器形を知り得る資料が乏しいため、形態分類の対象から除外した。

- 壺 A形態 広口で、口辺部から肩部が強く屈曲して張りをもち、丸底の底部に続く。底部には回転ヘラケズリが施される。
- 蓋 A形態 天井部と口辺部の境に形数化した稜を有する。天井部は丸味を帯び、口辺部は僅かに内湾する。外面調整はロクロヨコナデののち、天井部に回転ヘラケズリが加えられる。陶邑II期の前半期の特徴を有するものである。(7-7)
- B形態 天井部と口辺部の境の稜は完全に消失する。陶邑II期後半の特徴がある。
- B₁類 天井部は丸味を帯び、口辺部はほぼ直立する。外面調整はロクロヨコナデののち、天井部に回転ヘラケズリが加えられる。(43-6, 55-7)
- B₂類 天井部から口辺部にかけて丸味を帯びる。外面調整はB₁類と同じ。(52-16)
- C形態 内面にかえりを有するもの。陶邑III期の特徴がみられる。
- C₁類 天井部は丸味を帯び、口辺部は若干屈曲して水平のびて端部に至る。つまみを有するものと考えられる。外面調整はロクロヨコナデののち、天井部に回転ヘラケズリが加えられる。(52-14・15)
- C₂類 天井部は丸味を帯びる。つまみは中央部に向って窪む。外面調整はロクロヨコナデののち、天井部に回転ヘラケズリが加えられる。(31-10)
- D形態 天井部は丸味を帯び、口辺部は鋭く、短く屈曲する。かえりはみられない。

- 調整はロクロヨコナデののち、天井部に回転ヘラケズリを加える。(31-11)
- 杯 A形態 口辺部と底部の境に明瞭な稜を有する。ロクロヨコナデののち、底部は回転ヘラケズリが施される。
- B形態 口辺部は比較的急角度で立ち上がり、外反する。底部はほぼ平底を呈するが若干丸味を帯びる。(31-14)
- C形態 口辺部は僅かに外反し、底部は平底を呈する。器高はB形態にくらべ浅い。外面調整はロクロヨコナデののち、底部は回転ヘラケズリが施される。(31-13・15)
- D形態 口辺部は内湾気味に立ち上がり、端部で短く外反する。底部は平底を呈する。外面調整はロクロヨコナデののち、底部にヘラケズリが施される。(55-8)
- 高台付杯
- A形態 口辺部は内湾気味に開き、底部は平底、高台部は逆台形状を呈する。外面調整はロクロヨコナデののち、口辺下部に回転ヘラケズリが加えられ、高台貼付ののち、ヨコナデが施される。また、底部内面にナデが加えられ、極めて丁寧な調整となっている。(12-1)
- 甕 A形態 胴部は槽円状を呈し、注口部は粘土貼付が行われる。ロクロヨコナデで整形した後、胴中位を2本の沈線で区画し、その内に櫛歯状工具を斜位に押捺して文様帯を構成している。(40-21)

以上、器形、調整を中心に形態分類を行った。

H1・11号住居址出土土器は土師器甕C₂類の1・2、杯B₁類、須恵器の蓋A形態、杯のA形態等、大方が古墳時代後期の所産として理解される。但し、H11号住居址の奈良時代に特徴的な土師器杯C形態の存在は、H1・11号住居址の土器が後期でも後～末期に比定される可能性が強いことを暗示している。

奈良時代土器はH5・7・9・12号住居址を中心に、他の住居址も含めて、おおむね同一時期として包括された。奈良時代を象徴する土器は曾根城遺跡でも見られた口辺部が「く」の字状に外反する土師器甕C₁類や、杯C形態、須恵器杯のB・C・D形態、高台付杯、蓋D形態などがあげられる。一方、古墳時代後期の要素は土師器甕A形態、C₂～C₃類、甕のA類、鉢A・B類、杯A形態・B形態・E形態、高杯、須恵器杯のB形態、蓋B・C形態、甕等に認められ、特に土師器の甕・鉢・高杯や須恵器にその傾向が強い。但し、土師器杯のB形態でもB₂類は、古墳時代後期に特徴的な口辺部と底部の境の稜が消失化する傾向にあり、甕C₂類も口辺部が短く、強く外反し、器形は古墳時代後期的であるが、器厚が薄くなることなど、奈良時代へ傾斜する様相をもつことも看取される。また、土師器甕A形態は従来、古墳時代後期の組成に含まれている土器で、

曾根城遺跡の奈良時代土器の組成には見られなかったものである。このため、一応、古墳時代後期の要素に含めたのであるが、曾根城遺跡例と期を同じくすると考えられる周防畑B遺跡の奈良時代土器には、このA形態が僅少なから認められる。従って、土師器甕A形態は要素はあくまで古墳時代の系譜をひくものであるが、奈良時代の土器組成に加えて大過ないものと考えられる⁽⁶¹⁾。

以上、若宮遺跡のH2・4・5・7~13・15号住居址の出土土器は、古墳時代後期と奈良時代の土器が交錯した感がある。これは曾根城遺跡の第I期にも見られた傾向であるが、相違点は本遺跡例の方がより古墳時代後期的な要素が強いことである。本遺跡の土師器甕A形態、坏B₂類、須恵器蓋B形態は、曾根城遺跡の奈良時代土器組成では含まれなかったもので、特に坏B₂類や、蓋B形態は曾根城遺跡例よりも明らかに先行する要素と考えられる。従って若宮遺跡例を甕C₁類、坏C形態などの最も新しい要素をもって奈良時代と位置づけるならば、曾根城第I期をもって奈良時代初頭とするよりも、若宮遺跡例を奈良時代初頭として考えるのが妥当と言えよう。また、曾根城遺跡では、古墳時代後期の延長線上にある土師器の有無、タタキ手法及びロクロを使用する土器の有無、須恵器蓋の偏平化などを基準に奈良時代土器をI・II期に細分している。しかし、最も時代を反映し、形態の変化が大きい長胴甕はI・II期の間にはほとんど差がみられず、他の器種については類例不足の感が否めない。従って、曾根城遺跡例は現段階では同一時期としておくのが妥当であり、佐久平における奈良時代土器編年は、若宮遺跡例をもってI期、曾根城遺跡及び周防畑B遺跡例⁽⁶²⁾をもってII期と大局的にとらえておきたい。

最後に切迫した状況下での調査、報告書作成に熱意を持って携っていただいた皆様に心から感謝し、記してお礼申し上げます。

註

- (1) 佐久市教育委員会 1972 『北近津・戸坂』
- (2) 佐久市教育委員会 1971 『佐久市長土呂西近津遺跡緊急発掘調査概報』
- (3) 佐久市教育委員会 1981 『清水田』
- (4) 佐久市教育委員会 1981 『下小平遺跡』
- (5) 小諸市教育委員会 1983 『曾根城遺跡』
- (6) 佐久市教育委員会 1974 『うえのじょう—佐久市岩村田上の城遺跡調査概報—』
- (7) 1983年5~8月にかけて佐久市教育委員会によって調査された。
- (8) 1968年東京大学によって調査されたが詳細不明。
- (9) 佐久市教育委員会・佐久考古学会 1979 『周防畑遺跡』
- (10) 佐久市教育委員会 1981 『周防畑B遺跡』
- (11) 前掲註(10) 遺跡中の調査C地区においては相当数のカマドをもつ住居址群が確認され

ている。

- 02 大場整雄 1955 【平出】 県内においては平出遺跡の和泉期後半のカマドが一番古い。
佐久平において該期のカマドが発見されるか否か興味深い。
- 03 佐久市教育委員会 1981 【舞台場】
- 04 佐久市教育委員会 1975 【三塚】
- 05 佐久市教育委員会 1976 【三塚鶴田】
- 06 佐久市教育委員会 1976 【市道】
- 07 佐久市教育委員会 1978 【跡部町田】
- 08 佐久市教育委員会 1975 【三塚町田】
- 09 佐久市教育委員会 1978 【上桜井北】
- 09 佐久市教育委員会 1970 【長野県佐久市野沢平盛田遺跡緊急発掘調査報告】
- 01 長野県教育委員会 1982 【長野県史考古資料編集全一卷(二)主要遺跡(北・東信)】
- 02 1983年5～11月に佐久市教育委員会によって調査された。
- 02 前掲註(6)
- 02 前掲註(7)
- 02 前掲註(1)
- 06 前掲註(2)
- 07 前掲註(1)
- 08 佐久市教育委員会 1972 【岩村田一本柳一佐久市岩村田一本柳遺跡緊急発掘調査概報一】
- 08 佐久市教育委員会 1975 【今井西原】
- 09 前掲註(4)
- 01 前掲註(9)
- 02 前掲註00
- 03 前掲註(3)
- 04 佐久市教育委員会 1980 【北西久保】
- 05 佐久市教育委員会 1980 【蛇塚B】
- 06 佐久市教育委員会 1980 【兵士山】
- 07 佐久市教育委員会 1980 【和田上南】
- 08 小諸市教育委員会 1980 【関口B】
- 08 小諸市教育委員会 1981 【宮ノ北(第1・2次)】
- 08 小諸市教育委員会 1981 【五ヶ城】
- 01 前掲註(5)

- (42) 望月町教育委員会 1978 【犬飼】
- (43) 前掲註(7)
- (44) 前掲註22
- (45) 前掲註33
- (46) 白倉盛男氏の尽力によるところが大きい。
- (47) 白倉盛男氏の御教示による。
- (48) 群馬県文化財保護協会 1974 「歌舞伎A遺跡」[上武国道地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ]
この遺跡の総括で指摘されている。
- (49) 高村博文氏の御教示による。
- (50) 前掲註(5)
- (51) 関東地方の奈良時代土器の組成にもA形態（球胴甕）は含まれる。
- (52) 前掲註(4) 特に調査A地区の資料が中心となり、曾根城資料と類似する。B地区の資料は奈良～平安時代への過渡的な様相も示しており、Ⅲ期設定の基準となる可能性も強い。

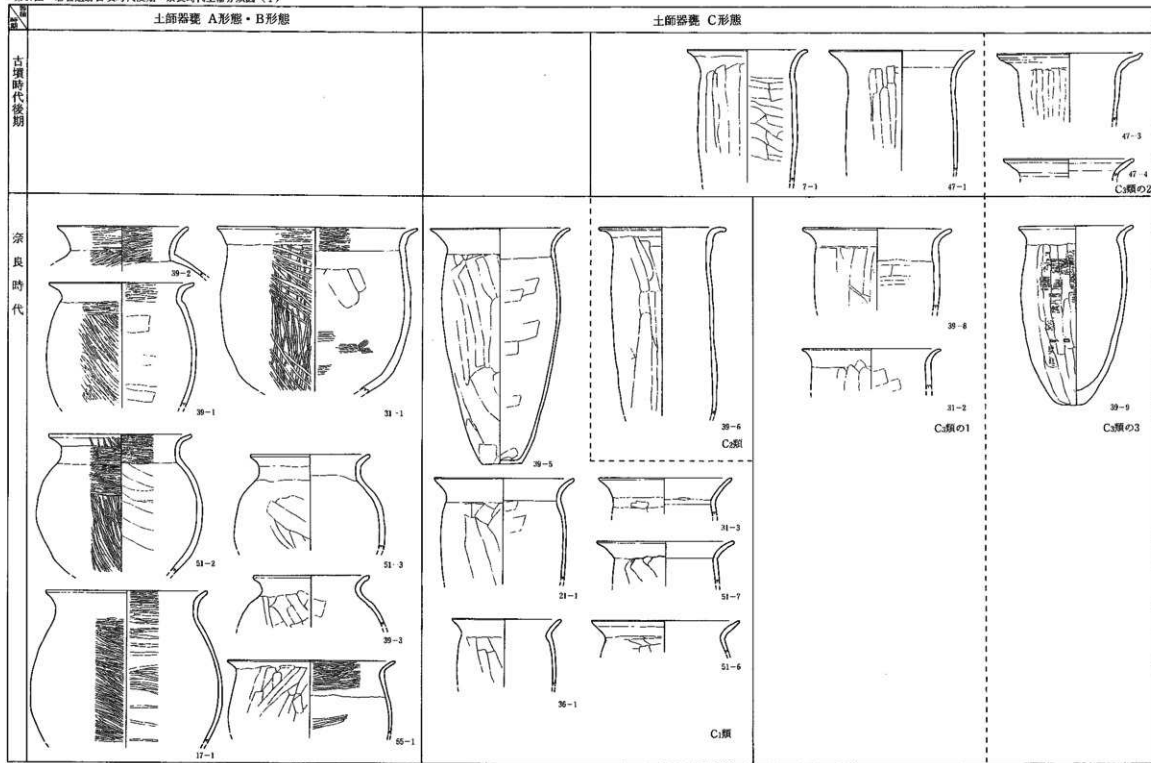
追記

H 6号住居址出土の25-14環状耳付長頸瓶は、赤羽一郎、斉藤孝正両氏の鑑定によって以下の所見が得られたのでここに記したい。







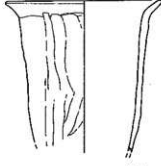
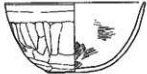
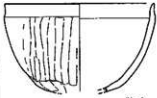


○佐久平には9世紀中葉以降、IG-78、K-14各窯期に代表される猿投窯製品がまず移入されており、本址出土の環状耳付長頸瓶はその範疇に含まれる可能性が高い。（但し、肩～胴部の強度は猿投窯ではみられないので注意。）

○年代は9世紀中葉（IG-78）に比定され、原始灰釉陶器とも言われる製品であること。尚、鑑定を心良くひきりけて下さった、赤羽、斉藤両氏には心より感謝し、記してお礼申し上げます。

第67図 若宮遺跡古墳時代後期～奈良時代土器分類図(1)



第68図 若宮遺跡古墳時代後期～奈良時代土器分類図〈2〉

時代 古墳時代後期	小形甕	甌	埴・鉢の類
		 <p>7-4</p>	 <p>7-3</p>
奈良時代	 <p>47-5</p>  <p>51-8</p>  <p>39-10</p>	 <p>39-7</p>  <p>51-4</p>	 <p>31-5</p>  <p>52-9</p>  <p>55-4</p>  <p>55-3</p>

第69圖 若宮遺跡古墳時代後期~奈良時代土器分類圖(3)

	土器器環 A1類	A2類	B形態	C形態	D・E・F形態	高環	須惠器蓋	須惠器環
古墳時代後期								
奈良時代								

引用参考文献

- 石野博信 1975 「考古学から見た古代日本の住居」 大林太良編 (『日本古代文化の探究 家』
社会思想社)
- 大阪府教育委員会 1976 「大阪府文化財調査報告第28輯 陶器Ⅰ」
- 大塚初重・佐原 真・戸沢充則 1978・1979 『日本考古学を学ぶ (1)・(2)・(3)』 有斐閣
- 岡田正彦 1973 「墨書・刻書土器小考」 (『信濃』 第25巻第4号)
- 岡田正彦 1977 「平安時代土器等の編年試論」 (『信濃』 第29巻第9号)
- 岡田正彦 1978 「信濃の墨書・刻書土器」 (『中部高地の考古学』 長野県考古学会)
- 岡本孝之・関平健三 1979 「第2節 奈良～平安時代」 (『神奈川県埋蔵文化財調査報告15 上
浜田遺跡』)
- 甲野 勇・岡田淳子・服部敬史他 1966・1967・1968 『八王子中田遺跡 資料篇Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』
八王子市中田遺跡調査会
- 小諸市教育委員会 1981 『五ヶ城』
- 小諸市教育委員会 1982 『野火付古墳』
- 佐久考古学会 1980 『周防畑遺跡』 佐久市教育委員会
- 佐々木達夫 1974 「古代村落の変遷過程」(『原始古代社会研究Ⅰ』) 校倉書房
- 笹沢 浩 1972 「善光寺平における古墳時代以降の集落立地の基礎的研究」(『信濃』
第24巻第4号)
- 笹沢 浩・原田勝美 1974 「長野県下出土の須恵器(上)・(下)」 (『信濃』 第26巻第9・
11号)
- 笹沢 浩 1976 「3 十二ノ后遺跡 4) まとめ ウ奈良・平安時代の土器について」(『長
野県中央埋蔵文化財包成地発掘調査報告書——諏訪市その4——』)
日本道路公団名古屋建設局 長野県教育委員会
- 笹沢 浩 1982 「信濃の古代窯」 (『日本のやきもの集成 東海甲信越』) 平凡社
- 杉原荘介・大塚初重編 1973・1974 『土師式土器集成 本編3・4』 東京堂
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』 平凡社
- 東洋大学未来考古学研究会・相武古代研究会 1981 『シンポジウム盤状杯——奈良時代土器の
様相——』
- 中原上宿遺跡調査団 1981 『中原上宿』
- 日本道路公団・山田遺跡調査会 1977 『山田水呑遺跡』
- 花岡弘 1983 「第Ⅴ章総括 奈良時代の土器群について」(『曾根城遺跡』) 小諸市教育委員会

平安学関考古クラブ 1966 【陶邑古窯址群Ⅰ】

八王子市下寺田遺跡調査会 1975 【下寺田・要石遺跡】

村田健二 1980 「カマドの形態分類について」(『潤沼手帳』) 4

福田健司 1978 「南武蔵における奈良時代の土器編年とその史的背景」 (『考古学雑誌』) 第
64巻第3号

森嶋 稔・小林孚・笹沢 浩 1976 【上水内郡誌 歴史編】 上水内郡誌編纂会

森嶋 稔他 1978 【更級地方誌 第2巻 原始・古代・中世編】 更級植科地方誌刊行会

横山浩一 1966 「土器生産」 近藤義郎・藤沢長治編 (『日本の考古学V 古墳時代(下)』)

河出書房新社



1. 若宮遺跡航空写真



1. 若宮遺跡全体写真（東方より）



2. 全体写真（東方より）



3. 全体写真（南方より）



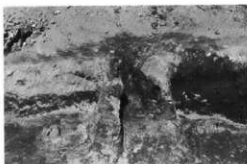
4. スナップ



1. H1号住居址(東方より)



2. H1号住居址(北方より)



3. H1号住居址カマド(南方より)



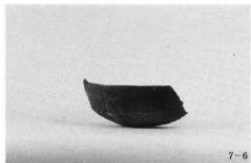
4. H1号住居址カマド(東南方より)



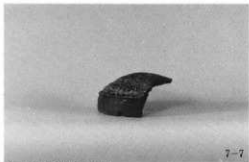
5. H1号住居址カマド実測



1. H 1号住居址出土遗物



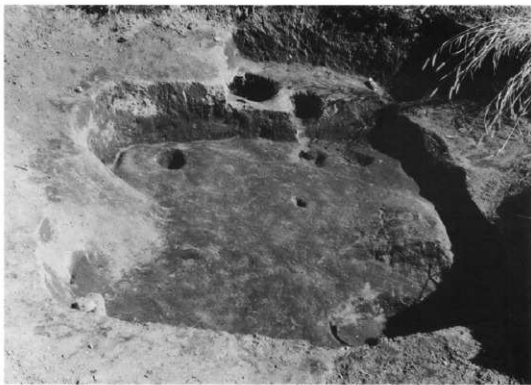
2. H 1号住居址出土遗物



3. H 1号住居址出土遗物



4. H 1号住居址出土遗物



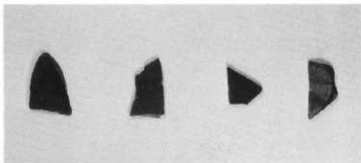
5. H 2号住居址(西方より)



1. H 2号住居址出土遺物



2. H 4号住居址出土遺物



3. H 3号住居址出土遺物



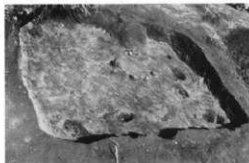
4. H 3号住居址 (東方より)



1. H4号住居址(南方より)



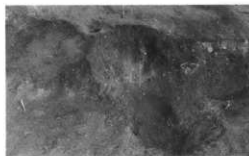
2. H4号住居址カマド完掘



3. H5号住居址(南方より)



4. H5号住居址遺物出土状態

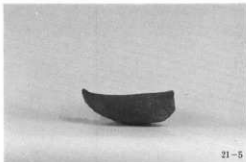


5. H5号住居址カマド完掘



21-1

1. H 5号住居址出土遺物



21-5

2. H 5号住居址出土遺物



21-6

3. H 5号住居址出土遺物



21-8

4. H 5号住居址出土遺物



21-9

5. H 5号住居址出土遺物



21-10

6. H 5号住居址出土遺物



21-13

7. H 5号住居址出土遺物



21-14

8. H 5号住居址出土遺物



1. H6号住居址(東方より)



2. H6号住居址カマド



1. H 6号住居址遗物出土状态



2. H 6号住居址遗物出土状态



3. H 6号住居址出土遗物



4. H 6号住居址出土遗物



5. H 6号住居址出土遗物



1. H 6号住居址出土遺物

25-6



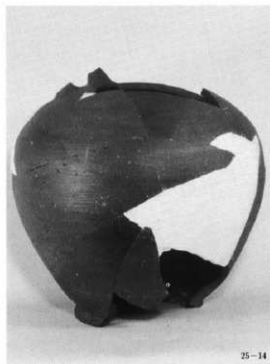
2. H 6号住居址出土遺物

25-9



3. H 6号住居址出土遺物

25-13



4. H 6号住居址出土遺物

25-14



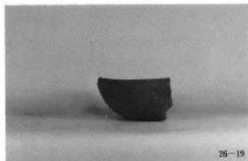
5. H 6号住居址出土遺物

26-15



6. H 6号住居址出土遺物

26-18



26-19

1. H 6号住居址出土遺物



26-20

2. H 6号住居址出土遺物



26-21

3. H 6号住居址出土遺物



26-22

4. H 6号住居址出土遺物



26-23

5. H 6号住居址出土遺物



26-24

6. H 6号住居址出土遺物



26-25

7. H 6号住居址出土遺物



26-26

8. H 6号住居址出土遺物



28-1

9. H 6号住居址出土遺物



1. H7号住居址（西方より）

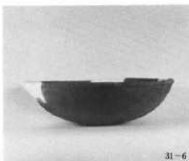


2. H7号住居址カマド



1. H 7号住居址出土遺物

31-1



31-6

3. H 7号住居址出土遺物



31-7

4. H 7号住居址出土遺物



31-5

2. H 7号住居址出土遺物



31-10

5. H 7号住居址出土遺物



31-15

6. H 7号住居址出土遺物



33-2

7. H 7号住居址出土遺物

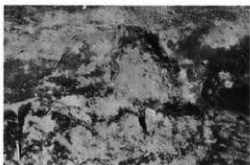


33-1

8. H 7号住居址出土遺物



1. H 8号住居址（南方より）



2. H 8号住居址カマド（南方より）



3. H 8号住居址出土遺物



4. H 9号住居址（東方より）



5. H 9号住居址（西方より）



1. H9号住居址遺物出土状態



2. H9号住居址遺物出土状態



3. H9号住居址カマド



1. H9号住居址カマド



2. H9号住居址カマド (真上から)



3. H9号住居址出土遺物

39-1



4. H9号住居址出土遺物

39-2



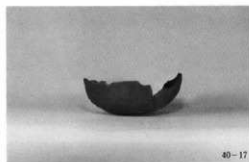
5. H9号住居址出土遺物

40-14



6. H9号住居址出土遺物

40-16



7. H9号住居址出土遺物

40-17



8. H9号住居址出土遺物

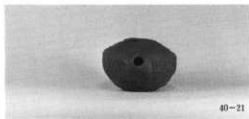
40-20



1. H 9号住居址出土遺物



2. H 9号住居址出土遺物



3. H 9号住居址出土遺物



4. H 9号住居址出土遺物



1. H10号住居址(南方より)



2. H10号住居址(西方より)



4. H10号住居址出土遺物



3. H10号住居址カマド完掘



1. H11号住居址（南方より）



2. H11号住居址カマド



47-1

1. H11号住居址出土遗物



47-2

2. H11号住居址出土遗物



47-7

3. H11号住居址出土遗物



47-8

4. H11号住居址出土遗物



47-9

5. H11号住居址出土遗物



47-10

6. H11号住居址出土遗物



47-11

7. H11号住居址出土遗物



47-13

8. H11号住居址出土遗物



1. H12号住居址(南方より)



2. H12号住居址カマド及びピット



3. H12号住居址カマド



4. H12号住居址遺物出土状態



1. H12号住居址出土遗物

51-2



2. H12号住居址出土遗物

51-4



3. H12号住居址出土遗物

51-8



4. H12号住居址出土遗物

52-9



5. H12号住居址出土遗物

52-11



6. H12号住居址出土遗物

52-12



7. H12号住居址
出土遗物

52-14



8. H12号住居址
出土遗物

52-15



9. H12号住居址
出土遗物

52-16



1. H13号住居址(南方より)



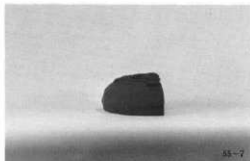
55-1

2. H13号住居址出土遺物



55-4

3. H13号住居址出土遺物



55-7

4. H13号住居址出土遺物

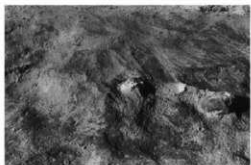


55-8

5. H13号住居址出土遺物



1. H14号住居址（南方より）



2. H14号住居址カマド



3. H14号住居址カマド



58-2

4. H14号住居址出土遺物



1. H15号住居址(西方より)



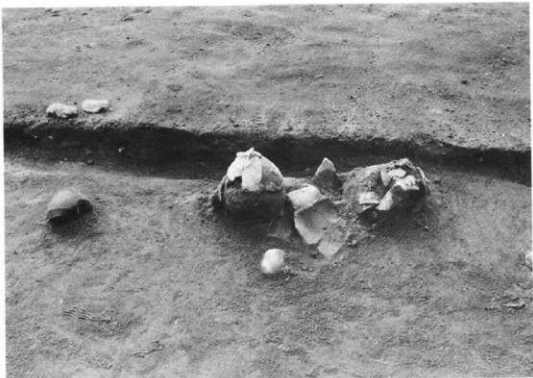
2. H15号住居址出土遺物



3. H15号住居址出土遺物



4. H16号住居址(南方より)



1. H16号住居遺物出土状態(北方より)



2-5. H16号住居遺物出土遺物

長野県佐久市若宮遺跡発掘調査報告書

昭和59年3月発行

編集者 若宮遺跡発掘調査団

発行者 佐久市教育委員会

印刷所 株式会社 佐久印刷所

